

361
72

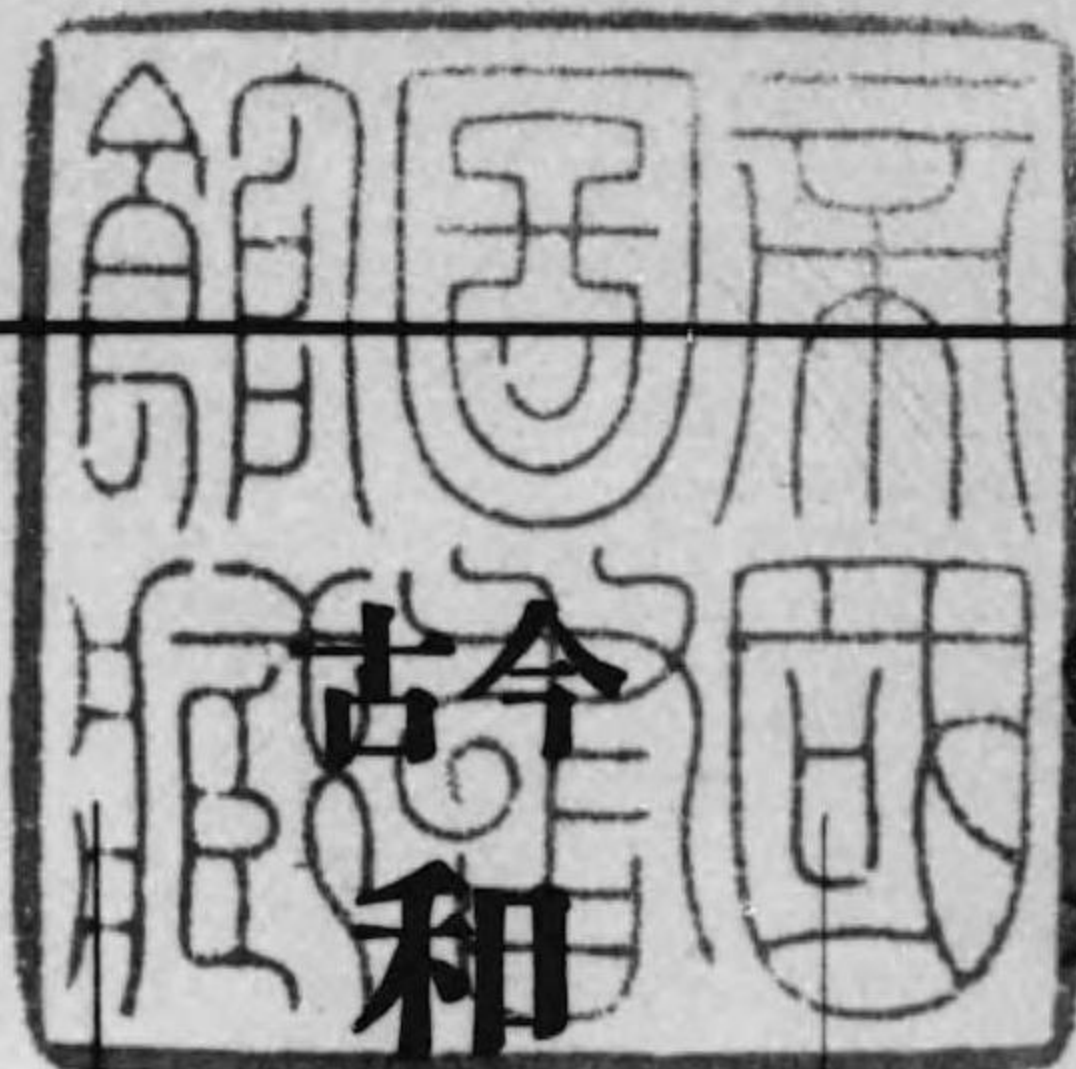


始



699

特232
419



鈴木胤著

古今和歌のうひまなび

大阪 宏元社 發賣



鈴屋大人の玉勝間に或人の初學の詩作るへきやうを教たる説を擧
て云く作り習ひに二三百も作る間の詩は詩集に収録すへきには非
されは古人の詩を遠慮なく剽竊して作り覚え唐詩礎明詩礎詩語碎
金をとやうの物にてこしらふるか宜なりかと云るに實によき教さ
まなり歌よむも専することにて初學の程は詞の連きと心の趣も唯
ふりたる跡に寄てはよみ習ふへきわさなりけると云れたりされと
其ふりたる跡たやすく得らるゝ物に非す古集の歌を孰れよみ解て
物せむはこよなく宜しといへとも初學の程はいとかたき事故中に
は迂遠なりと思ひ捨るも有へしかは今世に行はるゝふるの山踏麓
の塵と云二部の書は初學の爲に設たれとも互にあかぬ所なむある
そは山踏は上世の高き調を本となしたれは心も詞も近く及ふへき
際に非す麓の塵の方はもとめて中昔の手ふりなれば假名遣も何も

そのてうにていにしへを學ふにはふつに益なしこゝに吾師檀屋大人は世に云ふ歌人ならされとも古の道を興し玉ふ時に遇て歌の様の下れるをいかてよそに見なさむやとて暇のまに〜廣く雅言を聚め證歌は古きも新しきも盡く出し近より遠に沂り遠より近に涉らむれうに此書は物したまへるなれば初學の輩にいと手つきよき事此を除きて世に又有ことなればおのれ大人の世繼かねなる光胤主と相はかり其草稿を寫し正してかくゑり卷とはなしたるなりあはれ今より此書に據て歌よみ習はむ人々は譬千里の遠を隔て萬代の久しきをこゆとも同し學の腹からとうるはしく思ひなすへくなむ

弘化三年八月十日あまりこゝぬか越の國の道のしりなる平譽重識

今古和歌字比麻奈飛一之卷目錄

春之部

春	一	春雪	三	春眺望	四	落花	三	鷹	八〇
立春	一	餘寒	二	歸鴈	四	遲日	五	馬醉木	八三
年内立春	四	梅	七	春駒	四	遊絲	六	梨花	八三
舊年立春	四	柳	三	雉	四	春興	六	牡丹	八四
元日	六	若草	三	雲雀	五	野遊	六	杜若	八五
初春	八	春草	三	喚子鳥	五	三月三日	七	欸冬	八六
早春	八	蕨	三	櫻	五	曲水宴	七	藤花	八六
春冰	一〇	早蕨	三	花	五	桃花	七	暮春	九一
春日	二	春曙	三	尋花	五	董菜	七	殘春	九一
若菜	四	春月	三	待花	五	春田	七	惜春	九二
霞	六	春雨	四	初花	六	苗代	七	三月盡	九三
鶯	九	春風	四	盛花	六	蛙	七	閏三月	九五
殘雪	三	春望	四	惜花	六	燕	七	閏三月盡	九五

夏之部

目次

一

今古和歌宇比麻奈飛二之卷目錄

戀之部

戀	一	人傳戀	九	誓戀	一五	稀逢戀	元
初戀	二	見戀	九	契戀	一六	邂逅逢戀	元
忍戀	三	不見戀	一〇	契變戀	一七	逢不遇戀	三
忍久戀	四	未見戀	一〇	契絕戀	一七	稀戀	三
忍經年戀	四	僅見戀	二	憑戀	一七	語戀	三
難忍戀	五	纔見戀	二	不憑戀	一六	別戀	三
忍切戀	五	夢見戀	二	待戀	一六	欲別戀	三
思不言戀	六	尋戀	三	待便戀	二〇	歸戀	三
欲言出戀	七	久戀	三	待使戀	二〇	後朝戀	三
初言戀	七	舊戀	三	待空戀	二〇	名立戀	三
言始戀	七	經年戀	三	待不來戀	二〇	立名戀	三
洩始戀	七	祈戀	四	不待戀	二二	歎無名戀	三
言始後增戀	七	祈空戀	一五	違約戀	二二	惜名戀	三
聞戀	八	祈不逢戀	一五				

目次

五

寒樹	二九	鴨	二九	鷹狩	三一	臨時祭	三一
寒松	二九	鴛鴦	二九	狩場	三一	神樂	三一
椎柴	三〇	殘鴈	三〇	野幸行	三二	佛名	三三
冬風	三〇	網代	三〇	炭竈	三三	早梅	三五
木枯	三一	霰	三一	薪	三四	歲暮	三五
冰	三一	雪	三一	爐火	三六	惜年	三七
冬月	三二	初雪	三二	埋火	三七	待春	三七
千鳥	三二	深雪	三二	衾	三七	魂祭	三六
水鳥	三三	朝雪	三三	新嘗會	三九	除夜	三九
鴛鴦	三三		三三	豐明節會	三〇		三〇

目次

四

惜人名戀	三七	無名立戀	三七	不惜名戀	三元	顯戀	三元	增戀	四〇	逢增戀	四〇	逢後增戀	四〇	切戀	四二	懇切戀	四二	思戀	四二	初疎後思戀	四三	片思戀	四三	片戀	四三	互片思戀	四四	相思戀	四四	不相思戀	四四	思煩戀	四五
思昔戀	四六	分思戀	四六	思疲戀	四七	無實戀	四七	會無實戀	四七	乍臥無實戀	四七	厭戀	四八	被厭戀	四八	厭身戀	四八	偽戀	四八	憑偽戀	四九	變戀	四九	俄變戀	四九	漸變戀	四九	忘戀	五〇	欲忘戀	五〇	難忘戀	五〇
不忘戀	五三	被忘戀	五四	悔戀	五四	後悔戀	五四	恨戀	五五	怨戀	五五	恨身戀	五五	恨人戀	五五	絕戀	五五	欲絕戀	五五	絕後戀	五五	絕久戀	五五	絕經年戀	五五	馴戀	五六	疑戀	五六	立門戀	五六	過門戀	五六
催戀	六〇	驚戀	六〇	踈戀	六一	隔戀	六一	隔物戀	六一	隔一夜戀	六一	隔二夜戀	六一	隔三夜戀	六一	隔日頃戀	六一	隔月戀	六一	隔年戀	六一	隔遠路戀	六一	誂戀	六一	白地戀	六一	隱戀	六一	隱在所戀	六一	爭戀	六一
有妨戀	六六	被妨戀	六六	障戀	六七	通書戀	六七	返書戀	六七	被返書戀	六七	戀書	六七	占戀	六七	戀下	六七	被知戀	六七	被知人戀	六七	不知人戀	六七	不被知人戀	六七	戀不知程	六七	不知為方戀	六七	思貴人戀	六七	思高人戀	六七

天象	六六	天	六六	日	六九	星	九〇	雲	九二	雷	九三	風	九三	嵐	九五
戀遠人	七七	近戀	七六	旅戀	七五	旅宿戀	七六	羈中戀	七六	老後戀	七六	幼戀	七六	遠戀	七七
獨居戀	七九	戀夢	七九	夢中戀	七九	夢後戀	七九	戀面影	七九	戀形見	七九	戀命	七九		
懸命戀	八二	戀憂喜	八二	祕戀	八三	試戀	八三	春戀	八三	夏戀	八四	秋戀	八五		
冬戀	八六	戀天象	八六	戀地儀	八七										
朝	一〇三	晨	一〇三	晝	一〇三	夕	一〇三	夜	一〇四	宵	一〇四	地儀	一〇五	山	一〇六
根	一〇七	嶺	一〇七	嵩	一〇七	窟	一〇八	柏	一〇八	谷	一〇九	洞	一一〇	岡	一一一
關	一一二	道	一一二	路	一一二	驛	一一三	坂	一一三	林	一一四	杜	一一五	野	一一五

菅	麥門冬	紫	紅	藍	鞭草	蘿	蔓	思草	忍草	忘草	葎	蓬	苔	芝	草
一七三	一七三	一七二	一七二	一七一	一七一	一七〇	一七〇	一六九	一六九	一六八	一六八	一六七	一六七	一六六	一六五
菱	蓴	苳	三稜	莎草	海松	和布	藻	莫鳴草	蘋	濱木綿	葦	蘆	薦	菰	
一七九	一七九	一七九	一七九	一七八	一七七	一七七	一七六	一七六	一七五	一七五	一七四	一七四	一七三	一七三	一七二
栢	柏	檜	檜	榧	杉	榲	松	根	葉	梢	枝	木	竹	篠	蓼
一九二	一九〇	一九〇	一九〇	一八九	一八九	一八七	一八七	一八五	一八四	一八四	一八三	一八三	一八二	一八〇	一八〇
鷄	鶴	鳥	柿	柴	楓	合歡木	榲	桑	栗	楸	榿	榿	桂	椿	
二〇〇	一九八	一九七	一九六	一九六	一九五	一九五	一九四	一九四	一九三	一九三	一九三	一九二	一九二	一九一	一九一
猪	狐	猿	犬	馬	牛	虎	龍	鷲	百舌鳥	鷓	鵲	鳩	雀	鳥	
二〇九	二〇九	二〇八	二〇八	二〇七	二〇六	二〇五	二〇五	二〇四	二〇四	二〇三	二〇三	二〇二	二〇一	二〇一	

雜之部中

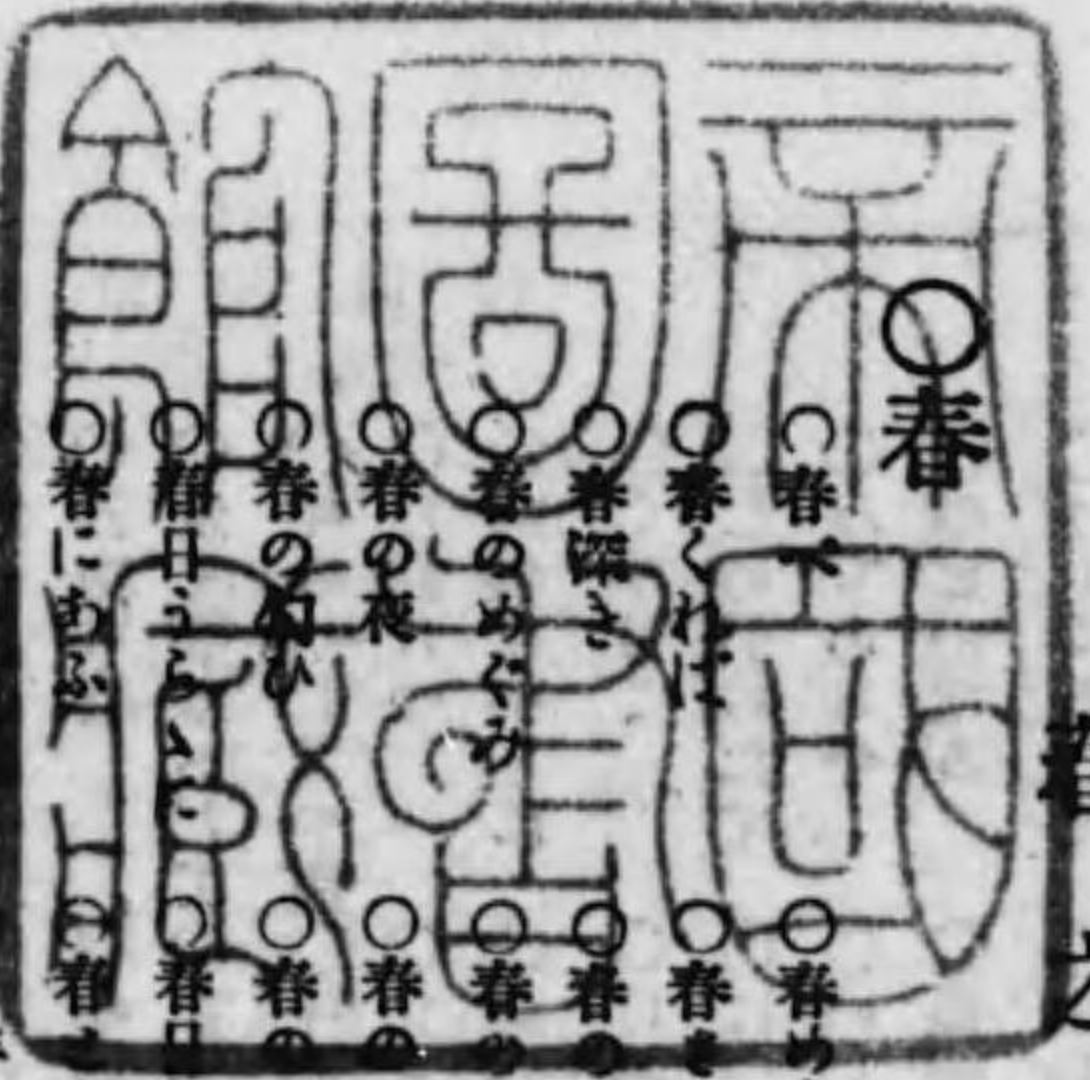
磯	崎	津	湊	島	浦	瀉	濱	湖	海	畑	田	巖	岩	石	橋	原
一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三	一七三
池	澤	沼	江	岸	淀	河	瀧	泊	渡	洲	灘	門	迫	瀨	淵	沖
一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九	一七九
水	故	大	大	禁	故	古	都	國	温	鹽	潮	浪	堰	水	井	堤
一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇
砌	庭	軒	閨	庵	宿	屋	家	田	山	山	山	山	市	村	里	郡
一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五	一九五
	古	蕭	古	寺	幽	幽	閑	閑	隣	門	窓	戶	柱	籬	垣	園
一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六

社	釋教	無常	追福	靈祭	陵墓	葬
二九六	二九七	二九六	二九五	二九五	二九四	二九四
住吉	春日	賀茂	岩清水	出雲	伊勢	社頭
三〇三	三〇三	三〇二	三〇二	三〇一	三〇〇	二九六
慶賀	祝	神祇	幣	木綿	注連	日光
三〇六	三〇六	三〇五	三〇五	三〇四	三〇四	三〇四
四十賀	年賀	元服	裳著	袴著	七夜	産屋
三三三	三三二	三三二	三三一	三三一	三三一	三三〇
新室	新婚	九十賀	八十賀	七十賀	六十賀	五十賀
三三六	三三六	三三五	三三五	三三四	三三四	三三四

今古和哥字比麻奈飛

春之部

鈴木重胤 編輯



- 春まげく ○春なげら ○春まげく ○春かたまげく ○春なれや
- 春くれば ○春されば ○春かけて ○春わかみ ○春浅き
- 春深き ○春のこゝろ ○春のいろ ○春のこゑ ○春の一時
- 春のめぐみ ○春あかつき ○春の朝々 ○春のゆふべ ○春のたそかれ
- 春の夜 ○春のせき ○春のやまぶみ ○春の行末 ○春のかけ
- 春の如か ○春のひかり ○春の日すがら ○春日のどけし ○春日ゆたかに
- 春日さくら ○春日たのしき ○春やいつ ○春ぞえならぬ ○春はたゞ
- 春にもいへば ○春さて ○春ぞこや ○時ははる ○奥あるはる
- いく世のはる ○今年も同下はる ○水のはる ○花のはる ○あまねきはる ○打なびくはる
- のどけきはる ○うらゝなるはる ○みどりのはる ○かぎろひのはる ○三冬つきはる ○冬ごもりはる
- 冬木なすはる ○花鳥のはる ○木のめはる ○和布かるはる ○梓弓はる ○梓弓おしてはる
- しらま弓はる ○ころもはる ○毛衣をはる ○佐保姫の衣はる ○世は春になる ○世は春なれや
- 此春ばかり ○霞む春日 ○むつき ○きさらぎ ○やよひ

○立春 ○はるたつひ

節分をいふなり春立つ日一日をかざれり哥がら忌はしからぬやういかにも氣高か

○春立日 ○春立くらし ○春くらし ○春きめ ○春のくる ○春きては
 ○春はきにけり ○春やきぬらん ○春きてみゆる ○春くるみち ○春のくるかた岡 ○春のこゆる
 ○春に今 ○春はけふ ○春てふけふは ○春のはじめ ○春めく ○春さいへば
 ○春さいふより ○春さいふ名 ○春さばしるし ○春にあらたまる ○春はのどかに ○春はうらまに
 ○春のひかり ○春にあふ ○春をむかふ ○春待えたる ○春のよごさ ○春のほごさ
 ○春のほひ ○春の初空 ○春日かけ ○春のはつ日 ○立かへる春 ○東よりくる春
 ○四方の春 ○年ある御代の春 ○このめも春に ○けふより春さ ○秋豊かに春たつ ○汀に春しる
 ○氷そ春のへだて ○さざ波よする春風 ○年たつ日 ○年のほつめ ○年のしるし ○年あらたまる
 ○年のへだてや霞 ○年のなだまき ○あら玉の年立 ○この年のほつめ ○けふをこ年 ○きのふを古年
 ○む月たつ ○立そむる ○立とやすし ○立やおそきさ ○東より立 ○雲よりたつ
 ○神代ながらに ○神代おぼゆる ○神代のまゝに立 ○この日の本 ○もろこし人も ○もろこしまでも
 ○くすりこ ○けふなめ初る薬 ○もちひの鏡 ○わか水くむ ○門の松竹 ○千ひろのみしめ
 ○しめ引わたす ○ばつ夢 ○ほごく祝ふ ○豊のほごさ ○人の詞も ○わかえつよくむ
 ○みちある今 ○いくめぐり ○君が代は ○惠あるれき ○千里をかけて ○千年のかけ
 ○のどかなる ○長閑なる心にて ○心ものごに ○うらまにいづる ○きのふにはにぬ
 ○けふにあけて ○けふさいへば ○けふ立かへる ○けさみれば ○けさあらたまる心 ○しのよめの空
 ○あけぼの空 ○明ゆく空 ○明わたる空 ○明るみ空に ○明るより ○ほのくさあくる
 ○ほおらかに ○れもせてあかす空 ○降の横雲 ○はつ日かけ ○はつ日の匂ふ
 ○豊さかのぼるはつ日 ○朝日子のかけ ○朝日のままひ ○朝日かげ匂ふ ○朝日影匂へる山 ○出る日のひかり

○空よりみえて ○四方のそら ○あまの月 ○久かたの天のみ空 ○天原ふりさけみれば ○天地の惠
 ○天地の底ひのうら ○天雲の八重きき分て ○雲の空も ○雲のほるかに ○九重の雲の
 ○風もけぬるし ○吹かほる風 ○吹風もなごむ ○かすみそむ ○霞をしく ○霞の衣
 ○霞てみゆる ○霞をかけて ○霞むかたより立 ○山もかすみて ○けさはかすめる ○けふよりかすみ
 ○明ればかすみ ○みざりにいすむ ○うらくかすみ ○みゆきもかすみ ○松風かすみ ○雪もけなくに
 ○雪の下水岩たまく ○雪水のさくる ○氷ながる ○氷のさけばとむ ○氷おし水 ○岩間のこぼり
 ○つらぬし ○水上よりや ○澤に立そふ ○鳥のはつ聲 ○かけのほごさ ○鶯のはつ音
 ○鶯もみてぞきいる ○立枝の梅もさく ○松のみざり ○玉江のまこもつのごむ ○もゆる小草
 ○なきのやけ原 ○あしたの原 ○白雪のふりにし里 ○ちちの山 ○細谷川 ○八島の外も
 久かたの天の香具山この夕かすみたなびきはる立らしも
 冬すぎて春しきぬれば年月はあらたまれども人はふりゆく
 袖ひぢて結びし水の氷れるも春たつけふの風やとくらん
 けふよりはをぎの焼原かき分て若なつみにとたれをさそはん
 春がすみたてるをみればあら玉の年は山よりこゆるなりけり
 春たつといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさはみゆらん
 みしまえに角ぐみわたるあしのねの一夜のほどに春めきにける
 打なびき春はきにけり山川の岩まの氷けふやとくらむ
 きのふかもあられふりしかしがらきのと山のかすみ春めきにけり
 春のくるあしたの原をみわたせば霞もけふぞ立はじめける

よみ人
 しらす
 兼 貫 同 兼 貫 同 兼 貫 同 兼 貫 同 兼 貫 同 兼 貫 同
 覽 之
 王 之
 幹 之
 忠 之
 好 之
 顯 之
 惟 之
 後 之
 頼 成 季 忠 岑 幹 王 之

ほのぐと春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたなびく
みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり
とけぬるかかけひの水の音づれに春しりそむるみ山への里
朝まだき霞たなびく卷向のもづきがたけに春立らしも
み冬つき春立けらし久かたのひたかみの國に霞たな引
東路に春立にけりから舟の對馬の浪ものどけかるらし
さし出るこの日の本の光よりこまもろこしもはるやしるらん
天の原はる立らしも朝がすみうらやすの名に立みちにけり
時となく雪けもよほす大空の霞に明て春は來にけり
とし立てはしめて明る天の戸を出る日影も神代也けり
天てらすひかりあまねき君が代のかげうらけく春はきにけり
和田の原浪かき分ていづる日に龍の都の春も立らむ
うちなびき春はきにけりあし原や神風たえぬ國をしるべに

○年内立春

舊年立春 としの内に春たつ ふるとしに春たつ
いづれも冬の節分をよむなりさて物につらねしるす時に春には舊年立春冬には年
内立春とかくべし

- 春
- 春をかされて
- 春やいそぎて
- 春よりさき
- 春のけしきのしろし
- 二度きたる
- さきたる春
- かされて春の
- まちあへず春くる
- 年の内に

太上天皇
攝政
小侍
家隆
眞淵
同
宣長
千産
勝繼
景樹
譽正
有功
同

- 年のこなた
- 年のあまりに
- 年だにいまだ
- ふるとしに
- 朝霞年をこめて
- 冬の日かず
- まだくれなくに
- けしきばかり
- 霞ばかりぞしる
- 年のな
- 年ののこして
- くればてね年
- ふる年の一夜
- まだきは越ぬ月なみ
- 冬さはいはト
- くれのこる
- まづのぞかなる
- 霞かゝれる雪
- 年のおほりに
- 年もへだてず
- のこりある年
- きのふをこぞ
- のこる日數
- 冬をしのぎて
- くれ行も心のぞけし
- なほ空寒く
- かすまね程に
- 年をこめて
- 年もかはらで
- こぞことし
- 一年をわきかぬる
- 日數あまたに残る
- いまだ冬にて
- ゆくもかへるも
- 雪まをさめて
- 年のこる
- 年のふたゝひ
- こぞはいふばかり
- 大かたの年まだ明ぬ
- 日數もまたす
- まだ冬ながら
- いさばやも
- 霞みばかりに

月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびき春立らしも
年の内に春はきにけり一年をこぞとやいはむこ年とやいはん
あら玉の年もかわらで立春はかすみばかりぞ空にしりける
雪ふかき山はかすめる色もなし年の内なるはるの明ぼの
としの内に春たつとを春の野の若なさへにもしりにける哉
としの内に春は立きぬいづかたにのこる日數を思ひわかまし
としの内に春はきぬるを何を又おくりむかふといそぐなるらん
春といへばよしのゝ山の朝がすみ年をこめてもはや立にけり
すがのねに雪はふりつゝけぬが上に冬をしのぎて春はきにけり
かぞふればまだきはこるぬ月なみに年をおそひてきたる春哉

家持
元方
御製
前太政入道
實之
長眞
重之
長女
契明
久胤

○初春 早春 はるのはじめ はじめのはる

これはかならず春たつ日をさらず大らかに春のはじめつかたをよむ但この二題に
立春の心をもよむべしといへども立春の題には初春早春のころをばよむまじき
なりといへり

- 春さぬま ○春來にけらし ○春來るらし ○春めきにけり ○春淺み ○春たちぬまや
- 春てふなべに ○春しりそむる ○春嬉しくも ○春きてみゆる ○はつ春風 ○春のはつ風
- 春のいかんば ○春のひかり ○春の匂ひ ○春のはつ花 ○春のけしき ○春のしるし
- 春のくるみち ○春さもいはず ○春ぞあまれき ○春をしらする ○春にしなれば ○朝になる空
- 春におくれぬ ○待こひし春 ○世は早も春になる ○世は春なれや ○さかゆく春にあふ ○む月の淺き
- うれしきふしの初め ○けふあらたまる ○神代もまづや ○春日の匂ひ ○朝日の匂ひ
- 日かげうらまか ○天つそら ○のどかなる空 ○のどかにもやがて成行
- いさゞのどげし ○めもはるく ○谷風に ○谷風ぬるみ ○浦風ぬるま ○まだ風さゆる
- さゆるあらしの ○風まぜに雪みふる ○打ざらし雪ふる ○あわ雪ぞふる ○雪けの雲も ○雪けながらの八重雲
- 雪消の水 ○雪のむら消 ○雪のきえま ○まだ雪消ぬ ○つらゝぬし ○つらゝのさくる
- 氷ぬし ○氷くだくる ○くひのこほり ○谷のこほりも ○さくる氷の ○まだ深からぬ
- 春雨に色つく ○木めもけふる ○木草もへ出る ○わか草もゆる ○初草のはつか ○草もみどりに
- 草のはつか ○もゆる小草 ○雪まの草 ○かきれの草も ○角ぐむあし ○わかなつむ
- 野へのわかぬ ○萩の焼ふ ○柳めはりて ○うめの初花 ○ほゝゑむ梅 ○鶯さなく
- 朝戸あけて ○宿のあそび ○うすきかすみ ○うすがすみせり ○かすみわたりにて ○かすみ匂ひて
- かすみをわけて ○かすむも寒し ○かすむものから ○かすむもなし ○かゝるもまたで立霞 ○明ればかすむ

万 同 同 古 後 拾 千 新 玉 續 風

- 朝げの烟かすむ ○うらくかすむ ○いつしかかすむ ○山松の其一入や霞む ○時しらぬ雪もかすめる
- み雪ふる尾上の霞 ○高根かすみて ○山のはごに霞む ○山はかすめど ○むら山かすむ ○かすむ遠山
- 山べのどげき ○四方の山のは ○位山はるかにてらす ○野づら山さは ○野山のけしき ○萩の焼原
- 小ざゝばら ○山の下水 ○水のしらなみ ○さゞ波よする
- かすみたつ野のべの方にゆきしかば鶯鳴つ春になるらし
- いにしへの人のうゑけむ松がえに霞たなびき春はきぬらし
- 雪の内に春はきにけり鶯の水れる泪いまやとくらん
- 春やとき花やおそきときゝわかむ鶯だにも鳴ずも有かな
- いつのまにかすみ立らん春日野の雪だにとけぬ冬とみしまに
- あたらしき年にはあれど鶯の鳴ねさへにはかわらざりけり
- 谷川の氷もいまだ消あへぬにみねのかすみはたな引にけり
- 雪深き岩のかけみちあとたゆるよし野の里も春めきにけり
- 山ふかみ春ともしらぬまつの戸にたえぐかゝるゆきの玉水
- いつしかもかすみにけらしみよし野やまだふる年の雪もけなくに
- みねの日やけさはうらゝにさしつらん軒のたるひの下の玉水
- 春ぞとは思ふ物から風まぜにみ雪ふる日はいとゝ寒けし
- あたらしき年のはじめに年立てかけのどかなる春日なるかも
- いく千度はるの山松音かへてかはらぬかげもあたらまるらん

乙麻呂
よみ人
しらず
二條后
言直
よみ人
しらず
同
長能
堀川
式内親王
前關白
好忠
伏見院
眞淵
枝直

山くれば雪もけなくなかざりし鳥こそきなけ春きたるらし
 花鳥にとふばかりおもほえてけふうれしくも春にあひけり
 小ざゝ原一夜の程にくる春やうれしきふしのはじめなるらん
 ふりにけるならの下かげ雪きえて道あらはるゝ御代の春哉
 青柳の心もけさやゆらん風こそはるのはじめなりけれ
 まこも草もえ出る春になりにけり淀の澤水うちけぶりつゝ
 貝ひろふ少女が袖のうらみれば沖にもかすむ朱のそぼ舟

宣長 廣海 千蔭 光房 景樹 知紀 有功 有卿

○春氷

春のこをり 春のうすらひ

氷の解る由をもまた解けかぬる由をもさへかへりまた結ふ由をも詠むべし

- 氷こほらぬ ○氷つれなし ○氷ながるゝ ○氷さくらし ○氷さけて ○氷のさざし
- 氷のこらぬ ○氷の下は ○氷るみぎは ○こほる井せき ○こほる夜ごこに ○氷にへだつ
- 岩間のこほり ○夜のまのこほり ○夕は氷る ○みなぎは氷る ○水上こほる ○さざ波こほる
- あつろにこほる ○まだ霜こほる ○たるひしてけり ○かけひの垂氷 ○春のうすらひ ○けさのつらゝ
- 川のひ ○こぞのまゝにや ○むすふ ○むすぶまもなく ○むすべさくる ○むすびかへぬる
- またむすぶ ○さぢけらし ○岩間さぢし ○きゆる ○さくる ○さくるも早き
- 下さくる ○打さくる ○さけかれて ○さけやらぬ ○さけてぬるめる ○かたへはさけて
- 霰したる ○たえゆく ○はかなくたゆる ○むらくのこる ○つれなくのこる ○のこるさもなき
- 残りすくなき ○あさみゆる ○ひまみゆる ○名ごりのみ ○日かげさす ○朝日まつまの
- はるの日に ○はる風もまたで ○はるながら ○風わたる ○さゆるあらしに ○さえかへり

古 後 拾 新 續 同 代 同

○かすむ川戸 ○岩もる水も ○みぎはの波に ○下ゆくなみ ○打出る波 ○水のしらなみ
 ○春の池水 ○池のこゝろ ○心もさけて

谷風にとくる氷のひまごとに出る波やはるのはつ花
 水の面にあやおりみだる春風や池の氷をけふはとくらむ
 春くれば山田の氷うちとけて人の心にまかすべらなり
 岩間とちし氷もけさはとけ初て雪の下みづみちもとむらん
 いつしかとけさは氷もとけにけりいかでみぎはに春をしるらむ
 野をみればくやの池水打とけて氷ぞはるのへだて也ける
 氷るし水のしらなみ岩こえて清瀧川にはる風ぞふく
 日かげみぬみ山がくれにながれきて雪けの水のまた氷ぬる
 すはの海や氷とくらしとほつあふみ天の中川みぎはまさねり
 立かへる春のひかげに岩ごことこりし川のひとけてながるゝ
 くみあげしけさの若水さえかえりむすびそむるは氷也けり
 ねせりつむ少女が袖に風さえて淺澤水ははるもこほれり
 夜を雲み波も冬にやかへるらんあとなく氷る水の面かな

當純 友則 元方 西行 俊惠 俊魚 清長 野宮 直淵 宣長 廣海 石水 景松

○子日

ねのひ

正月上の子日に野へ岡へに出て若菜また小松を曳て世をも人をも身をも祝ふ事なり又小松をうつし植るさまにもよむべし古 松を植る事はなくしてわかかなをつみ

まじへて食ひたりしなりされど今はたえて物せぬ事となりたればその心すべし

- 千日する ○千日の小松 ○千日の友 ○はつ子 ○はつれの日 ○はつ子を祝ふ
- 初子の小まつ ○初子のわかかな ○ひける千日 ○ながき子の日 ○おま子の日 ○松ひかむ
- 松にちぎる ○松の生さき ○松の二葉 ○松のわか葉 ○わか松 ○うらわか松
- うらわか松 ○老せぬ松 ○常磐なる松 ○かはらぬ松 ○つきせぬ松 ○葉がへせぬ松
- 歳定まれる松 ○岩根松 ○萬代の聲ある松 ○家人の松 ○霞の内にひく松 ○千代をまつ
- 行末をまつ ○小松 ○小松引 ○ひめこ松 ○二葉の小松 ○野への小松
- 小松原 ○玉松がえ ○わかみどり ○ふかみどり ○おのがみどり ○春のみどり
- おなごみどり ○千代のみどり ○みどりも深く ○一入のいろそふ ○さしおひの ○さらうゑて
- 引うゑる ○引そふる ○引つれて ○引てみぬ人も ○引てに春の色 ○引そへて重る千代
- 代々かけて引 ○人にひかれて ○たれにひかれて ○手ごさひける ○十かへりの花まつ ○十かへりのはる
- 千代はこもれり ○千代をならせる ○千代にさかゆる ○千代のかげこもる ○千世のためし ○千代のかげ
- 千年のはじめ ○末ぞ久しき ○久しき物ご ○ためしきて ○かきはまきは ○木高きまでをみむ
- 君かよはひ ○君が心を手にまかす ○君かやぎにも ○君が代のためし ○野へのみや人 ○野へのもろ人
- 野へまだ寒し ○野へに心をひく ○野を廣々 ○心ものべに ○よはひをのべに ○都の野へ
- めもはるの野 ○神のみむるに ○おもふごち ○よはひなのぶ ○かさし ○まさぬして
- 春のまさぬ ○むれ立て ○打むれて ○寒さわすれて ○かへるさしらぬ ○家路わすれて
- 雪まをさめて ○かすみたな引 ○鶯のはつ音 ○つめるわかな ○けふめづらしく ○春をしるらん

- 名所 龜尾山(山城) 大内山(同) 嵯峨の山(同) 小鹽山(同) 千代の古道(同)
- 北野(同) 春日野(大和) 布留野(同) 交野(河内) 遠里小野(攝津) 生田野(同)

拾 同 後拾 金 詞 千 新 同 六 代

はつ春のはつ子のけふの玉はいき手にとるからにやらぐ玉の緒
 子日する野べに小松のなかりせば千代の例を何をひかまし
 めづらしき千代の子日の例にはまづけふにこそひくべかりけれ
 浅みどり野への霞のたなびくにけふの小まつにまかせつるかな
 春日野の子日の松はひかでこそ神さびもかむかげにかくれめ
 子日すと春の野ごとになづぬればまつにひかるよこよちこそすれ
 ときはなる松もや春をしりぬらん初子を祝ふ人にひかれて
 さゝ波やしがの濱松ふりにけりたが世にひける子日なるらん
 子日してしめつる野への姫小松ひかでや千代のかげをまたまし
 おふるより年定まれる松なれば久しき物とたれかみざらん
 千とせふる子日のまつも君が代になほいくたびか生かはるべき
 天津琴けふひくま野の小松にも年の緒をへて風ぞしらべん
 春の野の小松がうれにうぐひすのはつねをさへにかけてける哉
 雪ふかき北白川の小松原たが引袖にはるをしるらむ
 子日してうゑし小松は千歳まで老せぬ宿のしるしなりけり
 小松原けふのはつ子にあまたよびひけども千代はつきせさりけり
 引つれてともにかむとちぎりつる子日をまつも久しかりけり
 ひめ小松葉こもる千代も君が爲さてはあられずあらはれにけり

家 持 忠 賢 信 賢 經 信 公 院 新 川 彌 頼 俊 正 伊 勢 宗 俊 契 冲 廣 海 景 樹 御 杖 竹 翁 英 好 保 忠

ふる草に新草まじる野へに出て老もわかきもひく小松哉

濱 臣

○若菜 わかな

水邊また野邊に出て摘なり名によせて若さを祝ふ心にとりなしたり萌出るを待て
 食菜に摘るなり

- はつわか菜 ○朝菜夕菜 ○いはふ若菜 ○老せぬ若菜 ○老もわか菜 ○たが爲のわか菜
- 雪まのわか菜 ○澤田のわか菜 ○浅野のわか菜 ○わかなたつむ野 ○春菜 ○磯菜 ○濱菜
- すゞ菜 ○ましろ ○なづ菜 ○わか菜つむ ○せり ○せりは
- はたけざり ○深ざり ○小田の深ざり ○山田の根ざり ○根ざりつむ ○あぐつむ
- 山澤あぐ ○みるめかる ○わかめつむ ○はらこぐさ ○なはぎつむ ○くゞだち
- おひいづる ○おひそむる ○もえそむる ○うらわかし ○下もえわたる ○下もえはまた ○みごもりにゆる
- めもはる ○めざし ○うらわかし ○まだうらわかし ○二葉なる ○こほる下機
- 野づかさ ○野守 ○賤の女が ○なごめ子 ○里人 ○四方の里人
- つめる里人 ○つむ ○つむここのかたみに ○つみはやす ○つみたむる ○つみがたみ
- 打むれてつむ ○たがためにつむ ○おなづ心につむ ○ひざりはつまぬ ○日かずにつめど ○春の日つめど
- たけぬまに ○神に手向る ○かたまもち ○花がたみ ○むかしがたみに ○たづぬ
- あさをたづねて ○あくがるゝ ○うちむれて ○ふりはへて ○袖ふりはへて ○袖つくばかり
- もすそめらして ○おりたつ ○家ぢにかへそ夕 ○雪の下もえ ○雪きえて ○雪げの水
- 雪ま待えて ○雪まをわくる ○よそにはみえぬ雪ま ○ひさへの雪ま ○袖白妙の雪 ○沫雪そふる
- まだ雪ふかし ○朝雨に ○よひの小雨に ○ふるの雨に ○草ふみしだき ○しめし野
- もゆる春野 ○野のへ ○野へのあそび ○野をやく ○心なのべ ○しめ置し野へ

- 霞しく野へ ○みやこの野へ ○都は野への ○なきの焼原 ○霜がれの草の原 ○すそのゝ原
- 岡へ ○澤邊におふる ○たづのぬる澤邊 ○山澤水 ○浅澤水 ○野澤
- 水ぬるむ澤田 ○かくれぬ ○わすれ水 ○萬世しめて ○君がため ○しげき恵み
- 恵にもれず ○春の恵 ○春めく ○春浅み ○春風ぞふく ○衣手に風さえて
- 霞の衣 ○此頃はまだき ○また深からぬ ○つきせぬ ○いさばやも

浅野(淡路)

名所 白川(山城) 芹川(同) 鳥羽田(同) 竹田(同) 飛火野(大和) 浅澤小野(攝津)

万 赤人
 古 赤人
 同 貫之
 同 仁和帝
 後 大政大臣
 後拾 能宣
 新 俊成
 代 入道 前攝政 契沖 長流 雄風

あすよりはわかなつまんとしめし野にきのふもけふも雪はふりつゝ
 み山には松の雪だに消なくに都は野へのわかなつみけり
 春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ
 君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふりつゝ
 ことしよりわかなにそへて老の世にうれしき事をつまんとぞ思ふ
 白ゆきのまだふる里のかすが野にいざ打はらひわかなつみてむ
 けふとてや磯菜つむらんいせしまや一志のうらのあまのをとめ子
 かすみしてをぎのやけ原ふみ分てたがため春のわか菜つむらん
 けさきえし垣根の雪のたまり水野澤にわたるわかさをぞつむ
 水寒みあらふ若なの雪だにかたみにたまる朝ごほりかな
 春毎に野へのわかなをつむ日こそ千年老せぬ思ひなりけれ

はるの田につむべき程をすぐしなば若なゝがらに賤やかへさむ
 のどかにてもえやまざらん鶯の聲するかたに若なつまゝし
 わかなあらふわか水うけの老ぬるは年をも澤につめるなりけり
 雪の内もわかなつみにと來し人のあとはありけり千代のふる道
 白雪のふる野をみれば若菜つむ跡ばかりこそ春めきにけれ
 春日野のわか菜をつめばわれながら昔の人のこゝちこそすれ
 春日野の飛び絶にしあごとへば若なぞ雪の下もえにける
 はる毎に若菜つみにとなれければ野守も是をとがめさりけり

御杖 春房 光中 英孫 景樹 東喜 濱臣

○霞

霞は春三月に亘りて詠る事本よりなれども霞と出たる題には初春の霞をよむべし
 となり但物によせてはいつにても有べし長閑やかによむを專とすと云り

- かすみたつ ○霞みうきたつ ○かすみ匂へり ○かすみゆく ○かすみしく ○かすみたな引
- かすみわたる ○かすみわたれる明がた ○かすみあふ ○かすみ残れる ○かすみきらへり ○かすみぞ深き
- かすみぞうづむ ○かすみぞ春の姿 ○かすみながらの朝曇り ○かすみのみだれ ○かすみのみ衣
- かすみの袖 ○かすみの内も霞む ○かすみのした ○かすみのみみ ○かすみのほら
- かすみの底 ○かすみのまご ○かすみのうち ○かすみのおく ○かすみのをち ○かすみのよそに
- かすみをわくる ○かすみをたふ ○かすみにけりな ○かすみにまよふ ○かすみにくもる ○かすみにささす
- かすみにむせぶ ○霞にたざる ○霞にひたす ○霞にもる ○霞によわる風 ○霞にきゆる
- 霞にすける ○霞にしづむ ○かすみにしるし ○かすむ ○かすむ雲ぬ

- かすむさらなし ○かすむ夜の
- かすまぬ空も ○春がすみ ○八重がすみ ○一重がすみ ○いくがすみ ○朝がすみ
- 夕がすみ ○むらがすみ ○よこがすみ ○横ざるがすみ ○浅きがすみ ○つゝむがすみ
- よものかすみ ○なびくがすみ ○うすがすみ ○かこふがすみ ○かくすがすみ ○打かすみ
- 日なへてかすむ ○朝日かすむ ○入日もかすむ ○月かけかすむ ○朧にかすむ ○ほのかにかすむ
- のどかにかすむ ○みるくかすむ ○みるめかすむ ○あさよりかすむ ○しづくもかすむ ○松風かすむ
- 行手がすめる ○立は霞さみえながら ○たつ ○立わたる ○立こむる ○立やそふらん
- 立まよふ ○立もさだめぬ ○八重立こむる ○立かりかれて ○うひたつ ○立なかくして
- なびく ○たなびく ○月にもなびく ○月になびく ○へだつ ○かけをへだて
- 空をへだてて ○浅みどり ○みどりの色に ○いろのちぐさに ○みどりも深く ○くれなぬに ○ぬきうすく
- 横雲にかけそふ ○光をさふる ○かぎりなく ○行へもしらす ○はるかなる ○そこはかさなく
- ふかくなる ○いや遠ざかる ○深くもみゆる ○ほのかになりて ○おほひわたれる ○おもさゆたかに
- そこさもわかず ○やすくみもせず ○おぼつかぬ ○けふりにまがふ ○遠きながめ ○かばさみる
- ながめ馴たる ○うちぎらし ○天きらひ ○天つ空まで ○遠くなる空 ○くもり夜の空
- なぎたる空 ○空をおほひて ○きのふの空の隔 ○なぎわたる ○夕なぎに ○夕ぐもり
- 朝ぐもり ○うすがもり ○くもるさみるまで ○波路の末も ○波路につゞく ○よる波の音も
- 通ふべき波まもみえず ○さゞ波の音をへだつ ○沙路はるかに ○風にみだる ○風たえて
- へだてえぬ嵐 ○花まつまでの ○花のおもかけ ○雪よりうへに ○まだ雪消ぬ谷かけ ○山かくす
- 匂へる山の ○遠山もさ ○めなれし山も ○ながめに遠き山のは ○峯いくへ ○みれつゞき
- 水上遠く ○松より奥は ○をちかたの ○曉ふかく ○あさぼらけ ○あけぼのくらく
- 夕月ながら ○夜こめて ○うらくこ ○空をのどめく ○のどかなる ○のどかなるけしき

子らか手を卷向山に春されば木葉しぬぎてかすみ棚びく
かぎろひの夕さりくればさつ人の弓槻がたけにかすみ棚びく
はるのきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるへらなれ
よし野山みねのしらぬきいつ消てけさは霞の立かはるらむ
ふるさとは春めきにけりみよし野の御かきが原はかすみこめたり
おもふ事なくてや春をへだてましうき世へだつるかすみなりせば
高瀬さすむつ田の濱の柳原みどりも深くかすみはるかな
みわたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびくしほがまのうら
雪深きみ山の里に住人はかすみ空にや春をしるら舞
さびしさのましばのけぶりそのまよにかすみをたのむ春の山ざと
かつしかのむかしのまよのつぎはしをわすれずわたる春がすみかな
しきしまや倭しま根の朝がすみもろこしまでも春は立らし
しら雲のうへよりみえしふしのねを立へだつるはかすみなりけり
なには江の汐干のかたにかすみむらんあしまに遠きあまのいさり火
もしほやくなにはの浦の八重かすみ一重はあまのしわざなりけり
むらさきのめはるくと出る日に霞色こきむさし野の原
行水のありても遠しみなせ河山本かけてかすみもふべは
高砂の尾上にはるの立こめてかすみの衣松がさねせり

よろ人
しらす
同
行平
重之
兼盛
仲正
公經
家隆
攝津
少將
慈圓
太上天皇
顯昭
建保御製
契沖
眞淵
春海
千陸

○鶯

山おろすあらしのひまはなけれどもわりなくわたる春霞かな
打わたす遠山松のけぶりかと立まがひたるはるがすみ哉
見わたせばひゑの根わたしかすむ也粟津の原もけふや焼らん
あしからに雲はわかれて夜の雨のなごりかすめるうき鳥がはら
上總山沖にかぎりてたてりともみえぬかすみの朝ぼらけ哉
きのふこそみ雪ふりしか高砂の松はかすみにうづもれにけり
天雲もいもきはかるふしのねにいかにかすみの立おほふら舞
よひの雨に岡へのみもき消はてゝあしたのどけくかすみ野べ哉
二本とも松はわかれず武隈のはなわたる春がすみかな
しほげたつあらしま風の吹たえて鶯の住磯もかすみ春哉
くもりなくなきたるけふぞ大空のはてをつくしてかすみたりける
はるまだき立るかすみはよし野山匂へる花のしるしなるらん
久かたのあめにみちたるうれしさは春のあしたのかすみなりけり
うぐひす

御杖
邦直
梁當
素善
日孫
尊正
忠臣
濱樹
景樹
久胤
魯道
有文朝臣
有功卿

谷より出て春を知らせ古巢を棄て花に移るとも籬の竹園の梅にねぐらを定むとも
趣き種々なるべし

- 友鶯
- すみし鶯
- ひなの鶯
- やぎの鶯
- 夜ばの鶯
- 野べの鶯

○山深き谷の鶯 ○花に別るゝ鶯 ○身を鶯 ○鳴て木傳ふ ○鳴て休らふ ○しばなく
 ○來なく ○ばや來なけ ○なれてぞき鳴 ○人來さなく ○ふり出て鳴 ○いさばやも鳴
 ○夜をこめて鳴 ○花になく ○雪になく ○あけはてゝ鳴 ○かすめるかたに鳴 ○千代をよそへて鳴
 ○わかれなく ○鳴音春なる ○しるしなき音 ○はつかなる音 ○千代のほつ音 ○こゑのあや ○こゑのいる
 ○こゑの匂ひ ○こゑしづく ○こゑならはし ○こゑはしられぬ ○こゑうち出る ○こゑめづらしき
 ○こゑ里なるゝ ○こゑうすかすむ ○こゑぞ春なる ○こゑさへなびく ○身にしむ聲 ○あらたまる聲
 ○むすほゝれたる聲 ○千代の聲ある ○さへづる ○さへづりかはす ○もゝさへづり ○もゝよるこひ
 ○くちすさぶ ○きぬる ○妻をもさむ ○こほるなみだ ○はれならはし ○おのが羽風
 ○打羽ぶく ○雪打羽ぶき ○籠の内に ○れぐら定めぬ ○めぐら定めて ○れぐらの梅
 ○れぐらかたよる夕風 ○れぐらの竹 ○竹のれぐら ○すもり ○す立もやらで ○すごもれる
 ○いまだすこもる ○いまだすだゝぬ ○ふるすうかれて ○ふるすなからに ○ふるす戀しき
 ○ふるすの山 ○もとのふるす ○谷のふるす ○光なき谷のふるす ○谷より出る ○雪のうちより
 ○あくがれいつる ○日影さゝもに出る ○匂ひ出たる ○出がてにする ○檜立くゞる ○檜にうつる
 ○さくらにうつる ○花にうつる ○たかきにうつる ○南にうつる ○木づたふ ○木づたふ枝
 ○木づたひちらす ○竹にやざる ○梅がえに宿る ○里なるゝ ○まだ里なれぬ ○人里遠き
 ○春をさもなふ ○春をあらそふ ○春におくれぬ ○春まちつけて ○春つけそむる ○人にも春をしらす
 ○ひざり春しる ○まだ春なれぬ ○おのれ時しる ○われつけがほに ○香をたづねくる ○花のありかをつかふる
 ○霞にむせぶ ○寂しさをさふ ○人さそふ ○人まちはほ ○またるゝものさ ○うひくし
 ○やゝかれんゝに ○きゝならしても ○聞てがたき ○けさきげば ○ほのかにきこゆ ○たえくきこゆ
 ○笠にぬふてふ梅 ○雪の花がさ ○梅の花笠 ○梅がゝのしらべ ○梅のしづえ ○梅のほつえ
 ○花ぞの ○花まつころ ○竹のさえたに ○竹のしげみに ○時しらぬ竹 ○まごのくれ竹

萬 〇夕くれ竹 ○あくるまがき ○朝けのまご ○朝いせられず ○あまなく ○朝日ぐくれの谷陵
 〇朝日影匂へる山 ○山本の霞ぐくれ ○竹のあみ戸の内 ○まご遠からぬ ○園ちかく ○軒ちかく
 名所 小倉山(山城) 伏見里(同) 深草の里(同) 音羽川(同) 春日野(大和)
 難波瀧(攝津) 生田里(同)
 あし引の山谷こえて野づかさには今はなくらむ鶯のこゑ 赤人
 梅の花さける岡べに家をればともしくもあらず鶯のこゑ よみ人
 冬ごもり春さりくらしあし引の山にも野にもうぐひすなくも しらす
 梓弓はる山ちかく家をらばつぎてきくらむうぐひすの聲 同
 野べちかく家あしさればうぐひすのなくなるる聲は朝な〜きて 同
 鶯の谷より出る聲なくばはるくることもたれかしらまし 千 里
 妹か家のはひりにたてる青柳に今や鳴らむ鶯のこゑ 同
 竹ちかく夜床ねはせじ鶯のなくこゑきけば朝いせられず 伊 恒
 あら玉の年立かへるあしたよりまたるゝ物は鶯のこゑ 素 性
 山ふかみ雪ふるすより鶯のいづるはつねはけふぞきゝつる 龍 宜
 山里はうき世の中にはなれねば谷の鶯音をのみぞなく 攝 政
 風わたる軒ばの梅にうぐひすの鳴く木傳ふはるのあけぼの 實 家
 うぐひすのなけどもいまだふる雪に杉の葉白きあふさかのせき 太上天皇
 雨そゝぐ園のくれ竹枝たれて夕のどかに鶯ぞなく 實 泰

打わたす竹田の原の雪の内に鶯なきぬはるのはつ聲
 うぐひすのまつにきなかぬわが宿ははるも思ふにまかせざりける
 岩のうへにおりたちてなく鶯の聲もながるゝ水のはる哉
 鶯の木傳ふはるもくまがしのふる葉のくちる園のうちかな
 とりとめてかすむともなき野べながら鳴鶯の聲はるかなも
 遠方やかた山林かすみゐてたそがれ深くうぐひすのなく
 うぐひすもことのはかへてみよし野の玉松がえもはしきはる哉

眞 久 廣 景 存 久 有
 淵 明 海 樹 鏡 胤 功 卿

○残雪 のこるもき

春になりてもなほ残れるを云ふ又春ふる雪に通はして詠るもの少なからず
 ○のこりの雪 ○こそのみ雪 ○たまらぬ雪 ○あは雪 ○春のあは雪 ○こそ雪
 ○雪ますくなし ○雪のしづく ○雪けのみづ ○猶雪白し ○まだ雪さゆる ○梢の雪をれ
 ○消のこる ○消かれて ○消がての ○消やらぬ ○消るはをしき ○消んともせず
 ○草のもゆるに消果る ○朝日さす ○むらさゆる ○むらさえの ○残りすくなき ○むら／＼のこる
 ○こほりてのこる ○つれなくのこる ○かすみてのこる ○山のは遠くのこる ○日影の下にのこる
 ○冬草の枯葉に残る ○冬はのこりて ○去年のかたみ ○ふるれのかたみ ○かたみをたゝぬ ○一重ばかりは
 ○あさもなく ○猶風さゆる ○つれなくみゆる ○いつともわかず ○いつまでか ○春くるあこ
 ○春浅いかも ○春さもみえず ○春さもわかず ○春をつれなく ○春はかくれて ○春のひかりに
 ○かすみへだつ ○春はかくれて ○夕日にこがる ○春日のあさき ○出る日の光にみゆる ○朝日がくれの
 ○朝日がくれの谷 ○光なき谷 ○谷の下かけ ○山の下かけ ○山のさかけ ○み山の松

○春雪 はるのもき

○岡べの松 ○そばのかけ道 ○都の野べ ○木の下かけ ○木陰ばかりに ○岩根のひばら
 ○竹の下折 ○あしのかれば ○若草かくれ ○あしのかれば ○若草かくれ
 心ざし深く染てしをりければきえあへぬ雪の花とみやらん
 春立てあしたの原の雪みればまだふる年の心こそすれ
 道たもと思ひし物を山里にきゆるはをしき春の雪哉
 春日野の下もゑわたる草の上につれなくみゆる春のあわ雪
 草葉にはまだ雪きえず粟津野のすぐろのすゝき名のみ也けり
 山深み梢に雪やのこるらん日かげにおつる横の下つ也
 春の日のうらゝにてれる垣根には友まつ雪の消がてにする
 めづらしとみ初し程になりけり遠山のまにのこるしら雪
 甲斐がねや霞吹とく春風にのこれる雪ぞさやにみえける
 峰の雪たゞめづらしとみるまでに春はのどかに成にける哉
 下もえて消るをいそぐ若草に雪ものこれる空やなからん
 いつまでの冬のかたみと思ひしもさはありがたきはるの雪かな
 あし引の遠山松の葉ごもりに花ともみえてかすむ雪哉
 春深き谷の下風なほさえて木葉まじりにのこる雪哉
 音羽山のこれる雪をけふみればことばの花の香に匂ひける

よみ人 祐 匡 国 勝 兼 基 眞 千 安 春 三 景 久 有
 ら 房 信 命 好 俊 淵 隆 伎 庭 千 樹 胤 文
 ら 房 信 命 好 俊 淵 隆 伎 庭 千 樹 胤 文
 ら 房 信 命 好 俊 淵 隆 伎 庭 千 樹 胤 文

老になりてふる雪也されど残雪とかたみに通はしてもよめり

- にるの白雪 ○はるのあは雪 ○あは雪ぞふる ○かつふる雪 ○あまざる雪 ○つもらぬ雪
- 松のふいき ○たまる ○ふりもたまらぬ ○ふりてはこぼる ○ふれどたまらぬ ○かすみてふる
- ふる程ばかり ○かれ葉にふれる ○残るがうへにふる ○花なき里にふれる ○ふらにつもらぬ ○つもる
- つもりかほなる ○袖にたまらぬ ○たまればがての ○枝にたまらぬ ○枝おもからぬ ○むらくふかき
- 風にたまらぬ ○つもりかれたる ○ふりにし年にかはらぬ ○きゆるをいそぐ ○消やすき
- 消てあさなき ○消のころ上 ○消ぬが上に ○さくるもろし ○あさよりさくる ○あさかたもなく
- 草葉にうすき ○はかなくみえて ○あはくし ○空かきくらし ○猶空さむく ○さへかえり
- さえかへる嵐 ○山風寒く ○春さえて ○はる浅み ○はるの楢 ○春をよそにて
- 春風さそふ ○春をうづめて ○春をかすめて ○春さもしらず ○春さもわかず ○春さもいはず
- 霞立ちぬ ○霞くもりて ○霞わかれて ○かすむ空より ○かすめども猶 ○花のおもかけ
- 花にまがひて ○花によそへて ○花もまだしき ○木ごこの花 ○春咲花の色を重ぬ ○こほりの上に
- 梅にまがひて ○梅のほつえ ○鶯の羽風 ○鶯のれぐらの竹 ○竹の下折 ○霜枯の古葉が上
- 枯果し垣根の草 ○なぎの焼ふ ○若菜つむ野澤 ○若なつむ野に ○冬がれの野べ ○朝日さす岡べ
- 岡べの松 ○山松がえに ○遠山のは

梅がえに鳴てうつろふ鶯のはねしろたへに沫雪ぞふる
 御園ふの竹の林にうぐひすはしばなきにしを雪はふりつゝ
 はる霞立るやいづこみよしのよしの山に雪はふりつゝ
 霞たち木のめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける
 いづことも春の光はわかなにくまぞみよし野の山は雪ふる

よみ人
 しらす
 貫之
 恒之

梅がえにふりかゝりてぞ白雪の花のたよりにをらるべらなる
 はるきては花ともみよと片岡の松のうは葉にあわ雪ぞふる
 梅がえにもものうきほどにちる雪を花ともいはし春の名たてに
 打ざらし猶風寒しいそのかみふるの山べのはるのあわゆき
 浅みどりはるの空よりふる雪は花ちる里の心ちこそすれ
 春がすみたなびき初し高砂の松の上葉にあわ雪ぞふる
 雪とけの軒の雪に音そへてはるの夜深きかねの聲哉
 見るがうちにはかなく消る沫雪はもゆるはる野にふれば也けり
 二月の空さえかへる山風にちるさへ寒きまつのもきかな
 月かげは春のならひにかすむかとあふぐ空よりあわ雪ぞふる
 月よめば春ぞと思ふに山ざとは猶この頃も雪ぞふりける

○餘寒 さえかへる

春になりてさえかえるをも去年より寒さの猶ゆるがぬをも詠り

- 風さえて ○山風のさえ残る ○つらゝ猶さえて ○木の間の日影猶残て ○空さゆる ○袖さゆる
- 霞もさゆる ○さゆるあらし ○さゆる朝風 ○寒さかばらぬ ○猶さゆるけしき ○風の寒けさ
- 山かげ寒し ○猶風寒し ○立かへり猶寒し ○日影もさむし ○まだ肌寒し ○はるさえて
- 春寒み ○春寒きころ ○春ながら ○春しらぬ ○春めきやらぬ ○春をよそなる
- 春さもいはず ○なほざりにくる春 ○春風あるゝ ○春のいたらぬ ○春きて後も ○二月の空も

貫之 仲實 重之 入道 伊勢 景樹 忠治 春海 春夫 露 元 雄

○えきさらきの ○冬にもこゆる ○いつまで冬の名残 ○まだ冬こもる ○また冬籠る楢 ○風の音も
 ○山風あるよ ○霞もあへず ○霞む名のみたつ ○霞ぞ雲がくれゆく ○あまざる雲 ○もこの雪げの雲
 ○雪げの雲 ○雪げの風 ○雪げの残る山風 ○雪げにさゆる ○雪げもよほす ○雪げの色みせて
 ○雪ちりて ○雪の村消 ○まだ雪さそふ ○残るふゞきに ○松のふゞき ○猶雪寒し
 ○猶ふる雪 ○山のみ雪の消ぬ ○あわぞふる ○ささらぎの雪 ○二たび氷る ○また氷るまで
 ○さづる氷に ○解し氷も又結ふ ○時雨にかへる ○あられ猶ふる ○庭のしも ○霜夜の空
 ○猶しみ残る ○うづみ火 ○春物深き埋火 ○朝ぐもり ○よなくは ○花のおそき
 ○山下かけは ○山ふかみ

新 同 同 續千 千五 同 代
 よしの山ざくらが枝に雪ちりて花おそげなる年にも有かな
 空は猶かすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
 山ふかみ猶影寒し春の月空かきくもり雪はふりつゝ
 みよし野は猶山寒し二月の空も雪げの残るあらしに
 春風をさらに雪げに吹かへて峰の霞ぞ雲がくれゆく
 山里は木のまの日影猶さえて春ともみえぬ庭の霜かな
 若なつむ荻のやけ原猶さえて袖にたまるは春の沫雪
 雪もまだふるから小野のもとがしはもとのさむさにかへるはる哉
 二月の空さえかへる山風は冬にまされる心ちこそすれ
 年々に身にしむまではあらねども思ひの外にさゆる春哉
 まさもくの檜原が奥の白雪に八重のかすみもまだ寒げ也

西 太政大臣 行
 越 前
 二條院 御
 家 岐 家 隆
 忠 貞 隆
 契 眞 隆
 廣 眞 隆
 實 隆

○梅

うめの花
 月雪霞鶯などに多くよみ合せたり紅梅はくれなるのこそめの梅とよめりまた物名
 にして句中にこそはいと立入たるもあり

○梅のはつ花 ○梅の花がさ ○梅になりゆく ○梅の夕ばえ ○梅の木もこ ○梅みがてら
 ○梅がえうたふ ○梅が香深き ○梅かゝる夜は ○梅の園ふ ○梅の下風 ○梅さくころ
 ○梅さく山 ○梅さくやど ○梅さく庭 ○さく梅 ○紅のこそめの梅 ○匂ひわかれぬ
 ○風のまゝなる梅 ○袖にあらそふ梅が香 ○白たへの梅 ○かさす梅 ○若木の梅 ○老木の梅
 ○一木の梅 ○百木の梅 ○花のゑまひ ○花の下ふし ○花にさきだつ ○花は雪かこ
 ○ひさ花 ○枝にこそ花もわかれる ○ひさへ ○いく木のもこ ○枝もたわゝに ○かた枝
 ○ほつえ ○しづゑ ○たちえ ○霞む立枝 ○ふる枝 ○雪のふる枝
 ○ゑみそむる ○ひもさき初る ○ほころぶる ○ほころび初る ○さく ○さきそむる
 ○咲にほふ ○八重さく ○咲るかきは ○軒ばに咲る ○ふる年かけて咲 ○ちりかゝるかけ
 ○おそくさも ○かゝる ○空までかゝる ○よそよりかゝる ○朝風かゝる ○吹風の山下かゝる
 ○山下かゝる ○うたて匂ひの ○にほふ ○さそひゆく匂ひ ○袂にうつる匂ひ
 ○あらぬ匂ひ ○匂ひになりて ○匂ひをこめて ○匂ひをさそふ ○匂ひにかすむ ○響も匂ふ
 ○雪より匂ふ ○霞む方より匂ふ ○雪吹ませて匂ふ ○袖もさだかに匂ふ ○さかぬ垣れも匂ふ ○袖の香

濱 臣
 久 鹿
 久 鹿

- うつり香 ○風のつり香 ○まつ人の香 ○あかぬ色香 ○香をたづね ○香をよめて
- 香をたつかしみ ○香さへかすむか ○香やはかくる ○香こめに風の ○香をば楳にのこせ ○色こまに
- 色こそみえぬ ○色さへ袖にうつる ○ゆるしの色 ○ふり出る色 ○たぐひなき色 ○くれなぬ句ふ
- くれなぬ深き ○くれなぬの色そふ ○うすくれなぬ ○からくれなぬ ○夕くれなぬ ○風のたより
- 風にあまりて ○風なつかしき ○なつかしく吹くる風 ○まごの朝風 ○うつる夕日のかげ ○月も色そふ
- 月にもまばふ ○かすめる月 ○霞をもれて ○雪のすがたに ○雪の下より ○雪もくれなぬ
- 雪まぜにはる ○雪のふれまば ○まがひし雪は ○雪のねぐら ○鶯の宿り ○鶯の羽風
- 鶯の羽風にちる ○鶯さそふ ○鶯にしるべせられて ○わきもこに ○老かくる ○盃にうつる
- 袖よりあまる ○折かざす ○家づこにせん ○人たのめなる ○さめこかし ○そこそもしらざ
- うたてよりにも ○あるとゆかしき ○そなたゆかしき ○いやなつかしき ○袖なつかしき ○やみばあやなし
- まがひはてたる ○山人のかへる小坂 ○水にうかべる ○下行水 ○ぬしなき宿 ○かきこしに
- 中垣は越て ○垣根つゞきに ○垣根あまたに ○ぬししらぬ垣根 ○よそのかきれ ○おのがかき椽
- つらなる垣根 ○里をあまたに ○まごに入くる ○まごちかく ○枕にちかく ○閑の戸 ○小籠の外

萬同同同

名所 關部山(山城) 梅津里(同) 伏見里(同) 御垣が原(大和) 難波津(攝津)
 生田森(同) 志賀郡(近江)
 はるさればまづさく宿の梅の花ひとり見つゝや春日くらさん
 梅の花今さかりなり百鳥の聲のこほしき春來るらし
 うめの花をりもをらすもみつれどもこよひの花に猶しかすけり
 わが宿の梅咲たりと告やらばこてふに似たりちりぬともよし
 同 同 同
 世 耳
 廣津殿子
 よみ人
 しら

古後拾後金同千同新風月

宿ちかく梅の花植じあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり
 うめの花よそながらみむわざも子がとがむ斗の香にもこそしめ
 我宿の梅の立枝やみえつらむ思ひの外に君がきませる
 春の夜の闇にしあれば句ひくる梅より外の花さかりけり
 われひとりいそぐと思ひし東路に垣ねの梅はさき立にけり
 梅の花匂ふあたりはなきてこそいそぐ道をばよくべかりけれ
 今よりは梅咲宿は心せんまたぬにきます人もありけり
 はるの夜は軒ばの梅にもる月の光もかをる心ちこそすれ
 大空は梅の匂ひにかすみつゞくもはてぬ春の夜の月
 かすめどもかくれぬ物はうめの花風にあまれる句ひ也けり
 枝かはすうめの初花咲にけり松風匂ふはるの明ぼの
 とふ人のふえもきこえてかきの内に梅ちる風のおもしろき哉
 梅の花けふ見る雪のおもかげやあすの櫻の雲におぼえん
 うめの花朧月夜に匂ふなり千代にもがもなこのごろにして
 かた岡の梅のさかりにちりしよりあしたの原は匂ひ也けり
 梅かをるかすみのおくをとめゆけば猶このあとは春けかりけり
 やはらかに寝ての朝けの雨じゆり身にしむまでに薫る梅哉
 青柳のかたよる方やかをるらん吹としもなき梅の下かせ
 同 同
 同 同
 同 同
 公 衆
 則 眞
 房 爲
 俊 定
 房 爲
 眞 覺
 長 契
 千 景
 久 枝
 直 胤
 盛 任
 光 任
 暹 頼
 成 家
 家 家
 延 家
 瀧 流
 沖 樹
 蔭 樹
 胤 胤
 直 胤

○柳

そむとなく夕くれなるに匂へるはかすみを梅の出るなるらん
枝ざしもまだしき梅の花ながらかをりは庭にこだかよりけり
梅の花今は夢にもかたならなむ心を染て年ぞへにける
世におほふかすみの袖にはかりなき春をこめたる梅がよそする

氏 綾
直 兄
有 功
同 卿

- 柳の花
- 青柳の花
- 青柳のいと
- 青の柳か
- ふし柳
- 冬木の柳
- みぎりの柳
- 岩もこ柳
- 枝かばす
- めもはるに
- 手引のいと
- 新桑眉
- 軒ばにたる
- 君が代になびく
- 井ぐひにかまる
- 柳のまゆ
- 柳のはなだの糸
- 玉柳
- さし柳
- 一もこ柳
- そごもの柳
- 若みどり
- 枝もさなく
- 此頃めぐむ
- いと打はへて
- まゆごもり
- なびく
- 御垣になびく
- 打はへて
- 柳かけ
- 玉のを柳
- 折そひ柳
- 五本柳
- 田づらの柳
- 浅みどり
- 枝たる
- みぎりの糸
- 糸より流る
- うちだれがみ
- なびくにつけて
- 垣根になびく
- くりかけて
- 柳のしなび
- 柳原
- めぐむ青柳
- たれ柳
- はれる柳
- みかきの柳
- 川柳
- ふかみどり
- けふる
- 花田の糸
- 玉の緒
- れぐたれがみ
- 池の心になびく
- かたよりしける
- かたよりしける
- 末もむすばぬ
- 柳
- なびく青柳
- しだり柳
- ふる柳
- いきつの柳
- 川そひ柳
- かざりそふ
- もゆる
- 手染のいと
- 玉かづら
- まつばる
- なびくも清し
- 澤へになびく
- 水の上にかげ打離く
- 冬ごもりせり
- 吹風の心もしらで
- 霞をもる
- 露結ぶ
- 涙さへよる
- 川のみながら
- 庭の池水
- をちかたの
- 霜のみだれ
- 吹く風
- 霞をもる
- 露結ぶ
- 涙さへよる
- 川のみながら
- 庭の池水
- をちかたの
- もえ出る
- さらせる糸
- 花のかづら
- みだる
- 心もなびく
- 水の上にかげ打離く
- むすばられたる

萬 同 同 古 後 拾 後 金

名所

- 賀茂川(山城)
- 音羽川(同)
- 水無瀬川(同)
- 桂川(同)
- 廣澤の池(同)
- 猿澤の池(大和)
- 佐保川(同)
- 吉野川(同)
- 六田の淀(同)
- 隅田川(武蔵)

打のぼる佐保の川原の青柳は今ほはるべとなりけるかも
百しきの大宮人のかづらけるしだり柳はみれどあかぬかも
浅みどり染かけたりと見るまでに春の柳はもえにけるかも
浅みとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か
はるの日のかけそふ池のがみには柳のまもぞはづはみえける
ちかくてぞ色はまされる青柳の糸はよりてぞみるべかりける
池水のみくさもとらで青柳のはらふしづえにまかせてぞみる
風ふけば柳のいとのかたよりになびくにつけてすぐるはる哉

坂上耶女
よみ人
しらす
同
通 昭
よみ人
しらす
能 宣
院 御 製

美よし野の大河の邊のふる柳かげこそみえね春めきにけり
 みちのへのくち木の柳春くればあはれむかしとしのばれぞする
 玉柳えだもうごかぬ君が代になびくや風のしるしなるらむ
 立田川みむろのきしの古柳いかにのこりて春をしるらむ
 のどかなる風のけしきに青柳のなびくぞ春の印なりける
 さし柳ふる葉ながらにことしより春しり初る浅みとり哉
 六田川風ものどかに行水のみどりにかへるやなぎかげ哉
 青柳の糸をとなりみ宿は思ひかけずぞ人にとはるゝ
 よひの雨のなごりかすめる柳原ほのかにみするはるの色哉
 すみだ川わたしまつまの手すさびに結びてはなつ青柳の糸
 としふりて桁のみのこる板橋に春をかけたる糸柳かな
 春だにもまだ立なれぬ青柳のかげふむ道のめづらしき哉
 いさゝめのよしもなげなる青柳の糸の末にも結ぶ露哉
 鹽やかぬ入江ながらもはるの日にけぶるはきしの柳也けり
 はる風は梅がかさそふひまもなしあまり柳の打なびくころ

輔仁親王 菅家 伊綱 家長 經信 契沖 眞淵 蘆庵 春海 尊孫 景樹 廣海 榮政 有功卿

○若草

春草

わかくさ

はるくさ

二題ともに通はしてよめり秋の荻萩薄夏のさゆり江のあしなどなべての草の崩い

づるをいふあるは雨によりて青みわたりあるは野をやきてもえそふよしなどよむ也

- | | | | | | |
|----------|---------|----------|----------|----------|---------|
| ○新草 | ○さいたづま | ○さき草 | ○わか草の花 | ○小野の春草 | ○みどりの小草 |
| ○汀の小草 | ○染る草葉 | ○草のはつかに | ○まだ草だゝぬ | ○波の下草 | ○波のうき草 |
| ○磯菜 | ○つばなぬく | ○あしの若葉 | ○角ぐむあし | ○あしの下根 | ○淀の若あし |
| ○かれ立あしも | ○なびく玉藻 | ○なびく川藻 | ○川のうき藻 | ○浅芽もたけて | ○浅ぢばら |
| ○野澤のちばら | ○焼野のちばら | ○ふる根の萩 | ○野べの萩むら | ○萩の焼原 | ○すゝきはら |
| ○野べの芝生 | ○道の芝草 | ○眞菰草 | ○玉江のまこも | ○岩もさこすげ | ○岡の葛ばら |
| ○わか葉 | ○二葉 | ○新葉の色 | ○霜のふる葉 | ○まれにふる葉も | ○去年のかれ葉 |
| ○こそこのふる根 | ○古草まどり | ○かれふにまどる | ○かれふのすゝき | ○まだ霜がれの | ○おふる |
| ○おひそむる | ○おひ出る | ○おひかばる | ○いやおひ | ○澤べにおふる | ○もゆる |
| ○もえ初る | ○もえ出る | ○かつもゆる | ○みどりにもゆる | ○雪の下もえ | ○みどかき |
| ○けぶりみどかき | ○さざし初る | ○下めぐむ | ○めぐり初けり | ○めぐみあまれき | ○しげきめぐみ |
| ○御代のめぐみ | ○わかみどり | ○うすみどり | ○浅みどり | ○ひさつみどり | ○なべてみどり |
| ○かすみを染る | ○春にかへる色 | ○色なつかしき | ○うらわかみ | ○うひくし | ○はつかなる |
| ○おのがさまく | ○のびたゝぬ | ○まだ立のびぬ | ○また深からぬ | ○かずしけからぬ | ○生さきみゆる |
| ○れよげにみゆる | ○むらくみゆる | ○むらごにみゆる | ○めづらしげにも | ○いやめづらしき | ○春雨に色づく |
| ○春雨に色そふ | ○雪消て | ○雪の村消 | ○雪まぜに | ○雪より後 | ○雪まを分て |
| ○雪まに青き | ○雪ま待出る | ○うすらひの下 | ○野べのいろ | ○野べなつかしく | ○春の野 |
| ○かれ野の下 | ○番野の原 | ○野澤の汀 | ○入江の澤 | ○垣根みどりに | ○庭のかきれ |
| ○春の光に | | | | | |

けぶりたちもゆともみえぬ草のはをたれかわらびと名づけ初けん
 みよし野の山のかすみをけさみればわらひのもゆるけぶりなりけり
 さわらびを手毎に折てかへるかなわれこそかねて野へはやきしか
 わらび生る矢田の廣野に打むれてをりくらしつゝかへる里人
 さわらびももえやしぬらん山人の野やくけぶりはたな引にけり
 山道のたをりのわらびつがね緒もよそにもとめぬ青つゝら哉
 いざけふは萩の焼原かき分て手折てもこむはるのさわらび
 きいす鳴岡の小松の下わらびをりのこされて春たけにけり
 足たかやは山のわらびのもえしよりをりはへきじのねをのみぞ鳴
 みよし野のみすゝがもとは風さえてまだもえ出す春のさ藤
 汚葉のみとづる谷間のさわらびはいかでか世にはしられざるべき
 氷とけ岩まのたるみしたよりぬ谷の早蕨今ぞもゆらむ
 はしだてのさかしき山のさわらびは妹が手よりもとりがたき哉

眞 静
 小 好 信
 契 沖 忠
 眞 門 淵
 春 梁 景 順 廣 千
 景 樹 通 海 霜

○春曙

曉の後にて夜の明んとして物の色などすこしみえそめ山の横雲のわたり有明の月
 もやうく光をさまるころをいふ

- 明ぼのつらさ ○明ぼの山 ○明ぼのかすむ ○かすむ曙 ○横雲わたる曙 ○朧月夜の曙
- 山櫻月の曙 ○宿の曙 ○春くれかゝる曙 ○山かつら ○横雲の空 ○花の横雲

○月おちかゝる ○月のなごり ○かすみに残る ○岡への松に残る月 ○月もあはれに
 ○月花のあはれ ○月ならてながむる ○あり明の空 ○しのゝめがた ○しのゝめの空
 ○明わたる高れ ○花に明ゆく ○花よりしらむ ○しらみゆく ○ほのくゝこ ○ほがらかに
 ○ほがらくゝこ ○ほのかなる ○ほのぐらし ○夢をのこして ○心うきぬる獨れ ○かすみのひま
 ○かすみの底 ○かすみにつゞく ○霞にうさき ○鐘の音霞む ○ひさつに霞む ○音霞む
 ○山本かすむ ○月かけかすむ ○花もかすめる ○わきてかすめる ○春の色の霞に靡く ○もゝさりの聲
 ○花鳥の色れ ○匂ひくはゝる ○そらの匂ひ ○天つそら ○山のはも空も一つに
 ○山ぎはかけて ○山まゆ ○をちの村山 ○松もけふりて ○浦の松ばら ○船出する
 ○遠かたの里 ○みわたせば ○ながめそはてぬ ○心から ○あくがれ初し ○身にしむ
 ○たゞ身にしむ ○いひしらず ○いはむかたなく ○うさましからぬ ○たさしへなき ○たがならはしの
 ○秋にもまさる ○春にこもれる

はるはたい花の匂ひもさもあらばあれたゞ身にしむは曙の空
 今はとて田面のかりも打わびぬ朧月夜の明ぼのゝそら
 天原ふじのけぶりも春の色のかすみになびく明ぼのゝそら
 花さかば猶いかならんよしの山かすめる空のはるの明ぼの
 名もしるしみねの嵐も雪もふる山さくら戸の明ぼのゝそら
 思ひ出はおなじながめにかへるまで心にのこれ春の明ぼの
 何となく心うきぬる獨ねに明ぼのつらきはるのそち哉
 しづかなる月にと向ふ曙の心もしらぬもゝちどりかな

季 通
 寂 蓮
 慈 圓
 太政大臣
 定 家
 信 定
 隆 信
 景 樹

○春月

露の身を常にもがなと思ふまで心ぞとまるはるの明ぼの
下にこる利根の川戸の明ぼのはかすめる空のうつる也けり
霞立此明ぼの空ながら世をはる山にありへてしがな
あけぼのゝわが山ざくら立はなれ松にかゝれるはるがすみ哉
山まつひひきもたえて大井川花の時なる朝ぼらけ哉
中空にかすめる不二のゆきみえて川音遠しはるの明ぼの
人とはぬ花もにほひて柴の戸をわが明ぼのぞのどけかりけり
わすれめやかたのゝ花もかつみもる淀のわたりの春の明ぼの

同 有 秀 日 廣 壘 千 蘆
功 雄 善 海 滿 隆 庵

大かた霞わたりて影の臙なるがのどけき由に詠りまた霞を云はでたゝおぼろなる
さまにもよめり

- 夕月夜 ○月こそうたて ○月影かすむ ○月の匂ひ ○にほふ ○にほひになる
- 影こそかばれ ○影だにもらず ○影ほのかなる ○そのおもかげは ○猶かげ寒し ○かたぶくもみえぬ
- てりもせず ○臙に出る ○臙に宿る ○臙なるまで ○おぼろけならぬ ○曇りはてたる
- 曇りもはてぬ ○くもるさもなき ○曇りなくみだるゝだにあらぬ ○うつるもくもる ○かすむ
- かすむそなたに ○かすむならひ ○かすむ夜の匂ひ ○かすみに匂ふ ○霞におほふ ○かすみにゆるす
- かすみにくもる ○かすみにふくる ○かすみにもる ○霞がくれ ○霞そへたる
- 霞へだつる ○霞しく空 ○霞を分て ○霞をいづる ○霞をいでぬ ○霞をたどる
- 霞てかばる ○霞てのみる ○霞までのこれ ○霞の袖 ○霞のうへ ○霞の處に

万 同 古 後 新 同 勅 六 代

- 霞のうちち ○霞のたるま ○霞のまより ○霞めば暗ぬ ○霞めばうさき ○わりなく霞む
 - あやなく霞む ○雲ぬに霞む ○雲なき空に霞む ○花も一つに霞む ○涙も霞む ○雪げの空に
 - 空ほのぐらく ○空たのめなる ○有明の空 ○有明がたに ○夜半のあはれ ○春の夜は
 - 春の時しる ○春やむかし ○春のならひ ○春のしるしも ○春かさぬ ○きさらぎの空
 - やよひの中ば ○花ぐもりして ○花にうつるふ ○花の木かげ ○花しく庭 ○花まつ峯の
 - 木のまもりくる ○梅がゝも身にしむ頃 ○梅の匂ひ ○梅さく宿 ○梅かたる軒 ○梅かたる軒
 - 軒の板間 ○庭のごかなる ○岡への松に ○けぶりの外に ○ながむれば ○定かにみえぬ
 - おぼつかなき ○おぼはれながら ○老のなみだ ○あはれなりけり ○ふかきあはれ ○なにゝたさへむ
- 朝霞はる日のくれは木のまよりいざよふ月をいつしかまたむ
雪の上にてれる月夜に梅の花折ておくらむはしき子もがな
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
春くれば木がくれ多き夕月夜おぼつかなくも花かげにして
浅みどり花もひとつにかすみつゝおぼろにみゆる春の夜の月
てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき
なにはが かすまぬ浪もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に
あれたれば影もかくれぬ我宿の庭のどかなるはるの夜の月
さびしさをなにとへてながめましかすみてのこる有明の月
かすむ夜はゑしなが磯の浪の上につつすともなき月の影哉
河音のきよき流の月かげもなみをへだてゝ臙なるらん

業 家 家 千 孝 業 具 千 孝 業 具 千 孝 業 具
平 持 持 里 女 平 親 里 女 平 親 里 女 平 親 里 女
信 契 隆 具 千 孝 業 具 千 孝 業 具 千 孝 業 具
敬 冲 房 親 里 女 平 親 里 女 平 親 里 女 平 親 里 女

あはれとも思ひわかぬは月影のかすめる春の夜比なりけり
 なか／＼に雲はたえまもまたれけり霞はてたる春の夜の月
 鹽やかぬ入江の月のくもれるはけぶりのよそにかすむなるらん
 月まつとめがれぬ庭の松の葉のいつにまさりてかすむ夜は哉
 かつら川にごるとみしは久かたの月の光の霞むなりけり
 夕まりの音も音せずなりにけり柳にかすむ春の夜の月

○春雨

はるさめ はるのあめ

御杖 景樹 政像 廣海 伴塵 有功卿

春あたゝかなるころしめやかにふる雨をよむいかにも静かにふる物なればながめ
 がちに寂しき趣を詮とす

- 春のむら雨 ○春雨の空 ○春雨の恵みあまれき ○から衣春雨 ○木のめはる雨
- 夜半の春雨 ○雨しづかなる ○雨うちけぶる ○雨になる夜 ○雨のかずみる ○雨にうるほふ
- 時しる雨 ○かすむ雨 ○小雨そぼふる ○ふる ○ふるさしもみえでふる ○ふるさもわかぬ
- ふり初るかひある ○ふりくらす ○おしてふる ○おさなくふる ○霞よりふる ○いやしきふる
- しく／＼ふれる ○そぼふりくらす ○心してふれ ○なやみなく ○音しづかなる ○おさなもしのぶ
- けぶりしめりて ○雫さびしき ○花のしづく ○もろさしもなく ○かすみにそよぐ ○霞をつたふ
- 柳をつたふしづく ○しのぶにつたふ ○くもりふたがり ○くもるさもなく ○檜原くもりて ○こち吹はるゝ
- 軒ばにはれぬ ○しのぶの露 ○軒の玉水 ○にはたづみ ○あやおりみだる ○いざくり出す
- くるさもわかぬ ○くるゝ空より ○けふいく日 ○春のながめ ○はれぬながめ ○ながめの空
- ながめのみして ○つれづれ ○さびし ○さびし ○わきてさびし ○さびしき増る

万 古 後 新 同 代 同 同

- ひるまさびしき ○ゆふべさびし ○身を思ひしる ○はるもしづけし ○あまりしづかに ○御世のめぐみ
 - めぐみぞ増る ○あまれきめぐみ ○めぐみの露 ○木草をめぐむ ○うるほひわたる ○あまれくうるふ
 - 緑も色深く ○なべて染る ○山のみざりを染 ○庭のみざりに ○松山のもさのみざり
 - わか草もゆる ○小草をひたす ○下葉そひゆく ○草のかれふ ○草も木も時にあふ ○野べの小草
 - 道の芝草 ○花をばくゝむ ○花のしめゆふ糸 ○さくら波よる ○木高きかけ ○梢かけそふ
 - 風たえて ○山のは消る ○峯のかけはし ○色づく野べ ○萩の焼原 ○田をかへす
 - しづくの田の ○ふるの山田 ○苗代小田 ○蛙もきほふ ○かくれ家 ○ふるやの軒
 - ふるき垣れ ○梓弓おして
- 春の雨はいやしきふるに梅の花いまださかなくいとわかみかも
 わがせこが衣はる雨ふるごとに野べのみどりぞ色増りける
 春雨の花の枝よりながれては猶こそぬれぬ香もやうつると
 ときはなる山の岩根にむす苔の染ぬみどりにはるさめぞふる
 つく／＼と春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水
 春雨のあまねき御代の恵とは頼む物からぬるゝ袖かな
 草も木もときにあひたる春雨にぬれたる袖はなみだなりけり
 春雨のけふふり初るかひ有て山の梢はうすみどりなり
 くもり日の目にこそみゑて春雨のふるか朝けの風の露けさ
 軒くらすきはるの雨夜のあまぞよぎ数多も落ぬ音のさびしさ
 しめやかに花の所々さだめけり春の雨夜のものがたりして

家持 貫行 敏政 攝政 行慶 基良 九條前内 周防内侍 長流 宣長 春門

ちりのよのさらでも遠き山ざとにはるの夕のあめをきくかな
 かすみのみたてるとみゆる夕ぐれにかやが軒ばをつたふ雨かな
 朝ごちの吹もつよらぬ朝ぼらけねぶれる花に雨をこそしれ
 立こむるかすみがくれにふる雨をもゆる草ばの色にみる哉
 灯の花にさはらぬはる雨のよはしづかにもふけにけるかな
 市人のねざむる聲にのざむれば雨になりたる朝ぼらけ哉
 山にても花をば我やまたざらんうとげにもふるはるの雨哉
 すみだ川みのきてくだす筏士に霞むあしたの雨をこそしれ

徹 廣 久 桐 保 千 景 千 保 桐 久 徹
 廣 海 胤 廠 敬 別 樹 蔭

○春風 はるのかせ

春の始に雪氷を吹とくより柳の露を拂ひ花の香を誘ひなどすべて春の物に寄せてよむべし

- 東風ふく ○吹まふふ風 ○のどかなる風 ○春の朝風 ○春の山風 ○松のあらし
- 吹わたる ○吹ぬるむ ○吹かたみゆる ○吹も音なき ○吹さしられぬ ○吹さなき
- しづかにわたる ○なびくばかり ○雪も吹けず ○水ふきさく ○霞ふきさく ○霞をわたる
- 霞をこえて ○霞をはらふ ○梅がさそふ ○梅の園生にふく ○柳をたより ○霞をわたる
- 柳なびかし ○花吹ちらす ○花さそふ ○花にうき ○花の花匂ふ ○柳はなれず
- 野山の花に ○匂ひをちらす ○匂をはこぶ ○若草ふく ○小草もなびく ○花なき里
- 民の草葉 ○枝をならさぬ ○袖寒からぬ ○ぬるむしづくを ○けぬるし ○草葉なびかし
- 春さてのぞむ ○春のやどり ○春をわたる ○ぬるむしづくを ○けぬるし ○雪けもよほす

万 古 同 後 千 新 勅 月 代

霞たつ春日の里の梅の花あしの風にちりこすなめめ
 春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ
 かすみたつ春の山べは遠けれど吹くる風は花の香ぞする
 浅みどり亂しなびく青柳の色にぞはるの風もみえける
 あらしふく志賀の山への櫻ばなれば雲るにさ々浪ぞたつ
 ちる花のわすれ形見の峯の雲をだにのこせ春の山風
 うらむべき方こそなけれ春風の宿り定めぬ花のふる里
 をしむにはとまらぬ花の随へばうらやましきは春の山風
 花ざかりとひくる人のしるべしてあるじがほなる春の山風
 つくは山雫のつらけふとけて枯生のすつき春風ぞ吹
 ひばり鳴春の野風や根にこもる草のみどりを驚かすらん
 かすみ立山べはほども遠けれど花の香さそふはるの夕風
 雲もなきはるの朝げの空にこそなきたる風の色はみえけれ
 青柳ははる吹風の宿なればさそひし梅の香こそ絶せね

村 上 躬 恒 元 方 元 眞 公 行 眞 良 平 入道前大政 眞 廣 眞 季 廣 眞 春 門 廣 廣 有 功 卿 足 癩

○春野 春眺望 はるのながめ

これは眺望と同じ事なり春の麗かなる日にいづこにまれ遠くみ渡したるを云ふ
 ○ながめなれたる ○ながめくらせる ○見わたせば ○見えわがで ○みるめも遠く ○沖のみるめ
 ○めもはるに ○うちわたす ○春のけしき ○うらくこ ○のどかなる ○のぞむ空かな

○ほのかになりて ○ほのかなり ○ほのかなる ○ほのくき ○朝あけ ○春の朝ぼの
 ○春の夕ぐれ ○夕日さす ○夕日をかくす山端 ○かすむ夕日 ○入日もしづむ波
 ○夕月夜 ○夕ぬる雲 ○八重がすみ ○うすがすみ ○霞みゆく ○霞しく
 ○霞にあまる ○霞のいろ ○霞のうへ ○霞のうち ○けぶりもかすむ ○はてもなく
 ○かぎりなく ○遠かた ○遠くなる空 ○ほごばさかりて ○もろこしまでも ○涙ぢかすみて
 ○沙路かすみて ○沙路はるかにかに ○八重の沙ぢ ○はるのしほぜ ○浦よりなち ○大わたの
 ○花鳥 ○花のいろ ○柳原 ○新草のもゆる ○古草のかれふ ○あしのはに
 ○峯のしら雪 ○山高み ○山のはの雲 ○五百重山 ○もへ山 ○八重山
 ○沖つしま山 ○朝日さす外山 ○白雲の重なる山 ○遠山かすみ ○山本の里 ○山本かすみ
 ○霞む川戸 ○川添の堤 ○すその原 ○野づかさ ○いひしらず

見わたせば柳さくらをこきまかせて都ぞはるの錦なりける
 立わたる霞のみかは山高みゆるさくらのいろもひとつを
 はるくと八重の沙路におく網をたなびく物は霞也けり
 霞しくはるの沙ぢをみわたせばみどりを分る沖つしら波
 見わたせば山本かすみ水なせ川夕は秋となに思ひけむ
 花のいろにあまざるかすみ立まよひそらさへ匂ふ山ざくらかな
 かすみしく松浦の沖にこぎ出てもろこしまでの春をみる哉
 ひばりあがる春の朝けにみ渡せばをちの園原霞たなびく
 天つ空かすめる月にふじの根の雪より上のはるをみるかな

素性 よみ人 節信 長家 慈圓 眞淵 尊孫

足引の山かたそばの上ぬぎ原それも春にはもれぬいろかな
 みなせ川せいの白波くれ初てともし火かすむ山本のさと
 青柳のけぶりなびかしこちふけば池の水づらさよにこりせり
 にはをよみ若めかり舟出にけりうらめづらしき春の朝なぎ
 花もよひなせりとときよてはしりでの外山の梢みぬ朝もなし

季鷹 春門 春日 太善 有功 有卿

○歸鴈 かへるかり

秋の半に來し鴈の春の半頃より北に歸るを云ふ必ず歸ると云ふことなくとも何に
 ても春の歌だにあればくるしからず

○鴈かへるなり ○鴈のやどり ○鴈のもろこゑ ○鴈の羽風 ○鴈のゆくへ ○さきだつ鴈
 ○こまらぬ鴈 ○くもぬの鴈 ○はるの鴈 ○はるゆく鴈 ○はるの鴈がれ ○霞む鴈がれ
 ○沖めかりがれ ○玉もかりがれ ○やどかりがれ ○衣かりがれ ○衣をかりも ○夜深く鴈の
 ○こゑのみもれて ○こゑさへかすむ ○こゑ吹送る風 ○松風聲にかふふ ○なのりて過る ○わかれになく
 ○月になくく ○月にみだれて ○月に羽ぶきて ○羽こゝろみる ○はれかはす ○はれもたゆく
 ○雲をつばさに ○つばさ消ゆく ○とびかすむ ○とびこえて ○嶺飛こえて ○つらをはなれて
 ○春雨にしなれて ○玉つさ ○一つれ ○いくつれ ○つら亂れゆく ○つらをはなれて
 ○かへる ○かへりゆく ○かへりわづらふ ○かへりなれたる ○かへらばいそげ ○歸る雲路
 ○引つられかへる ○まごほにかへる ○あひも思はでかへる ○山のはをかへりみぢち
 ○霞までかくれ ○雲の通ぢ ○道ゆきぶり ○ごこ世にかへる ○遠き常世に ○越路にかへる
 ○越路の空 ○越路をたび ○越路をさして ○なが旅 ○旅のやどり ○中宿りせよ

- ふるさどへ ○雪ふるさどへ ○花なき里 ○たつ ○思ひたつ ○たちのいそぎ
- くもにいろ ○今ほきて ○しづ心なく ○ごまらぬ心 ○なごりかすめる ○わすれがたみ
- 物わすれせぬ ○花をみすてゝ ○霞を見捨 ○春の別路 ○春をそむけて ○くる春ごさに
- つばめくる時 ○又こむ秋 ○秋さちぎりにて ○行方遠く ○行方の花の匂ひ ○見えがくれ
- 敷あらばるゝ ○雲に消ゆく ○雲ぬにまよふ ○ほごば雲ぬ ○波ちをわくる ○遠ざかる
- 月をのこして ○月影は残る雲よ ○見おくる月 ○霞に消る ○霞めば遠き ○霞がくれに
- 霞む雲ぬ ○霞の衣 ○雲の衣 ○うき雲 ○横雲にわがるゝ ○しら雲
- 白雲のはたて ○一むら ○暁またで ○有明がたる ○明ぼのゝ空 ○この明ぼのを
- しのゝめ ○墨染のゆふべ ○うす墨の色 ○夜をこめて ○よるの峯ゆく ○さ夜や更ぬる
- 天つそら ○中そら ○花のさかり

はるくれば鴈かへるなり白雲の道もきぶりにことやつてまし
 春がすみ立を見すてゝゆくかりは花なき里にすみやならへる
 かへるかりくもぢにまどふこゑすなりかすみふきとけ春の山かせ
 ふるさとのかすみとびわけ行かりは旅の空にや春をくらすむ
 薄すみにかく玉づさとみゆる哉霞みの空にかへるかりがね
 ながむればかすめるそらのうき雲とひとつになりぬかへるかりがね
 春くれば田面のかりも今はとてかへる雲路に思ひたつなり
 霜まよふ空にしをれしかりがねのかへるつばさに春雨ぞふる
 今はとて田面のかりも打わびぬおぼる月夜の明ぼのゝ空

朝 恒
 伊 勢
 よみ人 ず
 同 基
 國 基
 良 經
 俊 頼
 定 家
 寂 蓮

ゆくそらもなくくかへるかりがねや花のみやこは立うかるらん
 春雨におほひ羽たのむかりがねもいまはの心しをれてやゆく
 天つかりこえゆく山のそなたにはかすまぬつらを今や見おくる
 はるくれば霞をみてや鴈がねの我もと空におもひたつらん
 未遠くみはてむものを山のはになごりかすめる鴈の聲かな
 今はとてはねこゝろみるわざならん立てはおつる春のかりがね
 ひめじまの磯わにすだつ鴈さへや同じ常世に思ひ立らん
 草枕旅を常なる鴈すらもかへる空には音をぞ鳴ける

式 部
 契 沖
 春 満
 宣 長
 政 直
 廣 海
 廣 足
 景 樹

○春駒

はるのこま

春草の漸くに生出たるころ野又は澤べなどに駒を放ち飼ふる事なり

- わか駒 ○あら駒 ○はるのあら駒 ○あるゝあら駒 ○いさめる駒 ○はなれ駒
- つな駒 ○たなれ駒 ○友よぶ駒 ○春さぎ駒 ○をぶちの駒 ○つるふちの駒
- つの國がひの駒 ○かひの黒駒 ○野べのぼる駒 ○尾黒 ○尾花あしげ ○ふりがみ
- おのがかけ ○妻あらそふ ○いさむ ○こゑいさむ ○あるゝ ○あれまさる
- 立めぐる ○ふみたつるちり ○風管ふみしたく ○おりたちて ○たちごもみえず ○ゆくへもみえず
- さゝめもあへず ○雪のひまゆく ○あさる ○あさりゆく ○あさりあらそふ ○澤べにあさる
- 汀にあさる ○草はむ ○まだけぬ草はむ ○草づく ○草につながる ○若草になづむ
- なづむ ○汀はなれぬ ○なづくる ○いばゆる ○風にいばゆる ○霞にいばふ
- 廣にむせぶ ○はなちかふ ○手になるゝ ○ひく ○さる ○野がひ

○つなぬの野へ ○春草に ○わか草に ○あしのわか葉 ○萩の焼原 ○澤べのぬなほ ○いさゆふ ○かすみかくれに ○淀野(山城) 美豆の御牧(同) 交野の御牧(河内) 難波江(攝津) 三島江(同)

立はなれ澤べにあるゝ春駒はおのがゝげをや友とみさらん
とりつなぐ人もなき野の春駒は霞にのみやたなびかるらん
眞菰草角ぐみわたる澤べにはつながぬ駒も放れざりけり
もえわたる草葉のみかは小笠原駒のけしきも春めきにける
みごもりに蘆の若葉やもえぬらん玉江の沼にあさる春駒
小笠原みづの御牧にあるゝ駒もとればぞなづく子らか袖はも
もえ出るをぎの焼原はるめければ駒のけしきを引かへてけり
はる草の穂坂の小野のはなれ駒秋ぞ都へひかんとすらん
野を廣く空にとかける春駒はあそぶ糸にぞつながれにける
のどかなる春の野原を見わたせばあるゝ駒にもものる心かな
かげろふのもゆるあら野のあら駒もうら若草になるゝ頃かな
引かへてのとけかりけりやくかげも霞のひまの野べの春こま

○雉

子を思ひ妻を戀ふる事の切なる由によめり
○きつの羽音 ○たつきつ ○朝だつきつ ○朝なくきし ○きつなく ○きつなくば鳴

兼 盛 俊 清 法 師 景 同 蒼 春
長 經 基 雅 輔 親 俊 樹 生 庭

○すまの宿 ○きつすのありか ○きつす鳴片野 ○あさるきつす ○やつをのきつす ○やけ野のきつす
○かた岡のきつす ○尾上のきつす ○片山きつす ○さをどるきつす ○ひな ○すだつ
○すまろたつ ○羽うつ ○羽だく ○こよむ ○なく ○音になく
○かくれなき ○ほろゝさぞなく ○朝なくなく ○霞の下になく ○畑の下になく ○しばなくこゑ
○こゑしきる ○こゑあらはなる ○こゑかすかなり ○こゑは春めく ○つまごひ ○つまごひ
○草のつま ○つまこふる ○つらき妻よぶ ○おのがつま ○妻ごゝもにも ○あさる
○あさりゆく ○雪まにあさる ○芝つつりして ○れぐらの霜 ○野火消す ○おのがありか
○ありか定めず ○身をかくす ○かくれもやらぬ ○裾野をさらす ○野原になるゝ ○なるゝ野原
○御かりせし野べ ○みかり野 ○かりはの小野 ○かりにくる ○かり人も ○人あさる
○かりのうき世 ○千代のひつき ○草わかみ ○草がくれ ○芝生がくれ ○草のばら
○雪のきえま ○霞へだてゝ ○霞がくれ ○あり明がたに ○しのゝめ近く ○哀なる此曙
○春の野 ○やけ野 ○やき捨し野 ○朝ふむ野べ ○かた岡野べ ○野べの芝ふ
○裾野の原 ○野ぢのしの原 ○尾花か原 ○むら澤 ○春の山ぢ ○谷をへだてゝ

名所 小鹽山(山城) 大原山(同) 嵯峨野(同) 春日野(大和) 交野(河内) 昆陽野
(攝津) 猪名野(同)
春の野にあさるきつすの妻ごひにおのがありかを人にしれつゝ
足引のやつをのきつす鳴とよむ朝けの霞みればかなしも
朝まだきすりふの岡に立きじは千代のひつぎの始也けり
春日野に朝鳴きじのはねの音は雪の消まに若なつめとか
みかり野にまだふる雪は消ねどもきつすの聲は春めきにけり

家 元 重 能
持 人 之 因
し 之 之 之
ら 之 之 之

かりにくる人もこそあれ春の野に朝なくきじのしるゝも有哉
 さいたづままだうらわかきみよし野のかすみかくれにききす鳴なり
 やきのこすかた山ばたの村すいき頼むかげとやききす鳴らむ
 人めなきかきねのききす音に鳴て春のねぶりを驚かしつる
 行さきもわかすかすめる明ぼのゝ山かたつきてききす鳴なり
 玉つばき句へる色もみえ初て明るは峰にききす鳴なり
 夕づく日やゝかけり行片岡の小松かくれにききす鳴なり
 むさし野を夜ごめに立て分くれればあくゝをぐきに雉鳴也
 咲つゝ小田のすゝし雨過て羽だゝく雉の音ぞま近き
 都人心もく野の野づかさにいこひてをればききす鳴なり
 打かすむ夕山ざくらちるなべにほろゝとなくやききす成らん

順 忠 雅 春 景 日 美 有 同
 度 有 庵 門 正 樹 善 痴 痴 痴 痴 痴 痴 痴 痴

○雲雀

ひばり

子を思ふ事の深き物にて空にあらりても下にある巢を守るものなり雲雀の床とは
 芝生などにおのが作れる巢をいふとぞ

- ひばりたつ ○ひばりあがる ○ひばりなく ○ひばりの床 ○たつひばり ○夕ひばり
- 鳴れ空なる ○くもぬになく ○草にはなかね ○空にさへづる ○聲はして ○こゑたてゝ
- 聲のみきたゆ ○雲まのこゑ ○かすまぬ聲 ○つばきもみえず ○つばき休めず ○つばき休むる
- あさる ○あがる ○あがるそら ○あがるる ○くもぬにあがる ○霞にあがる ○たつ

- 雲に入 ○草にいる ○おちくる ○おちては草に ○おち草 ○落てもみえぬ
- 空よりおつる ○霞におつる ○浅ちにおつる ○焼野にかへる ○子を思ふ ○芝生の巢
- 床しむる ○床のすみれに ○床は草葉 ○草葉の床 ○住なるゝ床 ○まだ床しめず
- かすむすがた ○かすむそなた ○霞をわくる ○霞にまがふ ○霞に消る ○霞の中
- なれしかすみ ○風にふかれて ○風にふかるゝ ○木がくれ ○芝草がくれ ○草のみざり
- 草のは山 ○若草の芝生 ○道の芝生 ○芝生の原 ○浅ち原 ○萩の焼はら
- 霞む春野 ○つばなぬく野 ○霞の末野 ○野澤の水に ○水にかけうつす ○朝日まつ
- 雲の通路 ○かよひち ○行きのひま ○空おくてりて ○花の雲まに ○あくがるゝ
- 春ふかみ

名所

原(近江)

片岡(山城) 比叡の山(同) 吉野山(大和) 飛火野(同) 春日野(同) 岡田の

萬 玉 新拾 六百 御集 千首

うらゝくにてれる春日にひばりあがり心かなしも獨し思へば
 未遠きわか葉の芝生打なびきひばり鳴野の春のゆぐれ
 野べみればあがるひばりも今はとて浅ちにおつる夕ぐれのこゑ
 片岡のかすみも深き木がくれに朝日まつまのひばり鳴也
 春深き草のは山の夕ひばりおちくるほどもそれとやはみし
 春の野の霞をわけて鳴こゑのいや遠ざかる夕ひばりかな
 かすみたつ春野のひばり何しかも思ひあがりてねをば鳴らむ
 春さればすみれ咲野の朝霞空にひばりの聲ばかりして

よみ人 定 家 女 後 師 眞 枝
 しらす 家 隆 房 鳥 兼 淵 直
 院 兼 淵 直

くもる日のなきたる空に聲はして霞におつる夕ひばり哉
 さわらびのもゆる春日の夕ひばりあがるも落るかげかとぞみる
 かのみゆる岡への空は朝雨の霞になりてひばりなくなり
 夕ひばりかすみかくれになりけりあがるかぎりやつくしたりけん
 くもの上にあがるひばりをはるの野に大宮人も出てきくらん
 おもしろくさへづる春の夕ひばり身をば心にまかせはてつゝ

章 永
 黄 中
 久 胤
 同
 隆 正
 景 樹

○喚子鳥 よふこどり

此鳥の事は詳ならず春のころたゞ子を喚ぶ鳥と心得てよむべし又人をよぶやうになくとも

- 人よぶこ鳥 ○友よぶこ鳥 ○たれよぶこ鳥 ○夕ぐれのみゑ ○こゑなつかしき○花になく
- ひそりなく ○來鳴わたる ○來なきよめる ○いたくなきそ ○心ほそなるれ ○しきまにぬれて
- よぶかひありて ○よぶはたがため ○猶よびかへせ ○君よびかへせ ○なよびまめそ ○通行春をよぶ
- こたふればまた ○こたへまほしき ○こたへしてまし ○こたへせぬ ○こゑ人をまつ ○くる人もなき
- 人もこなくに ○たがために ○たれをかくのみ ○たれさそふ ○道ふみまふ ○おなづ心に
- 心ほそく ○うらかなしくも ○いさはれてのみ ○たづきもしらぬ ○おぼつかなく ○あはれさきく
- われひそりきく ○なにつくべき我身 ○春のむなしく過行 ○山こひ ○山かけ
- 山もさ ○はる山 ○深山の奥 ○かた山林 ○林の木かけ ○世のかくれが
- 有明の空 ○夕まぐれ ○かすむ夕ぐれ ○夕はわきて ○夜の更ぬきに ○さ夜更て
- 霞のおく ○花のよすが

名所

佐保山(大和) 吉野山(同) 信太の杜(和泉) 布引瀧(攝津) 霞關(武藏) 奈古

万 同 古 後拾 金 月

倭にはなきてかくらんよぶこ鳥さぎの中山よひぞこもなる
 瀧の上の御舟の山も秋つべにきなきわたるはたれ呼子鳥
 をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥哉
 われひとりさくものならば呼子鳥二聲とだになかせざらまし
 いとか山くる人もなき夕ぐれに心ほそくもよぶこどりかな
 おぼつかなたれをかくのみよぶ子鳥人かすならばこたへしてまし
 はるかなるみ山の柳の斧の音にこたへてもなくよぶこ鳥かな
 春山にさきたるさくらちらぬまにみにこと人をよぶこ鳥かも
 花ちらふかた山林今さらにかひなき音にもよぶこ鳥かな
 柴人の家ちをさへにうながしてよぶこ鳥なくはるの夕ぐれ
 とめくればあらぬかたにもよぶこ鳥なか／＼我におくれたりけり
 よぶこ鳥よぶにやあらむ山ひこのこたふる聲も聞ゆる哉

黒 人
 よみ人
 しらす
 同
 法 圓
 尾 張
 親 佐
 春 滿
 宣 良
 千 隆
 英 升
 廣 海
 景 樹

○櫻

花 花 さくら はな

花といふ題にて櫻をよむはよしといひ櫻といふ題に花とのみよむは好むへからず
 おなじくはさくらとよむべきなりといへり

- さくら花 ○さくら色 ○さくら木 ○さくら咲 ○さくらの枝 ○さくらの匂ひ

○さくらがら	○さくら人	○さくらがらす	○さくら波よる	○さくらに曇る	○花ざくら
○うす花ざくら	○うすざくら	○一重ざくら	○八重ざくら	○しだりざくら	○いとざくら
○緋ざくら	○おぼざくら	○いねざくら	○いざくら	○おそざくら	○初ざくら
○若ざくら	○若木のざくら	○老木のざくら	○朽木のざくら	○高木のざくら	○並木のざくら
○千本のざくら	○しげみざくら	○尾ごしのざくら	○尾上のざくら	○高根のざくら	○山ざくら
○山ざくら	○み山ざくら	○あし山ざくら	○片山ざくら	○遠山ざくら	○外山のざくら
○夕山ざくら	○袖山ざくら	○磯山ざくら	○磯わのざくら	○浦わのざくら	○野中のざくら
○雲わのざくら	○御階のざくら	○御垣のざくら	○垣根のざくら	○庭ざくら	○砌のざくら
○なざらのざくら	○汀のざくら	○岩根のざくら	○岩本ざくら	○家ざくら	○花ぶさ
○花がづら	○花くたし	○花その	○花なれや	○花ぐもり	○花いかだ
○花ごもろ	○花見がてら	○花もてはやす	○花わけのぼる	○花ゆゑたごる	○花よりあくる
○花よりしらむ	○花よりいづる	○花より奥は	○花も時とて	○花も時めく	○花もひさしほ
○花になりゆく	○花にあらはる	○花にまきる	○花にいさひし	○花にさばらぬ	○花にこさよふ
○花にうきたつ	○花に名たまる	○花にたごる	○花にたちよる	○花の檜	○花の立枝
○花の木がくれ	○花の木深き	○花のちもこ	○花の下ひも	○花のひもこく	○花のふまひ
○花のおもて	○花のおもかげ	○花のかけ	○花のすおた	○花のよそめ	○花のおく
○花のあたり	○花のこころ	○花のたより	○花のひかり	○花のしづえ	○花の夕ばえ
○花のゆふはへ	○花のたもこ	○花のばやし	○花の外なき	○花の下風	○花の日かざ
○花のしをり	○花のかけふじ	○花の山ぶみ	○花の朝露	○花のあけぼの	○花のきみ
○花のおほきみ	○花のあそト	○花の山もり	○花のさも	○花の宿かる	○花の下ぶし

○花のたびれ	○花のまごぬ	○花のむら立	○花の村雲	○花の横雲	○花のしら雲
○花のしら雪	○花のふゞき	○花のきゞ波	○花のしがらみ	○花の大ねざ	○花のしらゆふ
○花のかゞみ	○花のむしろ	○ほつえの花	○しづえの花	○すめらみ國の花	○しめゆふ
○こさばの花	○心づくしの花	○心も花に	○月さ花さ	○ゆふ花がづら	○まだ花ならぬ
○春べ花さく	○ふよめる	○つぼめる	○ひさふさ	○ひさひら	○さく
○さきつゞく	○咲のをり	○咲のさかり	○さかりまだしき	○さかり過ぎぬ	○見のさかり
○ほごもなくさかり	○今さかりなり	○年に稀なる盛	○ほころび初る	○おそくさく	○青葉まどり
○むかしの色に	○まがふ色なき	○くるゝ色なき	○薄くれなぬ	○にほふ	○匂ひあまれる
○匂ひかさなる	○匂ひこよなき	○こほれて匂ふ	○空さへ匂ふ	○霞も匂ふ	○はるの匂ひ
○我日の本の匂ひ	○さゞ波かゝる	○ちり	○ちりのまがひ	○うつる	○うつろひ安き
○梢ゆかしき	○かた枝	○枝にこもれる	○枝にこもる	○枝もこをゝに	○このもこ
○木の下かけ	○木隠れ多き	○うゑおく	○うゑおくやど	○もろこしにさかぬ	
○からになき	○三國がらかも	○なきたる空	○雲よりおく	○みれのしら雲	○八重のしら雲
○春がすみ	○霞のひま	○霞立かくす	○さそふあらし	○春風よばふ	○雲のかへしの
○吹さもなき風	○風しづかなる	○風をいさふ	○雨をいさふ	○おもれる露	○雪かごぞみる
○峯つゞき	○峯のかけはし	○山たかみ	○山下風	○山のさかけ	○山のぼさこ
○山のかひ	○山分すぐる	○山ちくらしして	○はるの山ぶみ	○すゞの下道	○み谷がくれ
○おられぬ水	○波にうかべる	○杜の木がくれ	○松のはごしに	○のぞかなる	○うらくこ
○みやこのはる	○はるの光	○春もおくある	○明ほのいそぐ	○夕ばえまさる	○夜もわすれぬ
○よるさへみよこ	○まだみぬかた	○みまよはし	○見れどもあかず	○長き日あかず	○あかぬ心

○心のどかに ○心づから ○あくがるゝ ○わけいる ○家つこ ○家路わするゝ
 ○かへるさ遠き ○さひくる人 ○みぬ人のため ○をりそふる ○をりかさす ○をりつれば
 ○こぞのしなり ○年にかはらぬ ○あだなる ○あはれさも ○たごしへなき ○たごふべき物なき
 ○おくぞゆかしき ○いひしらぬ ○ほくらしき ○れぐらの鳥

名所

大内山(山城) 嵐山(同) 朝日山(同) 大井川(同) 日の岡(同) 天の香
 具山(大和) 吉野山(同) 朝の原(同) 交野(河内) 難波瀉(攝津) 須磨の浦(同) 志
 賀の山(近江) 隅田川(武蔵) 霞の關(同) 淡路島(淡路)

萬 同 古 同 同 後 同 拾 後 同 金

はる雨にあらそひかねて我宿のさくらの花は咲初にけり
 あし引の山ざくら花けならべてかくしきけらばいとこひめやも
 みよし野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける
 ふるさとゝなりにしけうの都にも色はかはらず花はさきけり
 さくら花さきにけらしもあし引の山のかひよりみゆるしら雲
 石上ふるの山べのさくら花うゑけむ年をしる人ぞなき
 大空におほふばかりの袖も哉はるさく花を風にまかせじ
 吹風にあらそひかねて足引の山のさくらにはほころびにけり
 花みると家ちにおそくかへる哉まつ時すぐと妹やいふらん
 高砂の尾上のさくら咲にけり外山の霞たゝすもあらなん
 よしの山みねの櫻や咲ぬらむ麓の里に匂ふはるかぜ

よみ人 赤 友 平 貫 遍 兼 同 匡 攝
 しらす 人 則 城 之 昭 盛 房 政
 左

詞 同 千 同 新 同 同 勅 同 同 月 同 代 草

木のもとをすみかとするればおのづから花みる人に成ぬべきかな
 みやま木のその梢ともみえざりき櫻は花にあらはれにけり
 咲しよりちるまでみれば木のもとに花も日数のつもりぬる哉
 またやみむかたのゝみのゝさくらがり花の雪ちるはるの明ぼの
 さくらさく遠山鳥のしだり尾のながくし日もあかぬいろかな
 山ざくら今かさくらむかげろふのもゆるはる日にふれるしら雪
 けふみれば雲も櫻に埋れて霞かねたるみよし野の山
 古の雲ゐの花にこひかねて身をわすれてもみつる春かな
 白雲の八重山櫻咲にけり所もさらぬ春のあけばの
 さゝ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな
 ときは木にたえくかゝる白雲や青葉まじりの櫻なるらん
 くもゐなる山のさくらをみわたせばこは世にしらぬ花の色哉
 山たかみあまきさくら咲にけりかすみか上にあふれる白雪
 山ざくらちればさきつぐかげとめて大かたはるは花にくらせり
 敷しまのやまと心を人とは朝日に匂ふ山さくらばな
 君が代は大宮人にあらぬ身も櫻かざして春をくらすむ
 大なる川かへらぬ水にかけみえてことしもさける山ざくらかな

花 山 院 頼 白 河 院 俊 太 上 天 皇 後 京 極 家 隆 俊 入 前 大 道 忠 内 大 臣 道 時 頼 阿 眞 淵 宣 長 定 信 景 樹

曙のまつのはやしをゆきはてゝあらしの山の花をみる哉
 たえぐに雲ぞかゝれるあし引の山さくら花咲にけらしも
 みかは水ながれ出たる花みても雲ののはるのしたはしき哉
 ことのはもおよびたえたるさくら花かすみのこせるからとみらん
 はる雨の名残の露の朝さくら思へば花のちらすぞありける
 世の中に花みてくらすはるばかり思ふことなき時はありけり
 たえぐにみえゆく花の色にこそこめしかすみもうれしかりけり
 ふもと田のなはしろ水にかけみえて山のさくらは咲初にけり
 もきならばかきはらはましまさくら花枝もおもげに咲みちにけり
 あし引の山にさくらのなかりせばいとひし世にも出ぬべきかな
 わがくにのみつのためからに一種をそへてあふぐはさくらなりけり
 大君の御手もてかざす咲花の萬代までにつかへまつらむ

廣 海
 詮 謙
 久 重
 千 胤
 政 直
 枝 直
 有 文朝臣
 有功卿
 同
 資 枝卿

○尋花

- 尋つゝ ○尋きたれば ○尋つくさむ ○尋きて ○くれぬとも
 ○つま木の道 ○のどかにわくる ○かへりくる宿 ○霞にへだゝる ○けふもくらしつ ○くれはてぬ
 ○いくへこえきぬ ○みれつゞき ○よそにては ○わかばぞわかむ ○おもかけに ○心をさへもしたる
 ○こぞのしをり ○まだみぬかた ○さそはれて ○いたらぬ里のなき ○かたも定めず ○けふいく里を
 ○まじふ ○花みるこ ○花のすがた ○花にあかね ○花の楢に ○花よりさきに

拾 後拾 詞 千 同 新 月

○花ゆゑに ○花を見て ○花のまごころ ○かゝらぬ山のなき ○しらぬ山路 ○山路は末になる
 いづこにかこの頃花の咲ざらん心からこそ尋られけれ
 あけば又尋にかむ櫻花こればかりだに人におくれじ
 春くれば梢の花にさそはれていたらぬ里のなかりつるかな
 ささぬやとしらぬ山ぢに尋いるわれをば花のしをる也けり
 尋つる花のあたりに成にけり匂ふにしるし春のやまかせ
 よし野山こぞのしをりの道かへてまたみぬかたの花をたづねむ
 花みむとは山しげ山分るまに心をさへもしをりつるかな
 大かたの花の盛を心あてにそこともいはず出しけふかな
 白雲のいくへの峯かこえつらむ外山の花とおもひ立しを
 大かたにおぼめくほと白雲もわくれば匂ふさくらなりけり

元 任
 白 河 院
 攝 政
 崇 德 院
 西 行
 顯 家
 景 樹
 知 紀
 重 業

○待花

- つぼめる花 ○ふゝめる花 ○花よいかに ○花さかば ○花をいそぐ ○花のおもかけ
 ○花待ほごの花かさ ○花まつころ ○花までは ○花待どほ ○まつを心の ○まつしるしなく
 ○まつは久しき ○まつほごに ○まちごほに ○まちわぶる ○いつさかまたん ○楢に匂へ
 ○枝にこもれり ○いまだふゝめり ○ばやもさかなん ○さきやらぬ ○まださかぬ ○さかぬま
 ○さかぬ日かず ○さくころの日かず ○さく頃はまだ遠山 ○見まくほしさ ○いそぐ心
 ○心いられ ○おもへども ○けふかあすかど ○いつしかも ○つくくさながむる ○はるのつれづれ
 ○人だのめなる ○春立さいふより ○春雨のふるさへうれし ○けふの小雨に かつみのいろに

鶯の木づたふ梅のうつろへば櫻のはなの時かたまけぬ
妹が名にかゝせるさくら花さかば常にやこひんいやとしのはに
わがせこが古き垣内の櫻ばないまだふゝめり一目見にこね
宿ちかくうつして植しかひもなく待遠にのみ匂ふはなかな
おもひやれかすみこめたる山里の花待ほどの春のつれづれ
山ざくら梢の風の寒ければ花のさかりになりぞわづらふ
しるらめやかすめる空をながめつゝ花も匂はぬ春をなげくと
つれづれの身にもそふべき心さへ花まつ程はあくがれにけり
はるの日の長閑けき花の心とて咲をいそがぬ山ざくら哉
ちることをなにかいひけむ山ざくらさくも心にまかせざりけり
咲花をわりなくいそぐ心より待にあまたの日敷をぞふる
わが宿の梢ばかりとまちわびてとひおくれたる山ざくらかな
さくら花まちつゝくらすはるの日はながめわびぬる物にぞ有ける
山ざくらかすみの奥にふゝめりとおもへばまつもたのしかりけり

○初花

- 初花さくら ○初ざくら花 ○枝にこまれる花 ○ひひさはな ○かつさく花
- またれし花 ○いろおく花 ○花のたもこ ○はこるぶる ○ほころび初る ○ひもごき初る
- 咲そむる ○一本さく ○めづらしくさく ○心ありてさく ○ひさえだ ○けさの一枝

よみ人
しらす
家 兼 中 經 中 兼 家 同
持 輔 將 忠 務 延 庭 樹 庭 正 春 景 春 覺 中 經 中 兼 家 同
竹 久 正 春 景 春 覺 中 經 中 兼 家 同
翁 胤 道 庭 樹 庭 延 務 忠 務 延 庭 樹 庭 正 春 景 春 覺 中 經 中 兼 家 同

○枝にすくなき ○朝日さすかた枝 ○きのふまで待し楢 ○雲になる楢 ○月の匂ひそふる
○はる日匂ふ ○白雲匂ふ ○うひくしくも ○あらそひかれて ○此はるさめに
○霞の色もかばる ○外山の雲にまがふ ○ゆきみえそむる ○いまだまれなる ○よそにおくれぬ
○まちえたる ○はつかにみゆる ○見そむる ○春しり初る ○空うちまげく

ことしよりはるしり初る櫻花ちるといふ事はならはざらん
吹風やはる立きぬとつげつらん枝にこまれる花さきにけり
さくら花をりて見しにもかはらぬにちらぬ斗ぞしるし成ける
ほどもなくちりなんものをさくら花心久にもまたせつるかな
うらくとどけきはるの心より匂ひ出たる山ざくらかな
朝日かげ花の匂ひにくはゝりてうらゝにさける山ざくら哉
とくさくはとくちりぬれど山ざくらまづ見初るかうれしかりけり
はることにかはらぬ花の色ながらはじめてみるはのづらしきかな
いなり山かざすばかりは杉の葉のひまより花もあらはれにけり
わかやどの軒ばの岡にさく花のまだき姿はよそにてぞ見る
あはれくわれに千年の命あらばもづらまほしき山櫻かな

○盛花

- 世は花になる ○花なき里もなき ○花のさかり ○見のさかり ○匂ふさかり ○春のさかり
- 御代のさかり ○けふなさかり ○今なさかり ○今さかりかも ○咲そふ花 ○咲みちて

花ざかり

貫 之
よみ人
しらす
家 兼 中 經 中 兼 家 同
持 輔 將 忠 務 延 庭 樹 庭 正 春 景 春 覺 中 經 中 兼 家 同
翁 胤 道 庭 樹 庭 延 務 忠 務 延 庭 樹 庭 正 春 景 春 覺 中 經 中 兼 家 同

○咲ものこらぬ ○さきをより ○匂ひみちたる ○匂ひあまれき ○色ふかく ○ちるべくもあらぬ
○梢あまた ○えだゝわに ○おしなへて ○のこる方なく ○風もさわがぬ ○霞にまがふ雲

さくら花今さかりなりなにはの海おして宮にきこしめすなへ
はるがすみいろのちぐさにもえつるはたなびく山の花のかけかも
朝ぼらけ下ゆく水は浅けれど深くで花の色はみえける
みよしのゝ花のさかりをけふみればこしの白ねにはる風ぞふく
おしなべて花のさかりになりけり山のはごとにかゝる白くも
すみなるゝわか宿なれどけさみればおぼれくほとに花咲にけり
かけろふのもゆるはる日の山ざくらあるかなきかの風にかをれり
よし野山かすみの奥はしらねどもみゆる限りは櫻なりけり
えだにのみこもるを何にうらみけんかすみはてたる山ざくら哉
雨雲のなごりかすめる大空の日かげも花にさかり也けり
峯麓さきみちぬらしけさみれば花のかたへのみ山木もなし

○惜花 花をしむ

○花に物思ふ ○あたらしほひ ○あかぬ匂ひ ○匂ひあかぬに ○ちらて匂はゞ ○ちりなみだれそ
○ちらまくもなし ○うつろふ ○うつりゆく ○なごうつりゆく ○うしろめたし ○たをりかれたる
○ならまくをしき ○しなれなゆきそ ○あたらしく ○身にかへて ○あかなくに ○ものおもはする

家持 興之 貫成 俊信 公衛 眞淵 知紀 景樹 氏綏 季覺

○かれて思ひし ○をしむこころ ○こころおく ○心ゆるさぬ ○心づくし ○風しなからば
○風もこころせよ ○風にまかせ

春雨はいたくなふりを櫻花いまだみなくにちらまくをしも
一年にふたゝひさかぬ花なればうべちることを人はいゝけり
さくら花あかぬあまりに思ふ哉ちらすは人やをしまざらまし
みな人のわがものかほにおしむ哉花こそぬしは定のざりけれ
なかくゝにをしむ人なきみ山べの花をば風もさそはざりけり
花さそふ風は吹とも九重の外にはしばしちらさずもがな
山櫻うつるもさそなふけゆけば月も梢にとまらざりけり
心なき雲にもとよりまがひきて惜むをしらぬ山櫻かな
あだなりとゝがめまほしき花などをしとてやまぬ心なるらん
くれやらでかすみにとまるかげみれば夕日も花をしむ也けり
限なく花の別のをしきかな心をかせのさそふ也けり
たらちねの親のいさめもなかりけり花に日敷をうつすばかりは

○落花 ちるはな

○花ちりて ○花さそふ ○花のふゞき ○花のゆくへ ○ちる花ごきに ○ちりかふ花
○さくらちる夜 ○岩根の櫻ちる ○ちるさみて ○ちるまただにも ○ちるおうへに ○ちるまゝに
○ちるはかぎりの ○ちるをならひ ○ちりぬべき ○ちりがた ○かつちる ○つひにちる

元方 堀川右大臣 右大臣 元性 謙徳公 基政 長流 長繼 景樹 竹翁 有功卿

○なべてちる ○こさしのみちる ○苦路にちる ○昔の上にちる ○昔をうづみて ○ふよきちる
 ○雲ならてふる雪 ○袖寒からぬ雪 ○ふもこの雪 ○雪のしからみ絶る ○うつろふ
 ○さそひもほてず ○さそはるゝ ○をしむにさそふ ○乱て落る ○いろきえて ○香さへさまらぬ
 ○香をだにのこせ ○楡むなし ○木の本毎に ○てふにまがひて ○風はやみ ○風にぞくもる
 ○風あまざる ○山風つらく ○吹あぐる風 ○あらしのこが ○あらしのつて ○吹ためて
 ○月もくもりて ○あり明づく夜 ○中ぞら ○あだなる人 ○をしまぬ人もあらし
 ○われもちりなん ○あくがるゝ心もちる ○心づから ○心ぞらなる ○心にまかせぬ
 ○心もつらく ○心をくだく ○ちよにくだく ○ちよにくだくる心 ○しづ心なく
 ○物をこそおもへ ○ふめばなし ○春のかたみ ○大かたは ○おしなべて ○いづれさもなく
 ○のこりなく ○はかなくも ○あやなく ○あやなく春の ○あかなくに ○ありはてぬ
 ○あだになる ○いかゞはすべき ○名残もつきて ○たのみかたさよ ○こめまほしき ○こむべき物さばなし
 ○さりあへぬ物は ○未つひに ○かくてもこそ ○しひて戀しき ○目のまへにても ○こさならは

宿にあるさくらの花は今もかく松風はやくつちにおつらん
 厚見王
 友則
 久かたの光のどけきはるの日にしづこゝろなく花のちるらん
 友則
 ちりぬべき花のかざりはおしなべていづれともなくをしき春哉
 よみ人
 今よりは風にまかせんさくら花ちる木のもとに春とまりけり
 同
 浅ちはらぬしなき宿のさくら花心やすくや風にちるらん
 同
 水のおもにちりつむ花をみるぞはじめて風はうれしかりける
 成
 あかなくに袖につゝめばちる花のうれしと思ふになりぬべきかな
 實
 國

みよし野の高根のさくらちりにけりあらしも白き春の曙
 西行
 ながむとて花にもいたくなれぬればちるわかれこそくるしかりけれ
 眞淵
 すがのねのながきはる日に袖たれてみんと思ひし花ちりにけり
 定信
 とぶ鳥の羽風もいとふ花の枝にあまりつれなく吹嵐かな
 景樹
 梢ふく風も夕はのどかにてかぞふるばかりちるさくらかな
 春庭
 風寒みおほふ霞の袖ながら空にみだれてちるさくらかな
 春夫
 くまがしのふるはかさなるうへとひて同じゆくへとちるさくらかな
 久風
 木がくれてさきもぞすらし山まつひやくまに 櫻ちるなり
 春鹿
 まれくちるはをしげもなかりけり時ならでふる花のしら雪
 伴道
 大井川かすみのまよりふる雪はあらしの山のさくらなりけり
 直好
 さくら花ちりのまがひにくれにけりこよひはいかに夢もまどはん
 勝繼
 花はみなむなしくなりてよし野山まがひし雲にはる風ぞふく
 同
 而白き朧月夜の月かげにあこがれてちる花にやあるらん
 有功
 今よりの春の心や安からん花はあらしにまかせはてよき
 同

○遅日

ながき日
 春の日の長閑に長くて暮かぬるをいふ
 同
 ○春の日はながき ○ながき春日 ○うらくくこてれる春日 ○匂ふ日かけ ○行やらぬ日かけ
 ○行とみえぬ日影 ○なかくし日 ○ながき日おけ ○霞の底に出る日 ○雲のいづこを渡る日

- まごの日かげ ○冬のいく日 ○日ぐらし ○天の戸 ○なきたる空 ○のどかたる空
- 春のそら ○光のどけく ○くれがたき光り ○さもくれがたき ○くらしわぶる ○くらしかねる
- 夕ぐれかれて ○けさをわする ○夜を隔てたる心ち ○いさまある ○ひるれ
- 山鳥の尾の長き ○いさゆふの長き ○すがのれの長き ○芹のえくつる ○花まつま ○さくらにくらす
- 鶯の百さへつり ○たつのもろ聲 ○しらぬかすみに ○匂ひのどけき ○つれづれ ○ながむる

ひとりのみながむる宿の春の日はさも暮がたき物にぞ有ける
 をのゝえもかくてや人のくたしけん山路おぼゆる春の空哉
 わが心はるの山べにあくがれてながし日をけふもくらしつ
 鶯のもゝさへづりをいくかへりながき春日に鳴くらすらむ
 山のはにやゝ入ぬべき春の日の心ながきもかぎりこそあれ
 浪まより夕日かゝれる高砂の松の上葉はかすまざりけり
 すがの根のながみの濱の春の日にむれたつたづの也たにみえけり
 大空の同じ所にかすみつゝもくとみえぬはるの日のかけ
 つたへきく遠山本のほらの内もかくこそあるらしけふの日ながさ
 鶯の聲うらゝにも引なれてはるは日ながくなりけるかな
 さくらがりわけしけふを長しとも夕ぐれまではおほえざりけり
 わすれてはけさをきのふとたどるこそ日長き春のならひ也けれ
 入日さす後もしばしは鶯のねぐらゐそがぬ聲もするかな

高遠 兼宗 貫之 顯昭 土御門院 建保御製 眞淵 景樹 同 廣海 俊武 春海 氏綏

遊絲

いとゆふ

麗かなる日に物の影の如く空に光りちらめく氣をいふ也または遊ぶいとゝも云り

- もゆるかげるふ ○春のいとゆふ ○ぶあそ糸ゆふ ○あそぶいと ○乱るゝ糸ゆふ ○乱てあそぶ
- 打くだれたる ○みだる ○野べにみだるゝあそぶ ○のどかにあそぶ ○霞にかゝる
- 打はへ ○日かげにはへて ○くりかへし ○いつくるべくも ○くるさもみえぬ ○かぎりもしらす
- ゆくかたしらぬ ○ゆくへなき ○かたも定めず ○はてしなく ○いく千ひる ○ほのめく
- あるかなきか ○うす紅 ○定かにそれさ ○いさものどかに ○かげもうらゝに ○うらくこ
- 霞のひまに ○霞の衣 ○風絶て霞む ○風なき空 ○のどかなみ空 ○なきたる空
- くもらぬ空 ○みどりの空 ○み空 ○天つ空 ○大空 ○中空
- 春のみ空 ○空をのどめて ○くもり日はみえぬ ○春の日の匂ひ ○ふかき春日に
- 春の光り ○夕日の空 ○くるゝ空なき ○さもくれかたき ○さしのをなく ○ふかき春日に

つれづれと春日にまがふかげろふのかげみしよりぞ人は戀しき
 くりかへし春のいとゆふ年をへておなじみどりの空にみもらん
 のどかなる夕日の空をながむればうすくれなるに染るいとゆふ
 いとゆふのかすめる空にあそぶ日は人さへ野べにみだれてぞゆく
 春の日の也た野の原にあそぶいとのいつくるべくもみえぬ空哉
 みな人のうかるゝ春の心こそ雲ゐにあそぶいとゝなるらめ
 みな人の春の野原にあくがるゝ心もとけてあそぶいとかな
 空にのみあくがればてゝかげろふのありともなしにくらす春哉

よみ人 しみら 定家 契冲 廣足 景樹 同

○春興

柳をかづらき梅をかざし櫻をめて鳥のさへづりをきよ或は野山に遊びなど何にま
れ興ある春のあそびをいふ

- おもふごち ○心たひらに ○心なぐさ ○心ひろらに ○心もおかず ○心うらゝに
- 心ものごむ ○心の空になる ○心をのべに ○心のあかぬ ○あかぬ心 ○はるの心
- たのしくもわゝか ○春にたのしき ○えならず ○いひしらず ○いはむかたなく
- いつかはかゝる ○老もわする ○かざしの梅 ○梅のほつえ ○梅柳かたみにゑむ
- 柳も打ふむ ○柳つまくる ○柳のかづら ○柳かげに ○青柳のくだれ ○花のもしこ
- 花より外に ○花をかづらく ○花にあかぬ ○花にをかるゝ ○花にたはるゝ ○花のまごぬ
- 花みてくらす ○盃にちりこむ ○なしの花さく ○園のからなし ○藤のしなび ○たるゝ藤なみ
- 草木もめぐむ ○すくれさゝ野 ○董つみつゝ ○つばなぬく ○なの花匂ふ ○浅ちばら
- 鶯にまじる ○鶯のやど ○ひばり鳴野 ○ひばりの床に ○きよすなく ○雪ものごけし
- 霞む白雪 ○霞のくま ○霞なくむ ○かすむる朝日 ○かすむ末野 ○野をなつかしみ
- 遠山眉もひらく ○はるの日のながさ ○ながくし日も ○くるゝもよしや ○空うらゝけく
- ゆたげなる ○のどけしな ○はるにあふ ○千年のはる

萬 同 古 後

青柳梅との花を折かざしのみての後はちりめともよし 満 誓
 梅の花手折かざしてあそべどもあきたらぬ日はけふにし有けり 清 磨 呂
 青柳のいとよりかくる春しもぞ亂て花のほころびにける 貫 之
 あたら夜の月と花とを同じくは心しられん人にみせばや 信 明

拾 後拾

世のなかにうれしき物はおもふどち花みてくらす心なりけり 兼 盛
 行とまる所ぞはるはなかりける花に心のあかぬかざりは 爲 定
 すがのねの長き春日になりぬれば心すさびぞいとなかりける 眞 淵
 大の川月と花との朧夜にひとりかすまぬ波のおとかな 蘆 庵
 春山の木立のし々にさく花をたをりかざして此日くらしつ 宣 長
 このまより月のさしたる盃に花のかけをもうけてける哉 景 樹
 大かたの人はかへりてあらし山月と花とになりけるかな 廣 海
 玉しまや此川上の花ざかり少女が袖とみえわたるかな 有 功 卿

○野遊 のべのあそび

- 思ふどち野に出て董つみつ花ぬき家をもわすれ日をくらしあそぶをいふ
- 野べのあそび ○野べにくらす ○野べなつかしく ○野をなつかしみ ○野なる草木 ○野べの鶯
 - 心ものべに ○なれぬる野べ ○春の野にまじる ○すみれさく野 ○のどかなるかた野
 - 末野のばな ○おもふごち ○都人 ○大宮人も ○打むれて ○いざなひつれて
 - 袖をつられて ○つみはやす ○春菜つみつゝ ○わかなつむ ○をばぎつむ ○すみれつむ
 - つばなぬく ○わか草のもゆる ○若草のつまも ○草のむしろ ○浅ちばら ○浅ちかうへに
 - 花しちらすば ○花のかけ ○花のもしに ○花のやど ○花の宿る ○花のまごぬ
 - まごぬする ○たゝまくをしき ○ゆきかへり ○ゆきくるゝ ○かへさわするゝ ○家ぢわするゝ
 - 永き日ぐらし ○ながくし日を ○あくがるゝ ○心のあくがるゝ ○心ひく ○心もはるゝ
 - 心やらんこ ○思ふがごさく ○ゆくらかに ○めもはるに ○めもはるゝに ○のどけき

○いさものさけし○うらくこ
○そこともいはず○なにさなく
○ひばりの床

よみ人
しらず

萬 同 古 同 後 新 六

春日野の淺ぢがうへにおもふどちあそべるけふはわすらえなくに
おもしろき野をばなやきを古草に新草まじり生はおふるがに
春日野はけふはなやきを若草のつまもこもれり我もこもれり
いつまでか野べに心のあくがれん花しちらすば千代もへぬべし
はるくれば花みむと思ふ心こそ野べの霞とよもに立けれ
おもふどちそこともしらす行くれぬ花の宿かせ野べのうぐひす
あだにのみ野べの花みにわがこしがながくし日をくらしつるかな
道すがら草の若葉になづさひてきも心ゆくはるの野べかな
おのづから花に心のうち合てちぎらぬ友のむれし野べ哉
かすみたつ春の日の岡越もきて岩田の小野にけふもあそばん
さと中のかきねまでをぞすさびける野べのあそびにくらしあまりて
こよもをしかしこも也かし行とまり思ひさためぬはるの野べかな
かげろふのもゆるはる日にをとめらが心つくしを何につむらん

○三月三日

曲水宴

三月三日に曲水宴をいふ事あるはもろこしよりおこれる事なり桃のさかりなるこ

廣成同景園宣
海章樹長
家隆香性

ろにやり水を流してその汀にならび居て上より盃をうかべ次第にこれをとりに興
をいひ桃花のたへなるよしを詩につくるなりとぞ

○上の己の日 ○三日月 ○彌生のみかは水○彌重のけふ ○けふのほぎこと○もよの盃
○石まゆく盃 ○流てくだる盃 ○よごむ盃 ○あふむのつき ○かすみにあふ ○流にうかぶ
○おそくさくめぐる ○なかれなくむ ○けふのながれ ○舟をうかふ ○から人のためし
○仙人 ○夜半の燈 ○そのかみの春 ○むかし春 ○いにしへの春 ○夕日かげのこる
○はよこつむ ○山かげ ○たぬしき ○いさら小川 ○やり水

萬 拾 六 月 同

から人の舟をうかべてあそぶてふけふぞわかせこ花かづらせよ
三千年になるてふもよの今年より花さく春にあひにける哉
君がためわがをる花は春とほく千年を三たび有つよぞさく
盃をあまの川にもながせばや空さへけふは花に酔らむ
盃をとるとはみせてたぶさにはながるよ花をせきぞとむむる
ながれくる色にさほひて言のはも心にうかぶ花のさかづき
花かづらかげのたれかの長き日もあそぶにあかぬ桃の下陰
水上はもよやさくらんさかづきにうけたる花もめぐりにけり
ことのはを思ひうかぶるほどもなくながれきにけりもよのさかづき
花もけふいはいとものや思ふらん流も忍ひにめぐるさかづき
三日月の光さすまでゆく水に花のさかづきうけてあそはん

家持
躬恒
頼四
澄憲
宣長
春門
成忠
千楯
景樹
信美

おもひよる浪の心にまかせつゝめぐるまちけりもゝのさかづき
 太訓

○桃花 もゝのはな

多くは三月三日のことにかよはせてよめり

- もゝさく
- もゝの花園
- もゝのこびある
- さけるもゝ
- 岸へのもゝ
- 山ばたのもゝ
- わきべのけもゝ
- 空さへ花にふ
- もゝたびちたび
- もゝさくころ
- もゝぞのゝ花の昔
- もゝのしづく
- くもぬのもゝ
- むぎふのもゝ
- 八重さくもゝ
- ひめもゝの花
- 紅にほふ
- 千年をちぎる
- もゝの花さく
- もゝのしき
- 九重のうてなの
- なつべのもゝ
- かきれのもゝ
- からもゝの花
- 物いはぬ花
- あかね木かけ
- 三千年
- もゝの花さけり
- もゝのむまひ
- もゝの一村
- そのふのもゝ
- かきれのもゝ
- すもゝ
- 行水に移ふ花
- もゝのよここ
- もゝよるこび
- もゝのさかり
- もゝをうかべて
- もゝみにつれば
- 行水にかけみるもゝ
- 下てるもゝ
- 下てる山のもゝ
- 青すもゝ
- 花も打なむ
- もゝちたび

名所

桃園(山城) くらま山(同) 天の川(河内)

萬 是しきやしわすべのけもゝ本しげみ花のみさきてならさらめやも
 同 春の園くれなる匂ふもゝの花下てる道にいでたてるかも
 拾 咲し時猶こそみしかもゝの花ちればをしくもおもひなりぬる
 後拾 ふる里の花のものいふ世なりせばいかに昔のことをとほまし
 同 三千代へてなりけるものをなどてかはもゝとしもはたな付そめけん
 代 君が代のかざしにをらん三千年のはじめにさけるもゝの初はな
 よみ人 しまらず
 鳥羽辨 花山院
 細川

しづのをが園生のもゝの花ざかりやぶしもわかぬはるの色かな
 には鳥のかきねにあさる聲きかばもゝさく空も晝すぎにけり
 もゝの花垣根つゝきに咲ぬらしうすくれなるにかすむ山本
 大君のめぐみもたけきむぎ畑に花ももゝ世と色はえにけり
 ものいはぬ花としゝれど木の本を心ありげに人ぞとひくる
 かくながらもゝ代のはるもすぐさまし下てるはなの色しあせずは

眞淵 敏則 大平 春日 春海 永章

○堇菜 すみれ つぼすみれ

すみれは若菜の様に摘む草にて紫に花のさくものなり多く住所のことにかねてよめり

- みすれ草
- 小野のすみれ
- ひさりすみれ
- 紫の根はふ横野
- ゆかりの色
- しめさすばかり
- もろ人のつむ
- みるにつけてぞ
- 家路にかへる
- 草葉わけつゝ
- すみれつむ
- 垣根のすみれ
- 妹さすみれ
- 色もむつまし
- ゆるしの色
- つみはやす
- ま袖につまむ
- 一夜れしなごり
- 露ながら
- 下草まどり
- すみれさく野
- 庭のすみれ
- こむらさき
- 色こき野べ
- ゆりしの色
- つみはやす
- ま袖につまむ
- 一夜ぬる
- 朝露にぬれて
- つばなまどり
- 花すみれ
- 庭のすみれ
- こむらさき
- いろはえて
- 庭もせにさく
- つみにくる人
- 道のゆくてに
- 宵れて
- こけのむしろ
- 匂ふすみれ
- こむらさき
- 新むらさき
- 妹がゆかり
- 松かけにさく
- つむべき程になる
- 袖たれて
- よもぎふ
- ちぶのすみれ
- 心すみれ
- 薄むらさき
- 草のゆかり
- まだはつかなる
- もすそひく
- かへされするゝ
- 草のはつか
- 芝生

名所

(遠江) 浅野(淡路)

紫野(山城)

伏見野(同)

日の岡(同)

布留野(大和)

志賀の都(近江)

引馬野

はるの野のすみれつみにと来しわれぞ野をなつかしき一夜ねにける
 つばさぬく浅ちが原のつばすみれ今さかりなりわかこふらくは
 山吹のさきたる野へのつばすみれ此春雨にさかりなりけり
 わが宿にすみれの花の多かれば来やどる人やあるとまつ哉
 こよひねてつみてかへらんすみれさく小野の芝生に露しげくとも
 きいすなく岩田の小野のつばすみれしめさすばかりなりにける哉
 石上ふりにし人をたづぬればあれたる宿にすみれつみけり
 野へにおふるうす紫のつばすみれたれ紫の色に染けむ
 浅ちふはむらさきふかくなりけりいざや少女子壟つまなむ
 春の野の芽原のすみれつみ暮ぬひばりの床や一夜からまし

赤 人
 田村大嬢
 高田女主
 よみ人
 国 信
 顯 季
 能 因
 季 成 女
 師 頼
 契 冲

ふるさとの野へみくればむかしわが妹とすみれの花咲にけり
 朝戸出の庭の芝生にきのふまでしらぬすみれの花咲にけり
 つばすみれ手毎にをりてはるの野の色をも袖のものとなしけり
 霜がれの萩のやけふのつばすみれまばらに花の野と成にけり
 つめとてやさいすしはなく瀧の上の浅野のすみれ今盛なり

眞 淵
 宣 長
 春 門
 天 季
 景 樹

○春田

苗代

はるの田 なはしろ

あらを田のさま又は田をすきかへすをも苗代をも詠べし

- 苗代水 ○苗代垣 ○なはしろ小田 ○なはしろのころ ○しづがなはしろ ○まつる苗代
- 田面ゆたけく ○田づらの澤 ○田中の道 ○門田 ○かきつ田 ○あら小田
- そさも小田 ○野澤の小田 ○川そひ小田 ○いほしろ小田 ○小田のあせ道 ○山田もる
- 山田のくる ○春の小山田 ○かすむ山田 ○蛙なく山田 ○あぜづたひ ○あぜの細道
- うつ ○賤がうつ ○うちかへす ○すきかへす ○あらすきかへす ○おりたつ
- 種まきわくる ○種をかす ○種おろす ○たな井の種 ○みさしろ種 ○むろの種
- いはふゆだれ ○ゆだれまく ○青みわたる ○青みつく ○神にいのりて ○みなくちの神
- みわすゑてまつる ○みしめひく ○しめはへて ○引しめなほ ○いぐしたつる ○御代のめぐみ
- 恩にしるき ○ますらを ○ゆたかなる民 ○いさなみあへる ○いさまなき ○みのしろ衣
- 身こそほつれ ○人にまかせて ○心にまかす ○ふみわくる ○草かりいる ○おそくさく
- 水のみな上 ○水の心も ○水の中よご ○水のたより ○水は心にまかす ○水せきあまる
- 水ゆたかなる ○水こゆる ○水口まつる ○水草おひにけり ○水かさます ○あをこす水



- せきいるゝ水 ○せきいれし水 ○かけひの水 ○雪げの水 ○岩まの水 ○岩もる水
- 引わくる水 ○引すてしわすれ水 ○み草ゆる板井の水○にごり行水 ○にごりもやまぬ
- 雪ごけの雫 ○山のしづく ○岩間の雫 ○細谷川 ○いさゝ小川 ○山川をまかす
- 春の川水 ○入江せく ○雨にうるふ ○小雨ふる ○かきれつゞき

名所 鳥羽田(山城) 井出の山田(同) 伏見の小田 竹田(同) 布留の早田(大)

(和) 住吉の岸田(攝津)

あし引の山田つくる子ひですともしめだにはへよもるとしるかね
 こと出しはたがことにあるか小山田の苗代水の中淀にして
 はるくればまづぞうちみる石上めづらしげなき山田なれども
 鴨のゐる野澤の小田を打かへし種まきてけりしめはへてみゆ
 よそにきく苗代水にあはれわかおりたつ名をもながしつる哉
 山里の外もの小田の苗代に岩もる水をせかぬ日ぞなき
 あらを田の去年の古根のふるよもぎ今は春べとひゝばえにけり
 苗代の水ばかりを山がつの春は心にまかせたるらむ
 なはしろにせきやとむらんかきねなるいさゝ小川の音よわるなり
 うづらふすあら田の小田を打かへし雪けの水をまかせつるかな
 きのふまでかへす山田とくしほどに雪けの水はかけすみてけり
 それとなき堤の柳打けぶり苗代水に入日さすなり

保 眞 久 景 同 御 正 芳
 敬 淵 胤 樹 杖 根 樹
 よみ人 紀 耶 女 忠 見 兼 房 隆 賢 好 忠 三 河 内 侍 忠 度 匡 房 權 子 内 親 王 實 隆

○蛙

かはづ

なはしろの水のにごりになくかはづかすみをもるゝ聲ま遠也
 なはしろの水口まつりしめはへて賤がわさとそむかしおぼゆれ
 浅ぢはらつばなぬく子が袖ぬれぬ苗代水やみぞにあぶれし
 小山田のなはしろ水は底すみて引しめなみのかげもみえつゝ
 小山田のなはしろ水にふる雨の敷はしげくもみえにけるかな
 おもふにやまかせすぎけん小山田のなはしろ水ぞあせこゆるなる
 あせこゆるなはしろ水は君が代の惠の露のあまるなりけり
 秋風を稲葉の末のちぎりにてねざめの種もけふおろす也

保 眞 久 景 同 御 正 芳
 敬 淵 胤 樹 杖 根 樹

古くかはづといへるは春より秋かけて鳴く河蝦をよめれど中昔より多くかへるを詠
 る事となれば今も通はしてよむべきにや

- かはづなく ○なくかはづ ○なけるかはづ ○さわぐかはづ ○夕かはづ ○ほり江のかはづ
- 澤田のかはづ ○野澤のかはづ ○古田のかはづ ○古井のかはづ ○板井のかはづ ○底のかはづ
- 汀のかはづ ○なく ○なける ○よこももになく ○月になく ○花になく
- 山ぶきの花に鳴 ○聲すだく ○聲さやげし ○聲さびにけり ○聲老にけり ○聲ひやく
- 聲もひまなく ○聲うちそへて ○聲あはれなる ○聲ぞながるゝ ○ころび聲 ○よるなく聲
- 夜聲かしまし ○すだく ○すだきよる ○すだきよる瀬 ○さわぐ ○さわきぞわたる
- きはふ ○つまよぶ ○水海のなざさ ○谷川 ○河をさやけみ ○かすむ川戸

○こぞの軒ば ○あしたれかくる軒○軒のすだれに○玉だれのなす ○ふるさこ ○ごく世より
○かよひぢ ○かへる野中 ○雲ぬより ○風にふかるゝ ○二月のなけば ○鷹かへる時
○春日うらゝに ○いさゆふ ○柳がえだ

つばめくる時になりぬとかりがねは國おもひつゝ雲がくれなく
此はるもふるすたづねて山がつの宿をわすれぬつばくらめかな
玉だれのへだてやおもふあかすのみこゝになれきてかたるつばめは
山なしの花のちりくるこの本を翹かろげにとぶつばさかな
かたらはん友にもあらぬつばくらめ馴てきたるは嬉しかりけり
けさみればいつか來にけむわが門のなはしろ小田につばめとぶなり
たをやめが袂かろげに立まひすがたおぼゆるつばくらめ哉
かけてだにちぎりもおかぬ山かつの軒になれくるつばくらめ哉
風かよふ門の柳のいとまなく聲もみだれてとぶつばめかな
玉すだれうごかす風にさそはれて軒ばになるゝつばくらめかな

家 持 頓 阿 三 光 院 尊 孫 景 樹 同 雅 嘉 春 夫 好 古 光 彪

○躑躅 つゞじ

つゞじは今もいふつゞじにて長たかきをいふ岩つゞじは今のさつまきりしまの類な
り白つゞじとは俗に云ふもちつゞじなり然れどもいづれのをもつゞじとひろくよむ
べし

○花つゞじ ○初花つゞじ ○うす花つゞじ ○匂ふつゞじ ○おくてのつゞじ ○白つゞじ

○ひめつゞじ ○さにつゞじ ○もちつゞじ ○きりしまつゞじ ○さ月のつゞじ ○なつゞじの花
○たなるつゞじ ○岡つゞじ ○峰のつゞじ ○谷まのつゞじ ○野べのつゞじ ○岩つゞじ
○岩もさつゞじ ○岩がれつゞじ ○松の下つゞじ ○下つゞじ ○つゞじさく ○つゞじ原
○つゞじが岡 ○つゞじ花匂へる妹 ○つゞじみ ○ふよめる ○匂ふさかり ○匂ひえならぬ
○花もよほす ○花の夕ばえ ○花の入しほ ○花匂ふ ○わが枝 ○わかえに花のさく勝
○ささまどる ○道もせにさく ○岩根にさける ○岩根に根さす ○あかもの色 ○こぞめの花
○いろばえて ○色こがる ○色にこがるゝ ○千入のいる ○紅くゝる水 ○夕くれなぬ
○おもひの色 ○おもひをなく ○こきくれなぬ深き ○松の下てる ○かすみのいろ
○紅のふり出て染る ○からにしき ○山下てらす ○松の下てる ○かすみのいろ
○かみすなもるゝ ○かすかにみゆる ○春雨にしなるゝ ○野づかさ ○かざす ○なればやす
○なりやつす ○なりもてかへる ○つまぎにさせる ○つま木にもるゝ ○いもが衣手 ○妹が袖おほゆる
○わけ行袖 ○まくり手にして ○夕日かけ ○夕日さす岡へ ○夕付口さすや岡へ ○さける野づら
○入日さす外山 ○かすむ外山 ○山かけ ○山のさかけ ○すそ野 ○なづさはれぬる ○さにつらふ
○谷川の水 ○すまの下道 ○松かけ ○木の下かけ ○なづさはれぬる ○さにつらふ

名所 常盤山(山城) 双の岡(同) 岩田の小野(同) 初瀬川(大和) 吉野川(同)
玉田横野(同) 盤手山(陸奥)

萬 山こえて遠津の濱の岩つゞじわがくるまでにふよみてありまて
同 たくひれの鷺坂山のしらつゞじわれに匂はね妹にしめさむ
後拾 わぎも子が紅ぞめのいろとみてなづさはれぬる岩つゞじかな
金 入日さす夕ぐれなるの色はえて山下てらす岩つゞじかな

よみ人 しらす 義 孝 三 河

何事をしのぶの岡の岩つゝじいはで思ひの色にいつらむ
種しあればおひにけらしな岩つゝじ花さく春にあはむとやみし
咲ぬればちることかたき岩つゝじ名にはたがはぬ色にぞ有ける
くれなるのうす花さくら散しまてつゝじぞ春の千入なりける
遠かたのこやしきみねの岩かどに夕日をのせてつゝじにほへり
みよし野は青葉にかはる岩かげに山下てらしつゝじ花さく
光みぬ松のかみみの下つゝじをぐらきかげをてらしがほなる
旅人のいをる山べにたく火かと木がくれみえてさくつゝじ哉
かりのこすかた山岨の丹つゝじは又この春もたが爲にさく
岡のべの松をかぎりに花つゝじ下てる色の匂ふはる哉

頼 恒 能 宣 章 永 秋 成 春 夫 廣 海 廣 海 麟

○馬酔木 あしび

あしびは木瓜の花なるべし野山につゝじと等しく赤くさく物にて三月ごろに花さか
りなり

- あしび花さく ○おふるあしび ○花匂ふ ○にほふ ○咲匂ふ ○さく
- 青山にさける ○ふよむ ○今さかりなり ○ちる ○ちらまくをしき ○うつろふ
- くれなぬ ○下てる ○赤くてる ○いろはえて ○池水にてるまで ○池水にかけみる
- おく山 ○たきのうへ ○磯のうへ ○磯かけ ○磯山かけ ○たをる
- 袖にこき入む ○にくからぬ ○えならぬ

磯の上におふるあしびを手をらめどみすべき君か有といはなくに
わがせこにわがこふらくは奥山にあしびの花の今さかりなり
わがのれる駒もこそはめあしびさく横野の道やよきてゆかまし
心なき駒のあしびよさらでだになづむ岩木の山に咲らむ

大久米皇女 伊香眞人 厚生 通 曉

○梨花 なしの花

萬葉集中に花をよみたる例なしといへども近古より春の花をよみたればこゝに出せ
り

- なしの木 ○なしの花さく ○うらなし ○山なし ○山なしの花 ○つまなしの花
 - 軒のつまなし ○しらなし ○花のよまひ ○匂ふ ○ふよむ ○さく ○さきちる
 - うつろふ ○木のもこに ○かた枝さす ○なりもならずも ○しろたへ ○雪にまがふ
 - 雪ににる色 ○雲のおもかけ ○さふるまで ○朝ぐもり ○夕ぐもり ○山ばた
 - かた山そばの ○山がつの伏屋に近き ○むぐらがつ ○さふ人もなき ○みれどもあかね
- 新 六 世のなかをうしといひてもいづこにか身をばかくさん山なしの花
つばくらめつがひ飛かふしづが屋の軒にさけるつまなしの花
雲とみしさくらの後に咲出て雪はづかしきやまなしのはな
しらなみの梢おほふとみるばかり学生のうらなし白咲にけり
白露に袖はぬるとも一枝は折てもみはややまなしのはな
- 頼 俊 景 保 依 大
頼 俊 樹 巳 平 平

まがふべき梢もなしの一さかりさくらの後をわかばんにして

松

○牡丹

ふかみぐさ

はつか草とは牡丹の異名にあらず白居易が詩によりていふ事なりされば好みよむべからず

- はつかぐさ ○いろふかみぐさ ○もろこしの花のおほまみ ○露の花ぶさ ○人の花になる
- さく ○咲しより ○露にさく ○まがきにさく ○ほころぶ ○ふむむ
- 匂ふ ○匂ひみちたる ○みぎりに匂ふ ○かきれに匂ふ ○いひしらぬ色 ○紅にほふ
- 紅のこそめ ○こきくれないぬ ○ぬれ色まさる ○國がたぶけし色 ○あかね色 ○ちりはつるまで
- はつかにうつる日 ○露ふかく ○小鱗もむつる ○行春のかたみ ○えならぬ ○たさしへなき

咲しよりちりはつるまで見し程に花のもとにてはつかへにけり

草 詞

さく花の露も心もふかみ草たなほざりの色とやはみる
 みせばやなのどけき春の日のもとにうつりて後の色ふかみ草
 大きみの名をしもおへる花みればうべも世にぬ色香なりけり
 月雪のきよき心をひと花の匂ひにこむるふかぐさかな
 ふかみ草さける日ごろをかぞふれば春もはつかに成にける哉
 庭にはふむぐらの露もてるばかり色深み草花さきにけり
 大かたの花をすぐしてこの頃の春ふかみ草さかりなりけり
 はらへども猶世のちりのふかみ草人にみすべき物ならなくに

太政大臣 正 徹 景 樹 春 海 廣 海 久 胤 太 訓 紀 賢 有 功 卿

草の戸にうゑてみるくやさしきは富てふ花の名にこそ有けれ
 かたぶかぬ月日を花にふくみつゝ深み草さへ匂ひあひにけり

同 同

○牡若

かきつばた

むらさきの色をめて衣にすりつくなども垣にとりなしてもよめり

- 岩がきつばた ○宿のかきつばた ○花にさく ○さき匂ふ ○にほふ川べ ○花のいろ
- むつまつき色 ○ゆかりの色 ○むらさきの色 ○こきむらさき ○ゆるしの色 ○色ゆるされて
- ふかきいろ ○いろにいつる ○ひさりいろある ○しめさして ○衣にする ○狩人の衣にする
- 袖のつまずり ○澤水 ○澤べに立る ○かすむ澤べ ○まこもかる澤 ○れぜりつむ澤
- 根ぜりつむ澤田 ○せりつみし澤べ ○こなきさく浅澤 ○浅澤をの ○浅澤沼 ○水沼
- 岩がき沼 ○かくれ沼 ○沼におふる ○こなきつむあがたの井戸 ○池水 ○池水
- 池の心にさく ○池のみぎは ○みぎは ○汀にたてる ○なぎさ ○影うつす
- 波のいろ ○波のあやおる ○さゝ波そむる ○水のみどり ○水ごもりに ○みごもりにさく
- 水がくれに ○みさびはらふ ○うきにおふる ○かつみきり ○芦のはまどり ○あやめにまつり
- あやめわく ○さぎのぬる ○石間 ○かげをへだてぬ ○へだつる ○昔へだつる
- 春のへだて ○春をへだて ○春をこめて ○ゆくはる

名所 廣澤(山城) 伏見の澤(同) 浅澤沼(攝津) 難波江(同) 狭山の池(河内) 浅香の沼(陸奥)

萬 住の江の浅澤小野のかきつばたきぬにすりつけきん日しらすも
 同 かきつばたきぬにすりつけますらをのきそひがりする月はきにけり

よみ人 しらす

から衣きつゝ馴にしつましあればはるくきぬる旅をしぞ思ふ
東路のかほよがぬまのかきつばた春をこめても咲にけるかな
君か宿わが宿わくるかきつばたうつろはん時みむ人もがな
こなぎつむあがたの宿のかきつばた花の色こそへだてざりけれ
こやの池のあやめにまじるかきつばた花も人にしられぬるかな
きぬにするかきつばたこそ咲にけれかをやが沼も春やゆくらむ
花のいろに波も匂ひて池水をむらごになせるかきつばたかな
めであかぬあとなしごとを行水にかすかきつばた花咲にけり
かきつばたかげみる池やむらさきの匂へる妹がかみなるらむ
かきつばたむらさき深くささしより池の心もうつろひにけり
思ひしにたがはざりけりかきつばたかやが軒ばをつばめとぶころ
池にすむをしの羽色もわかぬまで咲つらなれるかきつばた哉

業 顯 季 貫 成 後 鳥 羽 院 黄 中 春 海 嘉 言 千 蔭 景 樹 有 功 卿 同

○款冬 やまぶき

一重をも八重山吹をもよむべし萬葉には山振とよめるも少からず

- 山吹の青葉 ○露の山ぶき ○八重山吹 ○岩根の山ぶき ○きしの山吹 ○鶯のきなく山ぶき
- 妹に似る草 ○花の露 ○花のかみみ ○花のしがらみ ○花の八重がき ○花に神さす
- 花の中ゆく ○花のかけゆく井手 ○花のそよす浪 ○しづえの花 ○咲こぼれたる
- 咲たる野へ ○今やさくらん ○まがきに咲る ○川瀬にさける ○ひさへにさく ○八重にのみさく

- 八重よりもかされて ○うつろふ ○こもろうつろふ ○香さへなつかし ○にほふ
- こぼれて匂ふ ○かき根に匂ふ ○あかぬ匂ひ ○春雨に匂へる色 ○色ばえて ○朽葉の色
- えもいはぬいろ ○いはぬ色 ○こたへぬいろ ○枝かばす ○枝さしおほふ
- しづえ波こす ○涙も色なる ○波にをられぬ ○おもかげながく ○かげみゆる ○かげおほばゆき
- 底のかけさへ ○苗代水にかけみえて ○水底にうかべる ○人のかさし ○をりてかさす
- ぬれくをらん ○わくるま袖 ○風にみだるゝ ○露さよにもちる ○露よそほしき ○露のうはすり
- 露の夕ばえ ○露もかわわぬ ○露おもげなる ○おく露ながら ○風まつ露 ○しげみお露
- 瀧川の ○川ぐま ○川よぎ ○川ぞひみち ○川添のつみみ ○川邊あまたに
- 川瀬になびく ○いかさす川せ ○かすむ川ぞ ○水鳥のすだく川べ ○夕日かげかたぶく山
- 谷べにさける ○をしのぬる野澤 ○雨はるゝ澤べ ○あがたの井戸 ○田中の井戸 ○つみみのかげに
- 下ゆく水 ○彌生の庭 ○垣根ふるさぬ ○青柳の下けふ交り ○てふのつばさ ○かはづなく
- はるのかたみ ○春のなごり ○春をさめむ ○春深き色はなけれど ○こころへど
- ながめてぞふる ○来てもみよ ○たづねつゝ ○いはんかたなき ○いひしらず

名所 井出の玉川(山城) 大井川(同) 山吹の瀬(同) 三室の岸(同) 六田の淀

(同) 吉野川(同) 水無瀬川(攝津)

かはづなく神なび川に影みえて今やさくらん山吹のはな
よしの川きしの山ぶき吹風に底のかけさへうつろひにけり
都人きても折なむかはづなくあがたの井戸の山吹ぶきの花
しのびかね鳴てかはづのをしむともしらでうつろふ山吹の花
山吹の花の盛に井手にきて此さと人になりぬべきかな

厚 見 王 貫 之 公 平 母 惠 昭 慶

萬 戀しけばかたみにせむとわが宿にうるし藤なみ今さかりなり
 同 多枯の浦の底さへ匂ふ藤なみをかざして也かんみぬ人のため
 同 藤なみのかげなる海の底清みしづく石をも玉とぞ我みる
 古 わが宿にさける藤なみ立かへり過がてにのみ人のみるらむ
 後 わが宿のかげともたのむ藤の花立よりくとも浪にをらるな
 拾 紫の色しければ藤のはな松のみどりもうつろひにけり
 後拾 ぶちの花をりてかざせばこむらさきわがもとひの色やそふらん
 金 ぬるゝさへうれしかりけりはる雨に色ます藤のしづくと思へば
 同 あしがきの外とはみれど藤の花匂ひはわれをへだてざりけり
 同 年ふれどかはらぬ松をたのみてやかゝりそめけん池の藤なみ
 新 まとひしてみれどもあかぬ藤の花たゝまくをしきけふにも有かな
 勅 よしの川たぎつ岩根の藤の花たをりて也かん浪はかくとも
 池水に汀の藤の末ひちてうつろふかけもなびきあひにけり
 花さきてみどりまばらになりにけり松も藤にはまけてける哉
 水底にうつろふかけのむらさきは一入まさる藤のいろかな

赤人 堀麻呂 家持 野恒 よみ人 同 爲善 顯仲 大炊御門 天曆御製 龜前 千座 内直 保敬

年ふりて老木の松も藤なみのわかむらさきにかへる春かな
 ほとゝぎすまつるこゑせぬ夕暮をうらむらさきの花咲にけり
 藤なみの花さくみれば打なびくはるゝ末ばに成にける哉
 わか宿の松より上の藤なみはかけはなれてぞみるべかりける
 池にさす松のはひえにむらさきの色なる花は咲初にけり
 山まつの風の上にかゝるらむ打なびくなり藤なみの花

大平 梁樹 景樹 同 久風 有功

○暮春 残春 惜春 はるのくれ のこりの春 はるををしむ

委しくいへば暮春は三月中旬より後をいひ残春は三月の末日数の少きを云ひ惜春は暮行はるを惜む心なり

- 春のわかれ ○春のさかひ ○春をしたふ ○春のさまり ○春のゆくへ ○春やゆくらむ
- 春も今ほの ○春のかざり ○春も夢にて ○春ぞすくなき ○春のなごり ○春はいづくに
- 春のふるさこ ○春のゆくて ○春の手向 ○春のかたみ ○春の日かず ○かへらぬ春
- 行春は雨にさわらぬ ○いぬる春 ○行春のならひ ○行春 ○すぐる春
- のころ春 ○こまらぬ春 ○よごまぬ春 ○こゝろ春 ○あぞも春の ○又こむ春
- くれゆくはる ○大かた春は ○さそはるゝ春 ○あやなくくるゝ ○くれなばなげの ○くれてゆく
- かへる雪路 ○彌生の空 ○彌生の末 ○彌生もなれば過ぎ ○夏ちかき ○今いく日
- そばる日敷 ○別をなげく ○したふ ○をしむ ○をしむなみだ ○をしめども
- なしさまされり ○なしむにこまらぬ ○あだら此頃 ○行かたしらぬ ○行かたざる
- こゝろえぬ ○こまらぬ物 ○あだら此頃 ○花をかたみ ○花のあこ

○花のふるさこ ○花にまがひし空 ○花ものこらぬ ○花ちる山 ○花ゆゑをしむ ○花はのこりて
 ○花より後の ○花は根にかへる ○花鳥のかへる ○花鳥のわかれ ○花鳥もまれなる ○鳥はふるすにかへる
 ○鶯も鳴て恨よ ○かはづなく ○かはづもたしむ ○霞のうち ○霞むそなた ○霞ばかりのこる
 ○霞もたえぬ ○霞の衣立わかれ ○くれぬまの ○あさなき空 ○有明の月 ○入日をまねく
 ○入相のかれ ○夕ぐれさびし ○夕ぐれなぬの空 ○つれなくも ○ほかなくも ○あかなくに
 ○あだになる ○むなしきかたに ○たがためさなく ○ふるさこ ○さびしき物の ○うさましき
 ○いかにせむ ○せむすべなし

古 花ちれる水のまに／＼とめくれば山には春もなくなりけり 源 養父
 後 またもこむ時ぞと思へどたのまれぬ我身にしあればをしき春哉 貫 之
 拾 花もみなちりぬる宿は行春のふるさとこそなりぬべらなれ 同
 後 さら花匂ふなごりに大かたの春さへをしくおもほゆるかな 能 宣
 金 花のみやくれぬる春のかたみとて青葉の下にちりのこるらん 盛 經母
 千 花は根に鳥はふるすにかへる也春のとまりをしる人ぞなき 崇 徳院
 同 入日さす松の葉さへぞうらめしきくれずは春のかへらましやは 久 我内
 新 くれてゆく春のみなとはしらねども霞におつるうちの柴ぶね 寂 蓮
 同 時しもあれたのむの鴈のわかれさへ花ちるころのみよし野の里 爲 親業
 月 行春は風にしられぬ山かげの花のもとにや立とまるなん 爲 親業
 同 あかなくにけふをしまばまたもみむ春をいとふになりぬべき哉 季 通直
 同 山のはをしてくれてかへる鴈がねに春のなごりもながめなりけり 政 直

花のくれちりてのゝちは春さへにのこる日なくもおもほゆる哉
 ちる花のわかれかなしき袖の露ぬらしそへてもくらすはるかな
 春もけふくれはてけりと思ふにも常の夕の心ちこそせり
 かぎりあればはるもとまらぬ大空に行へはみえてちるさくら哉
 すがのねのながしと思ひしなほざりに今はたおしむはるのくれ哉
 いたづらに春はながれて大る川井せきにだにもとまらざりけり
 かぎり有てくれゆく春も藤なみの打過がたきさかりをや思ふ

眞 元 景 同 千 廣 正
 雄 樹 蔭 海 鏡

○三月盡 はるのはて やよひのつごもり

暮春の題にては大かた春の暮がたをよむ事なるが此題にてはかなならず三月のつごもりの日をさしてよむべきなり

○春のわかれ ○春のこぢめ ○春のゆくへ ○春のをはり ○春のさまり ○春のかぎり
 ○けふゆく春 ○かへらぬ春 ○をしき春 ○さまらぬ春 ○いぬる春 ○一日のぼる
 ○わがる春 ○かぎりある春 ○よその春さや ○行春の立のいそぎ ○けふをし春の限り
 ○けふのみこ ○けふばかり ○けふの夕ぐれ ○けふはくらさむ ○けふにさちむ ○けふをわりなく
 ○つごもりがた ○やよひの空 ○夏にさなれる ○のこりなく ○こよひかぎり ○くれはつる
 ○あすさなき ○をしむかひなく ○をしさも増る ○さめえぬ ○さめむよしも ○引かへされぬ
 ○かへらぬ波 ○花のあこ ○花のかけにて ○ちる花のもこ ○かすむおもかけ ○霞の衣立わかれ
 ○鶯のまれなる聲 ○曉のかれ ○入相のかれ ○だそがれ時

古 けふのみとはるをおもはぬ時だにも立こと安きはなのかけかは 躬 恒

花しあらば何かははるのをしからんくるともけふはなげかさらし
をしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへなりにける哉
かへる春う月のいみにさしこめてしばしみあれの程までもみん
をしむとてこよひかきおくことはやあやなく春のかたみなるべき
命あらばまたもあひみむ春なれどしのびかたくてくらすけふ哉
のこりなくくれぬる春をしむとて心をさへもつくしつるかな
あすよりはしがの花園まれにだにたれかはとはんはるのふるさと
花もちり春もくれぬる山ざとは心さへこそとまらざりけれ
花だにもちらでわかるゝ春ならばけふをわりなくをしまざらまし
過にける春を惜めばあやにくにほどなくくゝけふの空かな
あまたゝびはるの別に馴ぬれどをしさは老もかはらざりけり
はるははやあすともまたでかた岡の青葉がくれと成にけるかな
きのふまで猶あすありとたのみしをそもかたぶきぬ春の日のかけ
はるもはや一夜のつまとなりにけりむろの泊にこぎやわかれむ
かくばかりなれこしものを春よなどさらばとだにもいはでくらん
けふは又ちりぬる花のなごりにもまさりてをしき春ぞくれゆく
なかくにおくれし花はありなめどけふ行春はとまらざりけり

ふみ人
しらす
同
俊成
新院
具平親王
雅定
攝政
寛言
朝忠
定頼母
枝直
直兄
蘆庵
景樹
游清
正範
周乘

○閏三月 閏三月盡 のちのやよひ

やよひのかさなるがのどかなるさまによむ閏三月盡は猶なごり深かるべし
○春におくるゝ春 ○春くはゝれる ○春の數そふ ○かさなる春 ○花の春かさなる ○やよひかさなる
○彌生の後の春 ○やよひのうるふ ○又もやよひの ○又のやよひ ○月の數そふ ○かさなる月
○日數のそふ ○そはる日數 ○君が代にうるふ ○うるふしるし ○二度春のわかれ ○二度春をなしむ
○なごりのまさる ○おくれしてくるゝ ○のどかにくるゝ ○常よりものどけき ○猶あかね ○置立そふ
さくら花はるくはゝれる年だにも人の心にあかれやはする
あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしも哉
常よりものどけかるべき春なれば光に人のあらざらめやは
常よりものどけかるべき春ながらけふのくるゝはあかずぞ有ける
花の春かさなるかひぞなかりけるちらぬ日かすのそはゝこそあらめ
けふぞしる春くはゝるとおもひしは馴てなごりのまさるなりけり
中へに後の彌生は春ならぬ春のなごりのこゝちこそすれ
くはゝれる春もなごりのけふなればをしむ心も世に似ざりけり

伊勢
貫之
左大臣
躬恒
範立
契冲
盛義
譽正

今古和歌字比末奈飛

夏之部

鈴木重胤 編輯

○夏

- 世は夏になる ○夏来ては ○夏ながら ○夏にしなければ ○夏かけて
- 夏あさき ○夏ふかき ○夏もおくある ○夏のさかひ ○夏山の色 ○夏の河べ
- 夏の川づら ○夏の山かぜ ○夏のすゞ風 ○夏の衣 ○夏のあした ○夏のあさけ
- 夏の朝ぼらけ ○夏のゆふべ ○夏のゆふ闇 ○夏のたそがれ ○夏の夜 ○夏かりのあし
- 夏かりの草 ○夏そひて ○夏引の糸 ○夏の日 ○夏のてる日 ○夏のあつき日
- 夏のくもり日 ○夏の入日 ○夏の夕日 ○夏の日さかり ○夏の日より ○てる日の色
- ながき日影 ○う月 ○卯月のいみ ○神祭るう月 ○さ月 ○さみだれ月
- みな月 ○なごしの月 ○夢の秋 ○麻でほす ○しげる櫛 ○みどか夜
- みどかき夜は ○日さかり ○あつき日 ○てる日はたかく ○土さへさけて照日 ○夏のはしる

○首夏 初夏 早夏 なつのはじめ はじめの夏

首夏は四月朔日より四五日ほどをいふ初夏早夏は心得かはる事立春初春早春の定めにおなじ新樹又は更衣ともよみ合せ時鳥をまつ花のなごりを思ふなども詠べし神祭る卯月ともよめり

- 夏はきにけり ○夏になりけり ○夏になれば ○夏にしなければ ○夏されば ○夏にこそ
- 夏のさかひ ○夏のそら ○夏かげ ○夏山 ○夏山かげ ○夏のいろな
- 夏かりのあし ○夏かりの草 ○けふの夏 ○夜のまにけふの夏 ○櫛の夏
- 青葉のなつ ○かすまね夏 ○みづえさす夏 ○衣ほすてふ夏 ○なつ衣 ○夏衣きていく日
- 夏衣たつ ○夏衣立かへてける ○立かへてきる夏衣 ○衣がへせる
- 衣ぬぎかふ ○ひこへ衣 ○わか葉の衣 ○せみの羽衣 ○霞の衣たちかふる ○衣がへせる
- ぬぎかふる花の袂 ○花の袂のなごり ○うすき袂 ○氷のためし ○神のます杜
- 神まつる ○ゆふしでし神祭る ○しめさす ○さかささる ○さかささる卯月
- けふは卯月 ○卯月のはじめ ○卯月のいみ ○夕月 ○三日月の影 ○けふよりは
- けふも猶 ○けさより向ふ ○夜床の枕 ○朝日すゞしく ○朝ぼらけ ○朝風すゞし
- 風をばまたし ○わか葉さす ○わか葉の櫛 ○若葉かげよき ○青葉まどり ○青葉の露
- みどりすゞしき ○しげる櫛 ○うのはな ○うの花垣に ○うつぎがき ○玉がしは
- ならの葉がしは ○葵草かくべきほど ○ほこまぎすまつ ○せみ ○うぐひす ○ふぢつと
- おそざくら ○花のおもかけ ○花のゆくへ ○花のうつり香 ○花のなごり ○花のあさなき
- 昨日をば花の蔭 ○花鳥もゆきかふ ○花鳥も皆行かひて ○霞の立かふ ○霞はれゆく
- 霞はれそむ ○霞もやらぬ ○霞をへだつ ○霞まね空 ○はるかれて ○春おもほゆる
- 春わすられぬ ○春のわかれ ○春のかたみ ○春のなごり ○春のおもかけ ○春を今
- 春はそなたに ○過にし春 ○くれにし春 ○きのふの春 ○いづこ迄春はいぬ
- いそぎたつ ○折ふしのうつる ○あつしこのみ

○

春過ぎて夏きたるらし白たへの衣ほしたり天のかぐやま

持統天皇

○

わがやとの池の藤なみ咲にけり山ほととぎすいつかきなかむ

よみ人しらす

○

夏にこそ咲かゝりけれ藤の花松にとのみもおもひけるかな

重之

玉がしは庭も葉びろに成にけりこやゆふしで、神祭る頃
をしめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣哉
けふも猶かすむ外山の朝ぼらけきのふの花の俤やたつ
神のます杜の下草風ふけばなびきてもみまつる比かな
山ざとは夏のはじめぞ只ならぬ花の人めも過ぬとおもへば
夏きてもなごりにしばし霞かとはのかにむかふゆふ月のかげ
風わたる浅澤水のさいなみも心にとまる夏はきにけり
立そめし春のしるしに引かへて霞まぬ空に夏は來にけり
花さかぬ横の外山に春くれてかはらぬ色に夏はきにけり
きのふまで霞のおくにみなしつる山もあらはに夏はきにけり
鶯のすもりなりし山かげの竹のふしどに夏はきにけり
春がすみあけし一夜をへだてにて晴ゆく空に夏はきにけり
花ちりし藤の若葉の朝しめり日かげのうちにつたふ露哉
ゆく水にかけみえそむる夕月の涼しきほどに夏立にけり
月は、や卯月の色もみせてけり忍び音いかに山ほととぎす

○更衣 ころもがへ

卯月朔日春の服を脱て單の衣に更るなり新式に云くなべての題は月にむかへば花を

經 信 素 性 院 順 眞 彌 松 軒 景 樹 春 庭 枝 直 春 夫 久 胤 宣 長 廣 海 譽 重 有功 痴

忘れ花にむかへば月をわするよよしよめど更衣は單の衣を賞せずしてひたすら春の
衣をぬぎかへまうきころもをよむなり

- 衣はかへむ ○衣がへうき ○衣ばかりかは ○衣手うすし ○妹が衣 ○せこが衣
- なつ衣 ○ひさへ衣 ○麻衣 ○うすき衣 ○すゞしの衣 ○かざりの衣
- きならし衣 ○たび衣 ○蟬の羽衣 ○かはらぬ昔衣 ○こけ衣 ○身にそへし衣
- 移り行花染衣 ○花色衣ぬぎかへて ○袂すゞしき ○袂に夏はたつ ○袂かるき
- かふる袂 ○なれし袂 ○うすき袂 ○節の袂 ○花の色に染し衣 ○あざざりし花の袂
- 花の袂にかふ ○やつれし袖 ○しらがされ ○大宮人のしらがされ ○卵花色の白がされ
- 卵花がされ ○ひさへになりて ○ひさへにけふは ○うすきかざり ○せみの羽の薄き
- ぬきうすき ○わぎもこがぬひし ○かへて今朝 ○かへて見れば ○かへまうき
- かへまをし ○いつしかさかへぬう ○うつればかへつ ○うき身そかふる時なき
- ぬきかふ ○櫻色をかふる ○けさかふる ○たちかふる ○いそぎたゞれぬ
- たつこ安き ○だつやおそき ○たちぞきにける ○たちきる ○なれきつゝ ○きてみれば
- さる人さへば ○かたおもからぬ ○あぢさゐの色 ○うつり香 ○花の香ざり ○花染よりも
- 花のかげなき ○今さら花を思ふ ○心は花をしたふ ○今はさて ○さきわくる ○時にうつる
- をりふしも ○限りあれば ○ならはしき ○うつるは人のならひ ○ときにうつる
- こくもへだつる ○おしければ ○をしみかれ ○をしむかひなく ○身になれし ○なれがたき
- うすきちぎり ○なごりなく ○めづらしき ○すゞしさは ○よそめすゞしき ○色もすゞしき
- 寒くもある哉 ○風のたつ ○風をまつ ○風をいさばぬ ○風なつかしき ○夏おもほゆる
- 春だにも ○春をよそなる ○春の思ひをたつ ○春のかたみを ○春のかたみもこまらぬ
- あやなく春の

けふよりは夏の衣になりぬれどきる人さへはかはらざりけり
 花ちるといとひしものを夏衣たつやおそきと風を待かな
 夏衣花の袂にぬきかへて春のかたみもとまらざりけり
 けふかふる蟬の羽衣きてみれば袂に夏はたつにぞ有ける
 ちりはてゝ花のかけなきこのもとにたつことやすきなつ衣かな
 いつしかとかへつる花の袂かな時にうつるはならひなれども
 をしむにもこゝろなるべき袂さへ花の名残はとまらざるらん
 をしみかね花色ころもぬぎかへてけふより風のたつをまつ哉
 山吹の花色衣ぬぎかへてしろきひとへもめづらしきかな
 花の色にまだ染ざりし白たへのはじめにかへす夏衣かな
 なにとわく匂ひならねどとり出てこそなつかしき夏衣かな
 ほどもなき庭の梢になきぬべき蟬の羽衣けふよりぞきる
 木かげにも猶こそまされなれさつる花の袂のけふのたちうさ
 さしかへし袖には花も匂はぬをたれかかたりの名をおほせけん
 ついにここにいれしふる着のから衣かたおもからぬ夏はきにけり

よみ人 盛明親王
 匡房 基俊 慈圓 俊成 定家 仲實 契仲 長流 最樹 游清 春庭 廣海 雪直

○餘花 殘花 暹櫻 おそざくら

夏に入て咲花をも春よりかけて夏に残れるをもあまたの木の中に一木二木のこれる

をもまた一木のかた枝散はてぬをもよみて三題とも大かた同じさまにて宜しかるべし

- 櫻もこそゆかしけれ ○おそざくら ○卯花垣のおそざくら ○薄紅のおそ櫻
- みる人もなき山櫻○稀なる夏の山櫻○松のはぐむむ櫻○山隠れなる櫻花○山ざくら戸 ○ひさ花
- 初花よりも珍らし ○花のありか ○花のなごり ○おくるゝ花は ○のこれる花は
- のこる一木 ○今さかりなり ○咲のこる ○咲おくれたる ○咲初しおもかけ○ひさりさく
- 一枝はおくれてさける ○谷間に咲る ○有さや風の匂ふ○おかれて匂ふ ○匂ひおかれて
- 匂へる雲 ○匂ひつゝ散にし○ちりおくれたる○ちりのこる ○猶ちりのこる ○けふもちりつゝ
- まだちらぬ ○外のちりにし後○若葉にかくる ○青葉のそこ ○青葉がくれ ○青葉にしづむ
- 青葉にうづむ ○青葉が中 ○青葉が下 ○青葉まどり ○青葉のひまに ○梢のみざり
- 夏はみざりの葉○夏をさかりの ○夏までのこる ○夏さて咲る ○夏来てし ○夏ながら
- 夏かけて ○夏さもしらぬ ○夏をよそにも ○夏山かけ ○み山は夏さもみえず
- はてばう月 ○彌生の後の ○のこるやよひ ○春なつかしく ○春ぞこひしき ○春はいかに過し
- 春におくれて ○春のよそなる ○春の色をのこす○春のさまる ○山にや春の越る○奥山に春を残して
- 深山にのこる ○深山がくれ ○山がくれなる ○山のさかけ ○かた山かけ ○尾上の雲
- おりぬる雲 ○木ぶかき ○木がくれ ○谷の木かけ ○しげる木のまに○風よりさきに
- 風にしらすな ○風にぞしるき ○たづねいる ○たづねばや ○惜らん心もふかき
- 見らくすくなき○日にそへてまれなる ○をりなつかしき○めづらし ○思ひもかけす
- 立かばる

古 あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとり咲らん ことさだ

夏山の青葉まじりのおそざくら初花よりもめづらしきかな
 なつ衣きていくかにかなりぬらんの花はけふもちりつゝ
 をしむらん心も深き花なれば風にしられぬ枝やあるとぞ
 さくらだに散のこらばといひしかど花みてしもぞ春は戀しき
 よしの山嶺にたなびくしら雲のたえぬやおそき櫻なるらむ
 いにし春のかたみも今はあだざくらこれなくばこそしひて忘れめ
 おくれては物すさましくみゆる世に今もさくらのめづらしき哉
 おそざくらそれも思ひはすてざるや心のはなのちらぬならまし
 ひむろ山しげる若葉の木のみより雪とも見えてのこる花哉
 あしがらや北山かげのさくら花さくは卯月のはじめなりけり
 大かたはしげる若葉の山ざくら世のことわりの外に咲けり
 鶯の山にかべりて鳴かたに夏ともしらぬはなやさくらむ
 葉がくれの花をこそみれきのふかも恨はてたる風のなごりに
 うぐひすの鳴そめしより山里の春は久しきおそざくらかな

盛房 道齊 兵衛内侍 俊成 經盛 長嘯 眞淵 正道 春夫 久胤 春門 英好 千隆 安平

○新樹 わかば

夏のはじめ木々の若葉の茂り行を云ふ卯月の初旬の題ならば新樹の縁そひゆくさま
 をよむべし五六月ならば新樹のことわりなくてたいみどりのふかきさまをよむべき

なり

- 木ぐらく ○木かけをぐらく ○木のしたやみ ○木深くなる ○木々のしづく ○木々のみどり
- みどりの木々 ○茂る木の間 ○茂る木蔭 ○夏木だち ○かしはぎ ○杜のかしは木
- 葉廣柏 ○玉がしは ○このて柏 ○ならの廣葉 ○葉がへるなら ○外面のなら
- 松の干させもわかれぬ ○松の縁もわかれぬ ○さくらの若葉 ○花の木も同ト若ば ○葉廣くまがし
- 柳葉のさきは ○若楓 ○なつかげ ○夏の來てしげる ○かげもよし ○かげしげる
- みづ枝さす ○みづ枝は風のやどり ○枝さしかはす ○さ枝おもげに ○梢のなつ
- なつの梢 ○庭の梢 ○宿の梢 ○わか葉の梢 ○春やむかしの梢 ○朽にける梢 ○み
- しげりあひて ○しげりあふ ○しげるころ ○さながらしげる ○あまりにしげき ○匂ふ
- くだにさく ○すもえぎ ○わかみどり ○雨にみどりそふ ○みどりすましき ○みどり深む
- みどりの葉 ○みどりのわか葉 ○みどりの葉山 ○わか葉さす ○若葉すましき ○若葉もゆらぐ
- 茂るわか葉 ○林のわかば ○露のわか葉 ○にひかみ葉 ○青葉 ○青葉の山
- 古葉こぼれて ○葉守の神 ○葉廣になる ○かげひろき ○みさをづくりて ○しめはふるまで
- こさしおひの ○花ちりし木の間 ○花のあまふ ○花にくもりし ○花のおもかげ ○むら雨
- むら雨そよぐ ○小雨にぬるゝ ○葉もすまし ○葉ちる ○おもる露 ○つゆにほふ
- 露の染る ○露ちる ○露結ぶ ○露の朝明 ○露の朝風 ○朝風すまし
- 夕たつ風 ○風わたる ○風やどすまで ○風だにすかすなる ○風すましき ○すましき
- 日にそへて ○日をさふる ○月だにもらぬ ○月の影ぞまれなる

庭の面は月もらぬまでなりにけり梢に夏のかげしけりつゝ
 玉がしはしげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふる迄

白河院御製 基 俊

花ちりし庭のこのまもしけり合てあまてる月の影ぞまれなる
春過て卯月になれば柳葉のときはのみこそ繁くなりけれ
いなみ野のむら／＼みえし柏木の葉廣になれる夏はきにけり
しげりあふわか葉かたぶきふる雨に木の間の山ぞ暫しみえゆく
朝な／＼ぬれて色そふわか楓みどりをさへやつもはそむらん
くだにさく園生の木々の若みどり夏このまじき宿にも有哉
吹おくるけしきの杜の朝かせも青葉がうへはおとなかりけり
はら／＼と古葉こぼれて白かしのみづえさしそふ時はきにけり
天雲の高尾の山の若かへで涼しきかげの奥ぞしらぬ
軒おほふ葉廣くまがし露おちて緑の空の雨をしるかな
おしなべてみどりわかれず成にけり青葉が奥の松のむら立
吹よらむ風の便と引うゑし庭のまもみは若枝さしけり
夏木立みづえ若葉のくはよりてうひ／＼しくも匂ふ露哉
月かげもすすきとほるまで若楓すいしき夏になりけるかな
かの岡に若葉さしそふならのかげみづ驛ともたのむべら也

好 貫 重 正 蘆 眞 景 廣 太 高 紀 繁 廣 直 有
忠 之 之 徹 庵 淵 樹 俊 訓 尙 賢 樹 海 兄 功 卿

○新竹 わかたけ

あらたに生出たる竹をいふことし生の竹とも若竹ともよめり筍をもよむなりよせ詞

は大やう新樹に同じ又雑の竹の部をもあはせて考ふべし

- 竹の若葉 ○竹のその ○竹のこ ○園の竹の子 ○若竹の巻葉 ○宿のわか竹
 - よながき竹 ○庭のくれ竹 ○ここし生の竹 ○まかきの竹 ○園のわか竹 ○うきふしやまだきしる
 - 若葉なびく ○枝もさなみに ○えださしかはす ○かげそふ ○かげさす ○かげをひろむる
 - 籬の外に生出る ○みどりそふ ○しげりあふ ○しげる ○庭もをぐらく ○月もらぬ
 - 千代までなびく ○千代のはじめ ○むすふ露 ○露けし ○ここしより ○さかく／＼に
- としごとを生そふ竹のよ／＼をへてかはらぬ色を誰とかは見む
千代もたる竹のおひたる宿なれば千草の花は物ならなくに
すいしさにいく夜かねぬるくれ竹の林は夏のふしど也けり
きのふよりけふはよながきわか竹にかねて千尋のかげも見えけり
ことし生の園の若竹風ふけばそよぐ斗になりけるかな
ことしふの竹にはあれどひとふしに千代もこもれりためしによけむ
竹の子はまた世ごもりておや竹のさわぐ風にもなびかざりけり
ゆく末のちひろをたのむ竹の子はおひ出るよりいさまじき哉
ことし生の竹のわか葉も露けきは世のうきふしやまだき知らん
ことし生はことにいつくし竹とりの翁もかくやうれしかりけむ

千 景 重 足 嵩 弘 有
房 蔭 樹 盛 魂 賢 訓 卿

○卯花 うのはな

うの花ともうつ木ともよめり今世に云ふうつき木は箱根うつ木といふ物にて異なり

と云りのこれる雪音なき浪とよみ又夕闇のかき根の月木の下月夜うの花月夜あるは
神がきに白もふかくるなども多くよめりいづれも白きものにたとへたり

- 卯花の頃 ○卯花のひかり ○卯花ふきのかり庵 ○卯花の咲しかれば
- 卯花の盛は今も ○卯花のよそめ ○卯花づく夜 ○卯花くたし ○卯花山 ○卯花がき
- 卯花のまがき ○八重のうの花 ○かこふうの花 ○もりの卯花 ○野べのうの花 ○谷の卯花
- 里の卯の花 ○きしの卯花 ○身をうの花 ○世をうの花 ○あなうの花 ○卯月の花
- はなうつ木 ○うつき ○うつき原 ○うつき垣 ○川添うつき ○にほふ
- ひざりさかり ○咲ちる ○咲るあたり ○むらく咲る ○道もなきまで咲る
- 枝もたわゝに咲 ○青葉まどり ○枝白たへ ○枝さしかばす ○木の下やみもあらト
- みな白たへに ○雪さしもまがひて ○雪のいろ ○あたらしら雪 ○時ならぬ雪
- 時わかすふる雪 ○月雪さゝはるゝ ○月いるあさに ○月のかげさも ○月影を色にて ○月なきほどの
- 木下月夜 ○夕月夜ほのめく ○木のまの月 ○雲間の月かけ ○垣れを照す月影 ○外にしられぬ月影
- 神垣にゆふしでかくる ○ゆふしでを ○しらゆふかくる ○ゆふかけたり ○かくるしらゆふ
- 白妙のみてぐら ○さらせる布 ○涙のしがらみ ○音なき波 ○音なし川の波 ○白波の音せでたつ
- 白波の立田川 ○ぬせきさぞみる ○名に流れたる ○波もてゆへる垣れ ○かきれの霜
- 垣れもたわゝ ○かき根つゞき ○かきれさやけし ○かきれ斗り ○垣れや春をへだつ ○たがしめゆひし垣れ
- 賤が袖がき ○山がつのかきほ ○山がつの門 ○山もとの ○夏山の木かけ ○あし火たくや
- 賤がふせや ○ふるささ ○庭のおも ○かのこまだらに ○露のかされる ○くれぬひかり
- あまたえて ○みちたえて ○かげのかよひち ○かざしの花に ○れだくもならで ○つま木にさす
- 我のみ見よこ ○れぬに明ぬこ ○明は有明の空 ○あなうこのみも ○うくもきてさふ ○夏きにけりこみゆる
- き馴れたる人 ○をみの衣 ○さ月をかけて ○時鳥かへる

名所 宇治の里(山城) 小野の里(同) 桂の里(同) 賀茂川(同) 岩陰山(同) 音

羽山(同) 吉野山(大和) 初瀬川(同) 住吉の岸(攝津) 玉川の里(同) 白川(陸奥)

萬 時ならぬ玉をぞぬける卯花のさ月をまてば久しかるべし
後 時わかすふれる雪かとみるまでに垣ねもたわに咲るうの花
拾 わがやどのかき根や春をへだつらむ夏きにけりとみゆる卯花
金 雪の色をぬすみて咲る卯花はさえでや人にうたかはるらん
詞 卯花の咲るあたりに宿りせじねぬに明ぬと驚かれけり
千 むらくに咲る垣ねの卯花は木のまの月のこゝちこそすれ
同 もふ月夜ほのめくかげも卯花のさける垣ねはさやけかりけり
新 卯花のさきぬる時は白たへの波もてもへる垣根とぞみる
月 ふるさとはへだても見えず卯花のさける所やかきねなるらん
有明の月はた落てうの花のにはふかきねとなりけるかな
月 はまだ山のみくらきたそかれに光さきだつ庭のうの花
雪とみる空めはかへてうの花のくるゝまがきぞ月になりぬる
ほとゝぎすまたるゝ頃は卯花のとなりに咲もたよりなりけり
山本の川そひうつ木咲にけり行かふ袖にかゝるしらなみ
月雪とゝはるゝをりは卯花も垣のくづれやおもなかるらん

依 知 景 長 宗 廣 康 重 實 顯 重 俊 順 同 頼
平 紀 樹 伯 祇 海 宗 家 房 輔 之 頼

う月きて花になりけり山ざとの垣は小柴と思ひしものを
 さかしらに卯花がきに八重もひて夜なく月をすませつる哉
 あかざりし春をへだつるかき根にもさくうの花はあはれなりけり
 ほととぎすくべき宵なりてる月のかけさへみゆる庭の卯花

久 胤
 御 杖
 春 門
 有 功 卿

○葵 あふひ

すべて賀茂の祭にあづかる事にてこれをかざしにもし籬にもかくる也賀茂松尾の社
 司その前日より然るべき所々に葵を献る由公事根源に見えたもろかづらとは桂木の
 枝のちひさきに葵をかけてそれをかざすを云

- あふひの露 ○あふひの草さる ○あふひをかくる ○あふひかざらん ○あふひのわか葉 ○あふひのかづら
- あふひの露 ○もろはのあふひ ○すのあふひ ○みすのあふひ ○かものみあれにあふひ
- けふにあふひ ○ふた葉のあふひ ○たがあふひさり ○ゆふかづら葵にかけそふ ○かざし草
- もろ葉ぐさ ○みどり葉 ○二葉にかけて ○二葉草 ○うらわみ ○かづらかざして
- もろかづら ○泪ももんかづら ○光りになびく ○日影になびく ○影さすかたになびく
- かづらかざして ○かざす ○かざすけふにも ○かくる ○ねがひを懸る ○たのみをかくる
- いくさせかけて ○いく世をかけて ○世々かけて ○世をかけていのる ○かけていのる
- かけばなれけむ ○引われ ○みあれのけふ ○みあれひく ○人もみあれのかづら
- けふのみあれ ○かもの御社 ○みかげ山 ○そのかみ山 ○神まつる ○神奴がさるや
- 神につかふるしるし ○神にたのみを ○照日は神の心かな ○出る日のかけ ○いはふここの葉
- 日かげに向ふ ○移る日の影さす方 ○人もみな ○氏人 ○いばふここの葉

名所 神山(山城) 松尾山(同) 二葉山(同) 御蔭山(同)

千 あふひ草てるひは神の心かはかげさすかたにまづなびくらむ
 新 いかなればそのかみ山のあふひ草年はふれども二葉なるらむ
 勅 いくかへりけふのみあれにあふひ草頼みをかけて年のへぬらむ
 新拾 大空の光になびく神やまのけふのあふひや日かげなるらむ
 六 人もみなかつらかざして千はやふる神のみあれにあふひ也けり
 同 千早振かみの卯月になりけりいざ打むれてあふひかざらん
 堀 もろ人のかざすあふひは千早ふる神にたのみをかくるなりけり
 神山の岩根の草の名もしるくうごきなき世にあふひ也けり
 心なき草ともいはじ日のかげのめぐるそなたになびくあふひは
 けふかくるをすの葵はすめ神の心になふみどりなるらし
 小車のをすの葵にかけまくもかしこきけふの神まつりかな
 神山の二葉のあふひ年々にとるとはすれどつきせざりけり
 日のかげにむかふあふひをみるくも人はこゝろの根にぞまもらぬ
 あふひ草けふしもかざすもろ人に神のめぐみの露かゝるらむ
 あふひ草日ごとになびく心ともしらでや露のおきかへるらん
 みどりなる雲とも見えて大空のをすの葵はすしかりけり

基 俊
 小 侍 從
 後 徳 大 寺
 匡 房
 貫 之
 ふみ人
 しらす
 肥 後
 雄 風
 幸 隆
 御 杖
 利 和
 廣 海
 契 沖
 千 蔭
 景 樹
 有 功 卿

○郭公 ほととぎす

四月までは多くは山になく也されば待心をもはらによむべし五月は里なるゝ時ともよみて全なくころとす六月は聲の稀なるよしをよめり

- あし引の山郭公○しでの田長 ○初こゑ ○なら鳴こゑ ○ほのめくこゑ ○かたらふ聲を
- 曉のこゑ ○入相のこゑ ○むかしこゑ ○こそふる聲 ○たごるこゑ ○尋れしこゑを
- 山彦のこたふる聲 ○ひここゑ ○さ夜の一聲 ○一こゑのゆくへ ○一こゑのなごり
- 只一聲の行方 ○こゑにたつ ○聲ほのめく ○聲のほひ ○こゑぬれて ○聲しきる
- 聲さみだるゝ ○こゑはしげくも ○聲はまくらに ○聲なきかせそ ○聲なをしみそ ○鳴聲しげく
- 昔の聲もかはらぬ ○鳴わたる ○鳴かはす ○なきやふるせる ○なけしげし ○たちぬなく
- 夜たゞなく ○はつかになく ○なちかへりなく ○あかずさやなく ○卵のふり出でなく
- 外にまづなく ○外山の雲に鳴 ○雲の底になく ○峯つゞきなく ○山ふかくなく ○卵花のかけに鳴
- うつ木のかけに鳴 ○花橋の枝になく ○花橋にきなく ○來なく ○來なきこゑもす
- けふしも來なく ○なごききなかね ○やよやなけ ○雲路になける ○雲ぬになきて ○雲に鳴なり
- ながなゝり ○更てなく ○昔より鳴ふるす ○月に鳴すてし ○今鳴ぬべき ○はつれ
- 初音がたらふ ○さても初音や ○我はゝつれに ○なく音空なる ○なく音にあかて ○もらす
- れにあらはれて ○うはの空なる音 ○しのび音 ○忍び音はおさらしものな ○かたらひて
- なる ○なのりすらしも ○月になのる ○かたみになのる ○かたらふ ○かたらひて
- かたらひつくせ ○かたらひ明す ○をちにかたらふ ○こそかたらひし ○鶯のふるすよりたつ
- 遠れこゑみる ○はれならはしに ○なみだはみえぬ ○つまこふる ○やすよふ ○すぐる
- すぎぬるか ○とほざかる ○いや遠ざかる ○ゆきやらで ○いづちゆくらむ ○何方へ行さばしるらん

- かれずこむかも ○年毎にきつゝ ○雲のいづく ○雲の外なる ○雲のはだて ○雲よりいづる
- 雲ぬにてまつ ○雲ぬのよそに過ぬ ○むら雲 ○横雲 ○しらぬ雲ぬにゆく心
- 夕ぬる雲の底 ○峯の雲間 ○雨の中 ○雨のまぎれ ○むら雨 ○五月雨に
- 五月の空 ○五月雨過る空 ○五月つぐる ○五月まつ ○五月やみ ○おのが五月
- 月の桂のかけ ○月にさきだつ ○月をだにあかず ○月待さ起いを寐れ ○夕月夜たそがれ時
- 入月の影ほのか ○有明の月 ○曉月 ○雲まの月 ○雲の絶まに月さして
- 更行月のおも ○空もさゝろに ○四方の空 ○やみなき空 ○みやこの空 ○音羽の山
- み山いでゝ ○山のとかげに ○山ささに ○山木さほく ○里わく ○里なれぬ
- 里なれ初る ○里をあまた ○里をばかれず ○まだ里なれぬ ○我宿をしも ○軒ちかく
- 杉のむら立 ○卵の花のかけ ○卵花のかきれ ○卵花の咲ちる岡 ○卵花づくよ ○橋のやざり
- 橋の匂ふあたり ○雨そゞぐ花橋 ○けふひめもすに ○曉かけて ○しづかなる曉やみ
- 明るくしらず ○明ればかへる空 ○明つるほどの ○天の月の明がた ○たそがれ時 ○よその夕ぐれ
- いく夕ぐれ ○ゆふかけて ○くれごさに ○よひの間は ○今宵ばかりはあらト
- ほのめく宵の ○さ夜更る ○さ夜更にけり ○夜をかされ ○夜だにあけば ○よるしもなごか
- あやなくよるの ○よがれせぬ ○この夜あまた ○夜はの寐覚 ○よ所のれさめ ○目をもさましつ
- れぬ夜つもる ○れぬより外に ○れぬ人さへぞ ○れられぬまゝに ○れられざりけり ○れなましものを
- うたゝれ ○衣かたしきうたゝれ ○いなやすくれ ○まごろめば ○うつゝももなく
- 夢に聞つる ○夢にさばらぬ ○夢もうつゝも ○夢のこゝち ○枕さふ ○枕そばだて
- 聞もすゞしき ○きよての後も ○きよまごぼはしつ ○きよつやさふ ○きけばなつかし ○きけどもあかず
- きかましや ○きかてやまむ ○きかぬ人なく ○きかすかほにて ○きかすさくらや ○まだきかぬまの
- こゑできくへんや ○こゑきけさや ○たよりにきけば ○夜はにきこゆる ○まづはきこり ○尋てきかむ

○尋くらしつ ○尋みて ○たづぬべき ○いくたびさひつ ○まつ人いかで ○まつさしもなき
 ○まつ心には ○まつにしるしの ○またせくして ○またれしかども ○待し夜さる ○待わびてそ打ふせば
 ○またぬ夜も待も ○またぬ寐さめ ○またで試む ○宿にてまたむ ○寐てのみや人は待らん
 ○わが待えたる ○いかに待てか ○人つては ○人しれずこそ ○人くるしめ ○人しづまりて
 ○物思ふ人の ○わがこそ人も ○れざめぬ人も ○つらき人さへうれし ○心ならひに
 ○心もそらに ○心まごぼす ○心をさそふ ○おればかり ○たれにしのお ○たがこまづて
 ○たがさへばかも ○たれゆゑならぬ ○たれかなさりの ○なごり多くも ○こたふるさへぞ ○旅だつ
 ○空にや草の枕ゆふ ○おごろくばかり ○おごろかす ○ほのかにて ○ちかながら
 ○かへりおくる ○さだかならひ ○物にまざれず ○所もわかず ○いづくもおなド ○常よりとに
 ○いくその夏を ○たまさかに ○いつの間に ○思ひもあへず ○おぼつかなくも ○あやにたに
 ○あくがらす ○よしさらざ ○恨もばてむ ○猶うさまれぬ ○れだくも外に ○人だのめなる
 ○かひなかりけり ○さりかへしてもあかぬ ○いや珍らしき ○言のはうれし ○いざさらば涙くらべん
 ○さも住うくも ○われもうき世に ○うき世の中を

名所 常磐山(山城) 片岡の杜(同) 神山(同) 桂の里(同) 深草の里(同) 伏見

の里(同) 淀の渡(同) 初瀬山(大和) 三輪の里(同) ならしの岡(同) 難波潟

(攝津) 生田の杜(同) 繪島(淡路) 逢坂山(近江) 二見の浦(伊勢) 隅田川(武蔵)

萬 卯の花もいまださかねばほととぎす 佐保の山べにき鳴とよもす 家持
 同 此よらのおほつかなきにほととぎす 鳴なる聲の音のはるけさ しみん
 同 さよふけて曉月にかげみえてなくほととぎす けはなつかし 池主
 古 音羽山けさこえくればほととぎす 梢はるかに今ぞ鳴なる 友則

同 めづらしき聲ならなくに郭公こゝらの年をあかすも有かな 同
 後 ほととぎす 曉がたのこゑはうき世の中を過すなりけり しみん
 拾 此さとにいかなる人か 家居して山ほととぎす たえすきくらん 賞之
 同 たゞ袖におもひよそへて 郭公花橘の枝になくらむ しみん
 後拾 ほととぎす 待ほどこゑを思ひつれきよてのこちもねられざりけり 道命
 金 郭公あかで過ぬる聲により 跡なき空にながめつる哉 顯輔
 同 きく度にめづらしければ 郭公いつも初音のこゑちこそすれ 永緑
 千 またできく人にとはいやほととぎす さらても初音やうれしかるらん 覺盛
 同 一こゑはさやかに鳴てほととぎす 雲路はるかに遠ざかるらん 頼政
 同 ほととぎす 鳴つるかたをながむれば たい有明の月ぞのこれる 右大臣
 新 有明のつれなくみえし 月は出ぬ山ほととぎす まつとせしまに 攝政
 同 ほととぎす 雲のよそに過ぬなりは ねぬ思ひのさみだれの頃 太上天皇
 代 たぐさ引岡の卯花 ちるまでに猶こゑしのぶほととぎす かな 澄舜
 同 夏ふかき山里 なれどほととぎす 聲はしげくもきこえざりけり しみん
 同 此頃はさらにしたひもあへぬ まで過れば きなくほととぎす かな 眞淵
 同 老らくの耳には うときほととぎす 思ひ出るや 初音なるらむ 澤庵
 同 粟田山まつのは うづむしら雲のなれぬ 朝けに鳴郭公 景樹

すみだ河堤に立て舟まてば水かみ遠くなくほととぎす
 有明の月に一こゑ鳴すて山ほととぎすゆくへしらすも
 かた岡の杜の梢になきすて山遠くゆくほととぎす
 う月よりことしななきぬ郭公わがまつ時やわすれざるらん
 ほととぎすきしなごりに大空のむなしき果もながめられけり
 雨はこぶ外山のさとの夕月夜ぬれてはきなくほととぎす哉
 一聲のゆくへも見えて有明の山ほととぎす月になくなり
 かをりつゝ桐の花ちる明ぼのに山ほととぎすうらかへり啼
 ほととぎす聲まつ人は橘の花ちるさとをとふべかりけり
 あやめかる淀の澤べをほととぎすすいしき音にも鳴わたる哉

○待郭公

○こゑをしむ ○はつ聲を ○一聲もせぬ ○一こゑもがな ○忍びれならば ○なのりかれたる
 ○しばしかたらへ ○ながめにさへも ○いかにきなかぬ ○今もなかねか ○よそに鳴らん ○おそく啼らむ
 ○なきてきかせよ ○まづなき初よ ○やよやなき ○いつうちさげて鳴 ○まつにしるしの
 ○まつかひありて ○まつてなれを ○まつにおさせぬ ○まつば久しき ○まつほご久し ○まつ夜のかず
 ○まつよながらに ○まつに明ぬこ ○待ほども定なき世 ○まつ人がらか ○まつ人の思ふ計は
 ○まちごほ ○まちし夜ごほ ○まちごほにのみ ○まちわびて ○またれむさてや ○またて聞人もやあらん
 ○まてばやなかぬ ○いかにもちてか ○心のかぎり待 ○月よりもまつ ○けふはまたるゝ ○かけてまたるゝ
 ○まだしきほごに ○さ月まつ ○さ月わするな ○枝うつりせよ ○早うちさけれ ○われに聞せよ

千 隆
 詮 鷹
 季 紀
 知 夫
 春 夫
 久 胤
 保 己
 廣 海
 有 功
 同 卿

萬 同 古 同 後 拾 千 新 代 同

○人のきくがに ○きかまほしきは ○おさづれぬ ○空だのめなる ○こさかたらはん ○打もふされず
 ○しのぶるほどの ○こごしなきは ○心しらでや ○さてしもやまぬものなるに ○夜ぶかくきかん
 ○この曉を過ぎるなん ○まごろみせぬ ○ねぬ夜つる ○あなほつかぬ ○あはれもしらぬ
 ○ながめにつけて ○わかなる里に ○天雲のよそ

我やどに月おしてれり郭公心ある此夕き鳴とよもせ
 ものゝふの岩瀬の杜のほととぎす今もなかねか山のとかげに
 五月まつ山ほととぎす打はぶき今もなかねここの古こゑ
 さ月こば鳴もふりなんほととぎすまだしき程の聲をきかばや
 郭公きゐる垣ねはちかなながら待どほにのみ聲の聞えぬ
 初聲のきかまほしきはほととぎす夜ふかく目をも覺しつる哉
 ほととぎすまつは久しき夏の夜をねぬに明ぬと誰かいひけん
 あり明の月はまたぬに出ぬれど猶山ふかきほととぎすかな
 なきぬべき夕の空に郭公またれんとてやつれなかるらん
 いにしへは尋しものをほととぎす老はねがめの空にまつ哉
 なかざらむものとはなしにほととぎすつらき人こそ猶またれけれ
 忍び音もやすくやもすほととぎす我ひとりすむ山の庵に
 ほととぎすつれなかりしは有明の空まで月を見よと也けり
 まつにこぬ山ほととぎすきかむともおもはぬ里にゆきて鳴らん

家 持
 宣 令
 伊 勢
 よみ人
 同 通
 同 宗
 親 宗
 九 條
 資 忠
 眞 淵
 元 政
 景 樹
 邦 直

卯花に月こそこのれほととぎす此明ぼのと過すべしやは
 時鳥まつとせしまにしらみけり一むら雨のあとの月かげ
 ほととぎす忍ぶ卯月も過にけりいつもらすべき初音なるらん
 ほととぎすまつにたむむなものふの弓張月もほのめきにけり
 千 尊 有文朝臣 孫 有 功 卿

○菖蒲 あやめぐさ

葉のひろく根の長き菖蒲を五月五日ごとにあらそひて此葉をさり邪をさけ其根を醗
 とし薬に入しと云ふ赤縣モロコシの故事を皇國にもつたへさせ給ひて軒にふき簾にかけかづ
 らにひ枕にむすびなどする事となれり

- あやめの香 ○あやめの葉 ○あやめさる ○あやめふく ○あやめかゝる ○あやめかたしく
- あやめもわかす ○花あやめ ○かゝるあやめ ○くすりのあやめ ○かざるあやめ ○ふけるあやめ ○淀野のあやめ
- 澤田のあやめ ○古江のあやめ ○沼のあやめ ○澤のあやめ ○浅澤のあやめ ○池のあやめ
- 汀のあやめ ○みごもりあやめ ○かゝらざりせば ○かゝるくる ○しづくにかゝる ○雨の雫にかゝる
- みごりすゞしき ○末葉風わたる ○朝かぜながら ○おひそむる ○おひ立て ○おひしげる
- 水がくれておふる ○根ながらや ○根もふかき ○根ながら ○根をばたづれん ○根ながき
- うべも根ながく ○ながき根 ○浅からぬ根さし ○引なつくしそ ○引かけて ○引こも盡せぬ
- ひくべき程に ○あしまにひく ○沼ごごに尋て引 ○げふやひかれん ○けふ引かゝる ○尋て引も
- 絶ずもひける ○かりてふく ○かりてつがぬる ○おりたちて ○かづらく ○すゞしくなびく
- 千代のためし ○長きためし ○長き世のためし ○いか斗長き ○年のなながき ○くる年毎に
- 玉の臺もなかりけり ○みおける宿の ○蓬生の宿 ○草の庵 ○ふきそふる ○ひさしにおふる

- 軒にふく ○軒に宿かる ○軒に根さす ○軒のつま ○やまのつま ○つまにふく
 - つまにひかる ○かり寐の床 ○枕にゆふ ○沼水の底の心 ○沼の岩がき ○岩がき沼
 - 浅澤ぬま ○いかで浅香の沼 ○おのが沼 ○さ月の沼 ○庭の池水 ○玉もよる池
 - 底深き池の心 ○ふかき江に ○深きこひぢ ○ふかき淀野江 ○水ごもりに ○水がくれて
 - 亂ぞまさる ○さみだれの ○さみだれたらば ○雨のゆふぐれ ○玉にぬく ○露すゞし
 - あやめづらし ○さ月にあへる ○けふあらはる ○よそに思ひし ○さのめやおなた ○なべてならぬに
- 名所 淀野(山城) 美豆の御牧(同) 益田の池(大和) 住の江(攝津) 玉江(同) 伊香
 保の沼(上野) 浅香の沼(陸奥)

萬 ほととぎす今來なきそむあやめ草かづらくまでにかゝる日あらめや
 拾 きのふまでよそに思ひしあやめ草我やどのつまと見る哉
 同 けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草の庵のみして
 後拾 つくまへの底の深さをよそながら引るあやめの根にてしる哉
 金 萬代にかはらぬものはさみだれの雫にかゝるあやめ也けり
 詞 こやの池におふるあやめの長き根は引しら糸のこゝろこそすれ
 千 五月雨にぬれ／＼ひかむあやめ草沼の岩がき浪もこそこせ
 月 とし毎に引手もたもしあやめ草けふより軒に根させとぞ思ふ
 同 あやめ草尋る人のこゝろにぞまづ長き根はかゝりそめける
 代 年をへて絶せぬものはあやめ草深きよど野にひけば也けり
 あやめ草けふはよもぎにまじれども麻にもまして敷ざりける
 契 堀 忠 定 攝 堀 經 良 能 宣
 冲 河 度 佐 政 河 信 選 宣

おなじ江を引わかれてやあやめ草かをれる宿のつまと成らん
 しばしこそ引手にぬるれあやめ草猶ひまそひてすめる池水
 さいれ波よればなびきてあやめ草かをるは池の心なりけり
 かりふけば軒ばにあまるあやめ草瀬のみながしと思ひける哉
 唐人も袖にあやめをかげそへてわが日本の風になびけり
 山しろの淀の澤べのあやめ草朝風ながらふきてけるかな

貞 徳
 似 雲
 尊 晴
 景 樹
 貞 直 卿
 有 功 卿

○五月五日 いつかのひ

此日菖蒲を詮とよめりまた薬玉をさ月の玉とも云ひて薬にて玉をつくり五色の糸に
 て編み簾また袖にもかくる由なり薬狩競馬なども今日ある事なり

○さ月のいつか ○さ月のけふ ○いつかこまちし ○いつかわすれん ○けふさしなれば
 ○けさのしら露 ○年に一たび ○なりにあふ ○くす日 ○くすだま ○さ月の玉
 ○ますかみ ○まゆみのひなり ○かるとも ○たもとの花 ○軒のしづく ○時鳥おとづる
 ○あふち花さく ○橋を玉にぬく ○園のよもぎ ○蓬もなりにあふ ○あやめの枕ゆふ ○あやめふく
 ○あやめかたる ○あやめづらしく ○あやめしらね ○あやめかづらく ○神のあやめ ○かざるあやめ
 ○袖のあやめ ○袂にかくるあやめ ○軒ばにふける草 ○衛士のおりひく ○引たがへたる
 ○夜ぞかゝりける ○れにあらはるゝ ○うきに生たる ○雲にかたる ○あかなくに ○つれづれさ
 ほととぎすあく時もなしあやめ草かづらにせん日こもなきわたれ
 足引の山ほととぎすけふとてやあやめの花のねにたてゝなく
 心ざし深き汀にかるこもは千とせのさ月いつかわすれん

よみ人
 しらす
 延喜御製
 道綱母

後拾 勅 六
 つれづれと音たえせぬは五月雨の軒のあやめの雫なりけり
 あやめ草ねにあらはるゝけふこそはいつかと待しかひもありけれ
 たが里もねやのまにゝあやめ草けふ引かけぬ人はあらしな
 さ月きていつかと待しあやめ草むつのつかさのけふぞひきつる
 をりにあふ花も結びてあやめ草眞袖にかくるけふは來にけり
 ふきそふる軒のあやめの朝露もさ月の玉とけふぞかをれる
 玉たれのはにかゝれるあやめ草露のためにも打もらでかな
 あやめ草かりふくやどの夕ぐれに初音をそふるほととぎすかな
 かちまけをわけいかづちの神まつりあらそふ駒もいち早きかな
 露ふかきうけらが花にのみだれ薬がりするむさしの原
 みちのくのかつみ草にもえてしがな軒のあやめにふきそへてみん

こしつな
 東三條院
 よみ人
 しらす
 保 敬
 蒼 生 子
 譽 道
 譽 正
 長 平
 信 友
 千 隆
 有 功 卿

○橘 盧橘 花橘 たちばな はなたちばな

三題全く同じ心得にてそむく事なし花をも實をもめづるうちに多くは花さくころを
 詮とよめり此を非時香菓と皇典に記させ給へり近き衛の橘また御階の橘右のつかさ
 の袖ふれしなどよめるは紫宸殿の階下のなるをいとかしこければおのがどちばに
 へき事にこそ

○橘の林 ○橘を玉にぬく ○橘の花ちる里 ○橘のかけふむ道 ○あから橘 ○あべたち花
 ○てれるたち花 ○軒のたち花 ○花橘にふく風 ○花橘ぞしるべ ○昔しる花橘 ○こいばの木

○さなへ 玉なへ ○さなへ草 ○さなへ月 ○さなへ老る ○さなへ老る ○さなへ老る
 ○さなへの小田 ○みぢりのさなへ ○おくてのさなへ ○わせのさなへ ○民のさなへ ○夕さなへ
 ○神田のさなへ ○千町のさなへ ○御代のさなへ ○はつなへ ○わかなへ ○小田の若なへ
 ○山田のさなへ ○露の玉なへ ○なへうる ○わさなへ ○むろのはやわせ ○わせもおくても
 ○まづる草葉 ○みだれ葉 ○葉のぼる露 ○うらわかみ ○みぢりの一村 ○みぢりにつゞく
 ○ふしみぬさきに ○ふしだぬほご ○ふしだつ ○いたく老ぬる ○神のみさしる ○みさしる小田
 ○いほしる小田 ○そさも小田 ○うまる田 ○おくて田 ○わさ田 ○そしる田
 ○かさつ田 ○うき田 ○かご田 ○きし田 ○千町田 ○澤田
 ○山田 ○みなご田 ○あげ田 ○くぼ田 ○山田のみしめ ○山田のかけひ
 ○小山田に水せく ○山田の澤に ○すそわの田井 ○田面の末 ○田草ひく ○田子のますらを
 ○田子のつかれ ○田子の諸こゑ ○田子のかけなほ ○田子の小がさ ○田子のぬれ衣 ○田子のいな舟
 ○敷そふ田子 ○多かる田子 ○みたやもり ○みたのうゑめ ○うゑめ ○植めの聲さよむ
 ○民もいさなく ○ますらを ○やをさめ ○しづのめ ○浦の聲も遠くまぬ ○さりもはてぬる
 ○管の小がさ ○手もたゆく ○手もすまに ○ごりくくに ○ごりわくる ○ごりもはてぬる
 ○さる手ひまなく ○まだ取わけぬ ○うゑたてゝ ○うゑわたす ○いそぐさて ○今いそがなん
 ○もろ手にいそぐ ○さりがたき ○聲ぞ賑はふ ○こひぢにたつ ○しめ引わたす ○引しめの長き日
 ○井せきもる水 ○濁る山川 ○濁る谷川 ○山下水をひく ○さみだれ ○雨すぐる
 ○むら雨 ○雨にさはらぬ ○晴まよつ ○晴まもまたぬ ○名残に置る露 ○露ふかし
 ○玉ぬきながら ○朝下めり ○ゆふ下めり ○夕かけて ○くるもしらす ○時すぎば
 ○卯月の末に ○さ月のなかば ○みな月かけて ○ほに出る秋 ○さしある秋 ○わが君のため
 ○世のうるふ ○おりたつ ○もすそぬらす

名所

竹田(山城) 鳥羽田(同) 布留の山田(大和) 住吉の岸田(攝津) 安濃の湊田(伊勢)

後拾 三田やもりけふは五月になりにつけり急げやさなへ老もこそすれ
 同 五月雨に日もくれぬめりみち遠み山田のさなへ取もはてぬに
 新 早苗とる山田のかけひもりにけり引しめ繩に露ぞこぼるゝ
 續後 峰の松入日すやしき山かげのすそ野の小田にさなへとるなり
 玉 小山田にみゆるみどりの一村やまだ取わけぬさなへなるらむ
 續子 さ月きぬみとしろ小田にしめはへて神の宮人さなへとるらん
 月 五月雨のなごりにおける白露の玉ぬきながらとるさなへかな
 同 さみだれの晴ま待えてしづのめが門田のさなへ今やとるらむ
 代 またれつる時はさ月になりにつけり小田のさなへも今いそぐかな
 同 ほととぎす忍ばぬ聲をさくよりや山田の澤にさなへ取らん
 しづの女が澤田にうゑし若なへのなべてみどりに成にける哉
 さなへとりかへる夕のあせ水の田にも濁さぬ月やすむらん
 大御田のみなわもひちも搔たれてとるやさなへは我君のため
 はこぶにもあまる貢に遠近のさなへにみせてうゑる頃かな
 かたらひてとるも珍らし妹とせの山田のさなへたのみ有けり
 植わたすさなへの露のひかりにも秋のみづ穂のおもほゆる哉

好 隆 經 順 家 成 徒 資 師 廻 契 長 眞 波 大
 忠 實 信 院 教 茂 綱 盛 繼 右 沖 嘯 淵 平 子 秀

さみだれにながめくらせる月なればさやにもみえず雲隠れつゝ

あるトの女

- 雲のみを ○雲に雲そふ ○雲をかゝれる ○雲の八重ぶき ○雲埋む軒ばの山 ○雲間もみえぬ
- 雲まく軒 ○あま雲 ○行合の雲 ○かさなる雲 ○曇りふたがる ○月影うさく
- 月影も思ひ絶たる ○月影をいつ待出ん ○月みるひまぞなき ○月の夜ころも過 ○窓より西に月をまつ
- 雲ひまなき ○雲ぞたえぬ ○打しめり ○けぶりしめる ○たく藻の烟打しめり
- 軒のいさ水 ○軒の玉水 ○軒ばくづる ○軒ばにおほふ ○軒より落る瀧 ○軒のあやめ
- 軒のしのぶ ○露しげき軒のしのぶ ○ふるやの軒 ○あしのしのや ○水草が末
- ゆく水の高き ○まだ水浅し ○まさるみくさ ○岩垣水こえて ○まこも水こゆ ○あしの末こゆ
- 河柳水こゆ ○岩波たかし ○うれこす波や ○庭に波こす ○涙ぢはれせぬ ○八十瀬の波
- かけひながるゝ ○柚木ながるゝ ○眞木ながるゝ ○底の埋木あらはるゝ ○あまのもしほ木
- 鹽屋の煙たゆる ○もしほもくまぬ ○かつぎせぬにも ○みつ沙のひるまもみえぬ ○浅き瀬もなし
- 淵瀬はいづら ○末せきわくる ○わたりを遠く ○わたりもみえず ○舟よばふ聲も及ばぬ
- おろす筏 ○さまくちて ○下くつるまで ○袖つくばかり ○もすそもそぼつ ○ほさでもやがて
- 卵花くたし ○梅もあからむ ○實を結ぶ梅 ○ふし柳 ○小篠の原もなし ○夏草しげる
- 夏草高くなる ○芦の下葉のかくる ○藻くすかくれぬ ○かりつくしこすば
- ますげかる ○まこもかる ○ほととぎす鳴空 ○をしのめる ○沼の岩がき ○浅香の沼の心ち
- 瀧のおこ ○おちたぎつ ○橋のうく ○澤田川 ○いさら小川 ○山川の浅き瀬みえぬ
- 絶て引しわすれ水 ○外面の小田 ○田子のもすそ ○かさなる山 ○谷の通路たゆ
- いづれかよごの ○みづのみまき ○いく夜さまり ○限もしらぬ ○いつをまちてか ○いく日かへぬる
- 日なへぬれば ○おこづれたゆ ○かりにだにさはで ○心もはれぬ ○ながめくらせる
- いぶせき空 ○つれづれ

さみだれは水のくまきのまこも草かりほすひまもあらじとぞおもふ
 さみだれはみえし小ざゝの原もなし浅かの沼の心ちのみして
 さみだれに玉江の水や増るらんあしの下葉のかくれゆく哉
 さみだれは小田の水口手もかけで水のこゝろにまかせてぞみる
 いとしくしづがふせやのいぶせきに卵花くたし五月雨ぞふる
 さみだれにおもひこそやれいにしへの草のいほりの夜はのしづけさ
 五月雨はまやの軒ばの雨ぞよきあまりなるまでぬるゝ袖かな
 小山田にひくしめなはの打はへてくちやしぬらんさみだれのころ
 みしま江の玉江のまこもかりにだにとはで程ふる五月雨のころ
 さみだれは入江のみかさ増りつゝからぬにみえぬまこも草かな
 なはしろにたえぐ引しわすれ水あせこえにけり五月雨のころ
 をしのある夏山かげのさゝれ水岩波高しさみだれのころ
 あやめ生る沼の岩がきかきくもりさもさみだるゝきのふけふ哉
 ふりをむるそがの川原の五月雨にまだ水浅しますげからなん
 なくせみの聲こそとよめさみだれは山のあなたやくも間なるらん
 月ほしにへだつる雲のさみだれに宵曉ぞ空にわりなき
 さなへ草うゝる時として五月雨の雲も山田におり立にけり

相模 道永 道時 實能 基俊 輔仁親王 俊成 太政大臣 行能 良一 季經 後徳大寺 土御門院 隆祐 魯道 春満 眞淵

けふのみにさ月はなりぬさみだれの雨なつかしきこよひ也けり
 桑のみの色づき落てこの朝けさみだれそよぐ雨をやむ也
 山里は軒ばにかゝるさみだれの雲をおそひてむら雨ぞふる
 うけらたく烟もさらにしめりつゝ軒はをぐらき五月雨のあめ
 夏川のあしの末葉に浪こえてさなへにわたる五月あめ哉
 つま木こる音もおとせずなりにけりわがやまかげのさみだれの頃
 さみだれの雲間にもゆる夏山はやがても空のみどりなりけり
 さみだれもかぎりあればやあふちゆる岡べの庵に夕日さすなり
 久かたの月人男あはれともおもひこさずやさみだれのくも

○水鶏 くひな

多くは夜なくものなりたゞとよむはそのなくこゑ戸などを叩くやうに聞なされる
 ばなり又鳴と詠るも常なり

- くひなく ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな ○くひなな
- 櫛のくひな ○深田のくひな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな ○たゞきな
- 明よさたゞく ○はかなくたゞく ○さゞぬ月をたゞく ○里毎にたゞく ○澤田になく
- 里わになける ○月にうかるゝ ○いづちゆくらん ○夢おどろかず ○ねさめさふ ○老のれさめに
- 夜もすがら ○さ夜ふけて ○さ夜すがら ○なつの夜 ○あり明の空 ○あげながら
- 明て後音せぬ ○明るをしも ○たれ明よせて ○天の月の明がた ○明る程なき櫛の戸
- 柴の戸 ○櫛の戸 ○櫛の板戸 ○板戸 ○此戸明よこ ○月のさす櫛の戸

東喜子 春夫 久胤 廣海 英好 譽重 景樹 千隆 有功卿

金 詞 同 月

- さゞで休らふ ○戸さゞの門 ○八重しげる薜の門 ○むぐらの門 ○むぐらの宿
- 心のさまる宿 ○宿ごこに ○宿りあまたに ○宿を定めず ○柴のかりや ○里ごこに
- 田づらの澤 ○外面の小田 ○人だのめなる ○人をほかる ○いかにせよさて ○何をあがずも
- 何あらましに ○心みどかき ○あはれにも

名所 竹田の里(山城) 牛窓(備前) 大屋が原(武藏)

里ごとになゞく水鶏のこゑす也心のとまる宿やなからむ
 夜もすがらはかなくたゞく水鶏哉させりともなき柴のかりやを
 夜もすがらたゞく水鶏は天の戸を明て後こそ音せざりけれ
 ひとかたはさりと人も人のたゞくらむ明ればこれも水鶏なくなり
 谷の戸を明てくひなは音せぬを猶岩たゞく山の下みづ
 なつの夜のまだき明るは天の戸をたゞく水鶏のあれば也けり
 中川の水のいづことたどるまになゞく水鶏もかたゞがへせり
 菴はふわが宿をしもたゞくなるくひなやよはの情しるらん
 月さゆる淺澤水に鳴くひな氷をたゞくこよちこそすれ
 やり水にながるゝ月のかげとめて夜聲すゞしく鳴水鶏哉
 水草のしげきあたりに庵しめて水鶏を宿のものと聞哉
 かりのこす眞菅かもとに月すみて水鶏鳴なり夜や更ぬらん
 月はさし水鶏はなれてたゞく也世におもしろき竹の門かな

顯綱 雅光 頼家 親盛 長流 長嘯 嘉言 眞淵 景樹 景臣 久胤 廣津 有功卿

○鵜河 うかひ

夏の夜川舟にのり一人は棹さし今一人は手繩にて鵜ののどをくもり鮎のふすあたり
に行て篝火をたくに魚の火かげにあつまるを見て鵜を放ちいれて取るさまをよそよ
りみてよむなり

- 島つ鵜鳥 ○うつかふ ○うぐひの魚 ○うぶね ○う舟さす ○うかひ舟 ○うのせ
- うなば ○うなば手にまく ○う川たふされ ○う川たつ ○夜川たつ ○夜川の水
- 夜川の底 ○夜川のかかり ○あゆしほしらば ○あゆこさばしる ○あゆふむ瀨 ○八十件のな
- つみ深きわざ ○手繩みだるゝ ○手繩さばく ○かよりさす ○かよりさしゆく ○かより火のかけ
- かより火しらむ ○のこりかより火 ○むすばれゆく ○かより ○たきすつる ○波をやく
- みなさかのぼる ○かひのぼる ○かひくだす ○さしかへる ○さしてぞくだる ○みなさしくだす
- 下せばあく ○みなれ棹 ○棹の音にさゆる ○川風はやし ○川せたづれむ ○早瀬川
- 高瀬さしこす ○高瀬棹さす ○瀬々のしるべ ○しもつせ ○かみつ瀨 ○こゝをせに
- 七瀬の淀 ○底のもくづも ○ぬぐひ音なふ ○山かげ ○月をいさふ ○月なきほど
- 月なきよひ ○さみやみ ○夕やみ ○やみをまつ ○後の世のやみ ○よひく
- くもり夜 ○夜は更ぬらし ○みどか夜をいさふ ○明がたちかき ○雨より後
- いくせに夏の ○世わたるみち ○まつ此世にも ○かくれなきまで ○ほのかになりぬ ○遠ざかる
- いかに契りて ○あはれさぞみる ○心なぐさに

名所 大井川(山城) 梅津川(同) 桂川(同) 戸名瀬(同) 夏箕河(大和) 吉野川(同)
長等川(美濃)

萬 同 同 後 金 新 代

ひめ川の早き瀬ごとにかかりさし八十件男は鵜川たつなり
年毎にあもし走ればさき田川鵜やつかづけて川瀬たづねん
しくら川瀬をたづねつゝ我せこは鵜川たふさね心なぐさに
大井川うかべるふねのかかり火にをぐらの山も名のみ也けり
大井川いく瀬う舟の過ぬらんほのかになりぬかかり火のかけ
久かたの中なる川のうかひ舟いかに契りてやみをまつらん
さき田川下すう舟にさす棹の音さゆるまで夜は更にけり
かよりぶねさしてぞ下る夏川の底のもくづもかくれなきまで
こゝをせにう舟さすらし大なる川岩もとさらぬかかり火のかけ
夏の夜の早き川せもうかひ舟さすかにくだす程はありけり
夏川の底まで照らすかかり火にのがれぬあものうはしりする
かつら人う舟たちけり鮎はしる夏のさかりは今にしあるらん
夜川だつ一瀬ふたせのかかり火にうなはのみだれいとなかりけり
今もかも神のみつぎとよしのなるもふ川のせにう川たつらし
夕月の入かたちかき山かげはやみもまちあへすう舟さすなり
深からぬつみのさえたやまつら川河せにうかぶう舟なるらん

○照射 ともし

家持 池平 樂平 雅定 定家 設岐 左大臣母 枝直 宣長 景樹 永章 蘆海 千蔭 蘆庵 右功卿

- 上にもゆる ○もえあかす ○光けたぬ ○身をこがす ○身にこもす ○むれの火
- すくもたく ○ほのめくかけ ○ほのみえて ○かざみえて ○みだるゝ ○みだれゆく
- 風にみだるゝ ○しのにみだるゝ ○玉さみだれて ○かげみだるめり ○浮草にみだるゝ ○藻にあらはるゝ
- 水草にすだく ○草のほにまがふ ○玉にまがふ ○緒しも絶たる玉 ○そらちるほし ○星にまがふ
- あしまにのぼる ○水草に夕ぬる ○夕ぬる ○川くだりゆく ○汀にめぐる ○袖につゝむ
- 消やらぬ ○かくれぬ物は ○数ますものは ○おのがおもひ ○身よりあまりて ○みなれがほにも
- あつめし物を ○こぼれぬ露 ○涙のよるしる ○灯の風に消ぬは ○あくがれ出る玉 ○あけたてば
- おどろくまでも ○風やふくらむ ○秋風にちかく ○秋ちかき ○朽し草葉 ○草むら
- 草がくれ ○草の葉毎に ○葉末の露 ○光そふ夕の露 ○木の下やみ ○木かけすゝしき
- よもぎの圃 ○池の玉も ○庭のやり水 ○澤水 ○谷水に ○沼の岩がき
- 瀧川のまに ○白露の玉江 ○岩がくれ ○山かけ

名所 清瀧川(山城) 音羽川(同) 宇治川(同) 佐保川(大和) 住の江(攝津) 難波江

(同) 猪名野(同) 瀬田の渡(近江)

拾 後拾 月 六 千 詞 後拾
 よもすがらもゆるほたるをけさみれば原の葉毎に露ぞおきける 健 守
 物おもへば澤のほたるもわがみよりあくがれ出る玉かとぞ見る 和泉式部
 なく聲もさこえぬ物のかなしきは忍びにもゆるほたる也けり 高 遠
 むかしわがあつめしものを思ひ出てみなれがほにもくる螢かな 季 通
 夏の夜はともすはたるの胸の火を緒しも絶たる玉かとぞみる 貫 之
 夏むしのかけみだるめりさゝ波やしがのからさき風やふくらん 範 季

代 光そふ夕の露とみえつるは草ばにまがふほたるなりけり 美 作
 よるはなほ心をもぞてらすべきまどのほたるも何かあつめん 元 政
 夏山の木の下かけはくらけれどほたるはおのがよるをまつらん 貞 徳
 ふるさとのみかきが原の夏草によるはもえつゝとぶほたる哉 眞 淵
 くるゝより人は音せぬ道のべを夜るもくものはほたる也けり 春 滿
 うきくさのしげる青淵ふかければおりたちかねてとぶ螢哉 景 樹
 千隈川底さへみえてさゝれ石の敷よりしげくとぶ螢哉 美 柳
 夏ふかきよもぎが中のかくれ家をあらはすものはほたる也けり 游 清
 とぶ螢すこしみだれて夏川の玉もにすがるかげぞすゝしき 廣 海
 はゝそ葉はそむにぞうすきさほ川の底まで照るは螢也けり 有 功

○蚊遣火 かやりび かび

かやり火はほた柴などをくもらせて蚊をふすぶるなり烟のいぶせく厭はしきやうに
 詠り又他所より烟の立を見てをかしきさまにもよむなり

- かやりたく ○むせぶかやり ○夜みのかやり ○やごのかやり ○猶かやり火や ○蚊火たく
- おく蚊火 ○蚊の聲むせぶ ○わぶる蚊の聲 ○藻くづたく ○かびたてゝ ○下こがれ
- 下むせぶ ○下もえ ○下やすからぬ ○下くゆる ○くゆる ○あがたにくゆる
- たつる ○けぶりたなびく ○けぶりうるさし ○けぶりの末 ○けぶりをのみも ○けぶる
- けぶる一むら ○たつけぶり ○しづやのけぶり ○ふすぶる ○宿にふすぶる ○軒ばすゝけて

- さころせき ○いぶせさそふ ○一村ながく ○月かけくもる ○村雨にしめる ○たそがれ時
- 日くるれば ○ゆふべく ○夕されば ○夕ぐれの宿 ○木がくれの宿 ○ふせ庵
- あまのかりや ○しづかや ○しづが軒端 ○山ざと ○山もこのささ ○遠の山ざと
- かきれつゞき ○軒ばの竹 ○ゆふがほ

玉 月かげのかすむもつらしよそまではけぶりなたてそ夜はのかやり火 前 關 白
 白河 かやりびのけぶり立なり里遠きゆづはの村に日はくれにけり 賢 阿
 堀 わきも子にいかでしらせむかやり火の下もえするはくるしかりけり 顯 季
 同 世の中をあくたにくゆるかやり火の思ひむせびてすぐるころ哉 俊 頼
 同 さらにぬだに夏のふせやの住うきに蚊火の煙の所せきかな 基 俊
 同 かやり火のけぶりたゞすは夕まぐれありともみえじ山もとのさと 元 政
 同 夕さればかやり火たかぬ宿もなし此里人は月やみざらん 眞 淵
 同 行水に夕の月はすみながらかやりにくもる川つらの里 千 隆
 同 山里のかやりなるらし夕づく日さゝぬかたよりたつけぶりかな 景 樹
 同 かやり火のけぶりをみても民の戸のにぎはひしるき夕ぐれの空 定 信
 同 かやりにとかの草たけけぶりたに清き月にはさはらざりけり 廣 海
 同 かやりたく竹の葉山の夕けぶりなびくをみれば人はすみけり 元 雄

○夏月 なつのよの月

月の面白きにつけて短夜を恨み或は月の明らかなる夜の涼しさに夏を忘れ霜雪にま

- がふなどもよめり
- みどか夜の月 ○てらす月かけ ○木のまの月 ○ながるゝ月 ○かたぶく月のよるべなき
- 光をまして ○光をましてゝる ○光すゞし ○かげすゞし ○かげすゞし ○かげもる
- かげやどす ○やゝかげすゞし ○明やすきかけ ○さやかにも ○時々てらす ○くもりばてなば
- もりかはりぬる ○さしながら ○すゞしくいづる ○いづればあくる ○はしぬにいづる ○やがて有明の
- 入こそしらぬ ○入がたをしき ○よごむまもなし ○やどる清水 ○やどれる水 ○いづみにやどる
- 岩こそ波に宿る ○ならのわか葉にもる ○そこまですめる ○うたゝれ ○まだ宵ながら
- 夏の夜わたる ○みどか夜 ○みどかき夜は ○ほどなき夜は ○いたく更ぬる ○更るもしらで
- ほどなく明る ○あかねにあくる ○明るもしらす ○みてをあかさむ ○冬にしられぬ氷 ○結べばこくる氷
- あだに結べるつらゝ ○庭にふる雪 ○庭のしも ○霜こみえつゝ ○霜のいろ
- まさごち ○夏しらぬ ○夏をよそなる ○秋にかはらず ○秋かとおもふ ○秋のさなりに
- 秋ちかき ○秋よりもけに ○秋をもまたで ○秋さみつらん ○わすれては秋かこ
- 名にたつ秋も ○鹿もなくらむ ○なみだの雨に ○雨はれて ○夕立のまだ晴やらぬ
- 夕すゞみ ○夕風すゞし ○風ぞすゞしき ○竹の葉わけ ○さしおひの竹 ○ならの葉わくる
- この下やみに ○木がくれて ○夏草の露に ○水底すみて ○ながるゝ水に ○岩がきし水
- 岩もろし水に ○谷のしみづに ○板井のし水 ○おなとし水も涼し ○板まあらみ
- ゆきてみむ ○みるほごもなく ○みるほど久し ○ひるもかはらぬ ○ながむる空 ○同く空こもみえぬ
- にしこもあへず ○いつよりもをしき ○なかくくに

古 なつの夜はまた宵ながら明ぬるを雲のいづこに月宿るらん 源 養 父
 後 天の川水まさるらし夏の夜はながるゝ月のよどむまもなし よみ人 しらす

こよひかくながむる袖の露けきは月の霜をや秋とみつらん
何をかは明るしるしとおもふべきひるもかはらぬ夏の夜の月
夏の夜の月まつほどの手すさびに岩もる清水いくむすびしつ
庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな
まこもかるよどの澤水深けれと底まで月の影はすみけり
夏の夜の月にぞあかぬ山のはのあなたの里に住べかりけり
夏の夜はやどれる月のけしきまでおなじ水も涼しかりけり
高ねより出ぬとみつる程もなく谷のし水に宿る月かな
夏山のならの青葉を吹く風にかけさだまらぬ夕月夜哉
つねよりも見るほど久し夏の夜の月には人をまつべかりけり
はしるしてすしくむかふ宵のまに光をさまる夏の夜の月
水枝さす葉廣くまかし露ちりて月おもしろき夜はにも有かな
庭しろく月のてる夜も木がくれて下なつかしき夏はきにけり
まだきより秋風かよふ西川の汀にたれかすいみせざらん
さゝ波やまのゝ入江のあしの葉に月すむ夜はの風そすいしき
もりきつる松の葉ごしの月かげは風のたえまもすいしかりけり
天の原夏の夜わたる月みれば八重の汐ちもほどなかりけり

同 資 基 頼 匡 實 頼 親 家 似 千 景 直 譽 東 久
通 俊 政 房 人 家 雪 樹 愛 正 喜 子 胤
す 家 圓 佐 經 雪 樹 愛 正 喜 子 胤

○夏草

すむかげの霜とみるまで夏の夜の月にはさえぬかねの音哉
むすぶ手の水にやどりて水よりも涼しくすめる月の影かな

尊 孫 清

萩萩薄葛葎芝淺茅蓬また水邊にては菅菅真菰などすべて夏になりて繁り合たるさま
をよめり野原澤沼池川など何處にてもあるべし

- なつの草 ○なつの草たち ○夏草むすぶ ○草たかみ ○草葉のたけ ○草むらごこに
- 草のみどり ○草の葉山 ○草のまがき ○草ふけ野 ○草がくれゆく ○露のふか草
- もりの下草 ○軒の下草 ○山のかげ草 ○分行草の ○百草しげみ ○みまくさにせむ
- なでしこ ○ひめゆり ○さゆり葉 ○下のさゆり葉 ○萩の葉 ○萩むら
- ばぎばら ○小萩原 ○秋まつ萩を ○すき原 ○しのゝをすき ○尾花こもれる
- ま葛原 ○かや原 ○わがや ○すげ ○すが原 ○岩もこ小すげ ○まこも草
- 淀のわかこも ○むらあし ○しげきあしま ○芝草 ○浅茅原 ○よもぎが庭
- 蓬が袖 ○八重むぐら ○なざゝ原 ○なりたがへたる花 ○しげりあふ ○花をばよきて
- 立のびて ○いたづらに老にけらし ○雨に色そふ ○しげりあふ ○しげり行
- しげるごこ ○しげるまゝに ○山下しげき ○ふかくなる ○けさあらはなる ○日ごこにまさる
- 日かげにしる ○いさゝしをたて ○むすぶばかり ○かる人もなし ○かれるばかり ○分わびて
- わくさわくれげ ○ゆきなやむ ○朝ふむせこは ○胸のあさもわがぬ ○まごゝつる
- 庭のかよひち ○野中の庭 ○野への通ち ○しげき夏野 ○道ごづる ○道たえて
- 道みえぬまで ○道にまよふ ○道分わぶる ○道たごんくし ○朝しめり ○夕しめり
- むら雨の露 ○露むすぶ ○露を花なる ○露のやどり ○露のすがらぬ ○浪こす風の

○光さへそふ ○露の色そふ ○露のぬれがほ ○露にしなるゝ ○露おもげなる ○露もよきておく
 ○色なる露 ○置あまる露 ○おくらむ露の ○かきれの露 ○けさだに露の ○いく朝露
 ○朝つめり ○よひつめり ○よひの雨 ○野へ ○向ひの野へ ○庭の面
 ○山がつのかきは ○かき根 ○ませのうち ○まがきにあまる ○まがきおもさ ○夕ぐれのまがき
 ○夕づく日 ○きりくす鳴夕かけ ○まがきにあまる ○まがきおもさ ○夕ぐれのまがき
 ○みるに猶 ○見せむさもせず ○たれにみせまし ○ひさりのみ ○人は戀しき ○こさなしに
 ○いかならん

名所 柏野(山城) 大原(同) 内野(同) 春日野(大和) 朝の原(同) 園原(信濃) 野

島が崎(溪路)

萬 野べみればなでしこの花咲にけりわがまつ秋はちかづくらしも
 同 見わたせば向ひの野べのなでしこのちらまくをしも雨なふりそね
 同 なでしこの花みるごとに少女らがゑまひの匂ひおもほゆるかも
 同 わがやどにさけるなでしこまひはせんゆめ花ちるないやをちにさけ
 同 我せこが宿のなでしこ日ならべて雨はふれども色はかはらず
 古 ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬる常夏のはな
 拾 いくにもさきはすらめど我宿の大和なでしこ誰にみせまし
 後 かならむこよひの雨にとこなつのけさだに露のおもげなりつる
 詞 種まきしわがなでしこの花盛いく朝露のおきてみつらむ
 去年の夏いもがすさびに種まきし垣のなでしこ花咲にけり

よみ人 くらげ
 家持 丹比國人
 同 大原今城
 朝恒 伊勢
 能因 伊勢
 顯因 伊勢
 尊因 伊勢

おきていにしたがとこなつの花ならんなみだ色こき花の朝つゆ
 おき出しわがとこなつのなごりより色こき露のかより初けむ
 みな月の川原なでしこ打そよぎ波の花さへかわくころかな
 たれしかもおふしたてけむ人すまであれしかきねのなでしこの花
 人とはいまだなにはづもとばかりにこたへまほしきなでしこの花
 かきなづる家のやひこのなすらひに見ればかなしきなでしこの花
 ねながらやこよひながれむかも川のさやれに生るなでしこの花

○夕顔 也ふがほ

夕暮に白く花咲て賤しき家の垣根などにはひ掛りたるがをしきさまなどよむべし
 源氏物語夕顔の巻の詞によりて詠る多し

○夕がほの宿 ○夕がほの花 ○花の夕がほ ○軒のゆふがほ ○月待出る夕貌 ○咲かゝる
 ○まがきに咲る ○花咲かこふ ○花のちぎり ○花の名は人めすてゝ ○垣れにはへる
 ○まつばれてさく ○いろばえて ○まゆひらけたる ○ひさふさ ○葉がくれ ○光こさなる
 ○ひかりありさみし ○光やそはむ ○夕露の光 ○露の光やかに ○露にひもさく
 ○上露下露 ○露のなまけ ○しら露 ○しら露の光りそへたる ○くれ初て
 ○たそがれ ○たそがれ時のそら日 ○よそめすかし ○よそめゆかし ○ほのみえわたる
 ○ほのくみゆる ○遠方人の袖がさ ○賤がさし ○賤がさきね ○しつみや ○あばらや
 ○あたら殿屋 ○ふせや ○かきほ ○あやしきかき根 ○かき根すし ○軒ばに音き
 ○軒のつま ○やどりゆかしき ○舞はふ門 ○はひまつばるゝ ○ひさふさをりて

長 嘯
 春 庭
 景 樹
 畝 儀
 東 喜 子
 有 功 卿

○蓮 はちす

花をもよみ葉をもめで露をももてあそぶよしにより池沼澤いづこにもあるべし水につけてさくものなればいかにもすすしきさなるべし

- 蓮のいさ ○はちす葉 ○はちすの上なる ○はちすの花 ○花ばちす
 - 法のほちす ○むねのほちす ○匂ふほちす ○池のほちす ○入江のほちす ○わか葉
 - まき葉 ○まくり葉 ○うき葉 ○たち葉 ○なびき葉 ○御法の花
 - 花のひかり ○こぞめの色 ○まことの色の心 ○心も清く ○清らなる ○けがれさる
 - 濁りにしまぬ ○此世のものさみえず ○すがくしくも ○かたるも清し ○匂ひすし
 - 色もすし ○すししく咲る ○けはひすしき ○風のすしき ○すしきは ○風にみだる
 - 夕風かよふ ○やごる月 ○露の身の ○露の命を惜む ○露もてかざる ○露つむむ
 - 露打ゆらぐ ○露の玉ゆら ○露の玉水 ○露のしら玉 ○露を玉さ ○露をだに玉さなす
 - こぼるゝ露 ○こぼれ落る露 ○おきぬる露 ○玉ゆりかくる ○玉ゆりすうる ○衣の玉
 - さよれなみ ○波こそ池 ○よる波 ○夕されば波こそ池 ○水清み ○たまれる水
 - 池のみぎば ○池のこころ ○池水のにざり ○澤へ ○淺澤 ○沼水
- 名所 大澤の池(山城) 菅田の池(大和) 劔の池(同) 日下江(河内) 住吉(攝津)
- 萬 久かたの雨もふらぬか蓮葉に濁れる水の玉に似むみむ
- 古 はちすばのにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく
- 六 はちす葉におきぬる露の玉水はうかべる人の心とぞみる
- 同 露にだに玉となしつるはちす葉に思ふ心を入れてみせばや

月 堀 代

○氷室 ひむろ

おろかにも露の命をましむかなはちすのうへにゐるをみながら水きよき池のはちすの花ざかり此世のものとみえずも有かな夕されば浪こそ池のはちす葉に玉ゆりかくる風のすしきはちすばのさしも葉廣におひぬらん露をかなしぶみやびをのため世の中の人の心のにごりより玉ともみるかはちすばのつゆ玉とみるはちすの露もこぼれてはにこれる池の水となりけり

- いはふひむろ ○けふのひむろ ○ふるきひむろ ○山のひむろ ○氷室山 ○氷室のわたり
- ひむろもり ○ひむろもる神 ○氷室のためし ○氷室のおもの ○ひむろ戸 ○おものたつ
- こぼり ○こぞのこぼり ○まかせし水の氷る ○せき入し水 ○いつかながれし
- さけぬま ○日かげにうきき ○岩月明る ○涼しさを外にも ○あたりさへすし
- 夕かげすし ○もる袖すし ○立よる袖 ○袖さむき ○袖さゆるあたり

資 賢
紀 伊
三 條 入 道
千 三 條 隆
譽 重
政 儀
廣 海
鶴 夫
春 壽

○夕はさゆる ○嵐もさゆる ○こぞの嵐 ○後のかたみ ○冬のなごり ○春立風やよきてよく
 ○あつさもしらず ○六月の空 ○夏まできえぬ ○夏をよそなる ○夏さしもなき ○夏しらぬ
 ○すめらぎの命 ○かしこき御世 ○みつぎもの ○ためしたたぬ ○大山もりが ○山下芝
 ○山下風 ○杉の下風 ○杉の下かけ ○岩かけ ○谷のさかけ ○谷ぶさこる

名所 長坂(山城) 宇陀(同) 松が崎(同) 春日野(大和) 關鷄野(攝津) 大山(近江)

後拾 夏の日になるまでうとき冬ごほり春立風やよきて吹けむ 頼 實
 千 あたりさへすいしかりけり氷室山まかせし水の氷るのみかは 右大臣
 同 たる秋も後のかたみはなき物を氷室ぞ冬のなごりなりける 覺 性
 細 すべらきのみことのすゑし消さねばけふもひ室のおものたつ也 俊 頼
 同 夏の日もすいしかりけり松が崎これや氷室のわたりなるらん 顯 季
 代 つげの野に大山もりが納めたる氷ぞ今もたえせざりける 仲 實
 同 くるとあくのとけむともなき氷室山いつかながれし谷川の水 土御門院
 千 みどりさへきえせでけふを松が崎千年かはらぬ貢なりけり 千 隆
 景 あけもかばたてまつらんとひ室もりおのがまろねもとけぬ夜は哉 景 樹
 尊 大君の御ことかしこみ氷室もる山には夏もいたらざるらむ 尊 孫
 遊 みな月のけふ岩かどはひらけどもおものはこそ氷なりけり 遊 清
 深 夏の日も消ぬ氷室は山つみの神のみたまのふゆにし有らし 深 夫
 春 大君の御代なが坂のひむろもりいくとせ夏をよそにすむらん 春 海

○蟬 せみ

蟬と日ぐらしと古へは通はして詠るを六帖にせみは夏の虫の中にいで日ぐらしは秋の虫の中に出せればこゝも其でうにしたがへりうつせみといふは現身といふ事なるを蟬は脱て出る物なれば中古より終に蟬の名ともなれりしなれど其本は然らず

- せみの羽 ○せみさわぐ ○せみのなく ○せみのむらこゑ ○うつせみ ○楢のせみ
 - きほふ ○下葉にうつる ○木高くうつる ○木葉にすがる ○楢にすたく ○山下さよむ
 - ゆする ○音に鳴くらす ○音に高く鳴 ○遠近になく ○鳴すさぶ ○打はへてなく
 - なきたつ ○もろこゑ ○こゑしきる ○聲もすゞしき ○聲のしぐれ ○聲のひゞき
 - 瀧のひゞき ○瀧もさゞろに ○川音にまがふ ○松風さそふ ○風にみだるゝ ○風にさわぐ
 - もりの下風 ○聲より落る露 ○羽におく露 ○なみだの露 ○木々の下露 ○杜の下露
 - 露よりしげき ○露を命と頼む ○むら雨 ○朝雨に ○夕立のはれ間 ○夏の日のかたぶく山
 - なつ山 ○夏山しげみ ○夏ふかき ○秋ちかき ○秋をかけたる ○秋かけて
 - 秋とおほゆる ○すゞしさは ○木かげすゞし ○かくればつる ○ならのしづえ ○松のしたかけ
 - 八重むぐら茂き ○明るもしらぬ日ぐらし ○むなしきから ○わがみからなる ○耳かしましく
- 名所 片岡の杜(山城) 衣手の杜(同) 高雄山(同) 夏箕川(大和) 高圓山(同) 信
 だの杜(和泉) 生田の杜(攝津)

萬 石ばしる瀧もとゝろに鳴せみの聲にしきけば都おもほゆ よみ人
 俊 常もなき夏の草ばに置露を命と頼むせみのはかなさ 同 しらず

うつせみのむなしきからになるまでにわすれんとおもふ我ならなくに
 下もみち一葉づゝちる木のもとに秋もおぼゆるせみの聲かな
 秋ちかきけしきの杜になくせみのなみだの露や下葉染らん
 なくせみの聲もすゝしき夕ぐれに秋をかけたるもりの下露
 葉をしげみ外山のかげやまがふらん明るもしらぬ日ぐらしの聲
 あらし吹梢はるかになくせみの聲よりおつる木々のした露
 山ざとの外面の竹を吹風に夕日すゝしき日ぐらしの聲
 おちたぎつ岩瀬の水にあらそひて山下とよみせみそ鳴なる
 所えて下葉の露になくせみのおのが聲には木がくれもなし
 山かげの苔路露けき夕かげに鳴せみのねもうちたもみつゝ
 夕日かげのこるともなき岡のべにせみの鳴音のすさまじき哉
 夏山のたきのひゞきをとめくればせみの鳴音もすゝしかりけり
 夏もはや梢のせみの聲にちる夕露すゝし杉の下みち
 むら雨に竹の葉そよぐ夕こそ梢のせみのたえまなりけれ

源養父 相模 大政大臣 讀岐 實方 俊成女 建保御製 蘆庵 春滿 英升 政通 定真 千陸 尊孫

○夕立 もふだち

もふだちは夏なるにはか雨を云ふ鳴神など轟ろき甚烈しく降り過るさま又は遠く降
 るけしきを他所より見るこゝろにもよめり

○夕立の雨 ○夕立の雲 ○夕立のあま ○夕立すゝし ○夕だつ風 ○きほふ夕立
 ○かゝる夕立 ○うつる夕立 ○なる神 ○いなづま ○虹のたつ ○雲すぐる ○雲まよふ ○雲かゝる ○雲がくれゆく ○雲こすみれ ○雲きほふ ○雲のこな
 ○雲さわぐ ○水まさ雲 ○一らの浮雲 ○うきたつ雲 ○むかふ雨雲 ○風きほふ ○風おつる ○風はやみ ○風すぐる ○棟なみより吹風に ○一こほり
 ○一しきり ○時の間 ○けしきをかへて ○空もさる ○空のみだれ ○かきくらし ○にはかにくもる ○すゞしく曇る ○ふりいでゝ ○遠かたにふる ○かつんくそぐ ○はれゆく
 ○はれわたる ○はれまの木かげ ○かたへ晴ゆく ○かつんくはるゝ ○末野ははれて ○こなたははれ
 ○すぎゆく ○あしごく過る ○よそに過ゆく ○一村過ぬ ○山めぐりする ○みれうつり ○外山にかゝる ○波よりのぼる ○さゞ波さわぐ ○鳥さわぐ ○市人さわぐ ○船人さわ
 ○苦もふきあへず ○かさやざり ○思ひもかけぬ ○にはたづみ ○露すがる ○なごり ○なごりすゞし ○しばしはすゞし ○楡のしづく ○栗ちる ○てる日ながらに ○日かげみ
 ○夕日さす高れ ○入日すゞしき ○入日なうつす ○入日さす外山 ○みれの松風 ○にこる谷川 ○山川のにこる ○山川の岩根に餘る ○川上に ○水上は ○うばにこり
 ○やなせのさなみ ○みくづせく梁瀬 ○瀬のしらなみ ○軒ばに落る瀧 ○庭の玉ざゝ ○此ささ ○むかひの里 ○夏野の末 ○夏野にはるゝ ○夏野にうつる ○野べより過る

万 夕立の雨ふるごとに春日野の尾花が上の白露おもほゆ
 川上に夕立すゝしみくづせく梁瀬のさ波立さわぐなり
 十市には夕立すらし久かたの天のかぐやまくもがくれゆく
 露すがる庭の玉ざゝ打なびき一むらすぎぬ夕立の雲

よみ人 好忠 俊頼 公經

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立の空
かれわたる軒の下草打しをれすしく匂ふ夕立の空
かきくらし思ひもあへぬ夕立に市人さわぐ三輪の山本
虫の音もよほすばかり夕立ちのなごりすしき庭の草村
しばしとて笠やどりするかげもなし夕立さわぐゐなの笹原
新田川うき雲さわぐ夕立に利根の川水うはにこりせり
袂までとほりてぬれぬ夕立の雨には笠もかひなかりけり
夕立の雲は外山の末こえてすしくのこる松のこゑかな
ふたご山みねに北もく雲みえて夕立す也あしの海つら
夕立はそこはかとなく晴にしを雫おつなりならの下かけ
千曲川水上くもり夕だてばさゝれふむまに水たゝもなり

○夏風 なつのかせ

夏山の梢また野への草葉を吹分るが涼しき由またたもとにまつ心をも詠りまた水邊
など何れにもあるべし

- 風をまつ ○風のそよぶく ○まだき秋風 ○朝かぜ ○夕かぜ ○夕だつ風
- 山風 ○山下風 ○野風 ○川原風 ○沖つ風 ○松の夕風
- 松の下風 ○かげふかき木の下風 ○木の下風 ○杜の下風 ○木々の山風
- 萩の葉にそよ吹 ○すそ吹風 ○柳かげ ○茂きこかげ ○みどりの櫓 ○みどりをわくる

西行 定家 宗圓 元政 長流 眞淵 景樹 勝繼 春海 廣海 日善

○竹の葉わき ○しのゝ小ざゝ ○夏かりのあし ○玉江のすげ ○すそ野の原 ○すし
○夕されば ○夕立のなごり ○雨のなごり ○夏山 ○夏衣 ○夏衣薄きかひなし
○かざりのきぬ ○うすき衣 うすき袂 ○袂ならして ○袂にまつ ○おもひもあへず

夏衣す葉野の草を吹風に思ひもあへず鹿や鳴らむ
いすゞ川そらやまだきに秋の聲下つ岩根の松の夕かせ
夏衣ゆくでもすし梓弓いそべの山のまつの下かせ
夕さればしのゝ小ざゝを吹風のまだきに秋のけしきなる哉
夏の風わが袂にしつゝまれば戀しき人のつとにしてまし
琴の音にひらきかよへる松風にしらべてもなく蟬のこゑかな
吹風の心はつねにあらねども夏こそ人にしたしまれけれ
夏山のならの葉わたる夕風の袂までこそすしかりけれ
はれわたるつみえの桑の朝しめりもろ葉の露を風はらふ也
しらかしのふる葉にみゆる山風はたえくながら涼しかりけり
なつの日のあつきさかりは吹風も薄き袂を猶へだてけり
山窓のねぶの下風かをりきてけふも晝の夢さそふなり

顯季 明親 家隆 左大臣 左大臣 眞瀧 眞瀧 景樹 日善 伴善 蘆庵 有功

○夏夜 なつによ

五月關のあやめも別ぬ意またみじか夜の明る程なき意をたてゝ詠り又あけやすき月
をもかこつなどあるべし

○夏の夜すがら ○夜もすがら ○みどか夜 ○よるはみどかく○あくる夜なれば○すゞしき夜は
 ○すゞしきよひ ○よひながら ○まだ宵ながら ○あくるしのよめ○はかなく明る ○うたゝれ
 ○ふすかさすれば○ふさぬほごより○見はてぬ夢 ○夢をのこして ○清水のうき枕 ○れやへもいらぬ
 ○鳥より後も ○月はのこりて ○月をだに ○ゆくほたる ○いなづま ○蚊やり
 ○夕すゞみ ○日しくれば ○はしぬの袖 ○はしぬながらに○槇の戸 ○槇の戸も明ながら
 ○戸を明ながら ○ほごもなき ○そらやほごなく○まつ人もなき ○風をまつ ○竹の葉すさふ
 ○時鳥鳴も果ぬに○時鳥さへ

古 拾 詞 六 百 同 代
 夏の夜はふすかとすればほととぎす鳴一聲に明るしのよめ
 夏の夜は浦島が子が箱なれやはかなく明てくやしかるらん
 夏の夜はしのよをさゝのふしちかみそや程なく明る也けり
 みじか夜も鳥より後ぞ明やらぬ老のね覺に物思ふ身は
 なつの夜はなるゝ清水のうき枕むすぶ程なき短夜の夢
 夏の夜はまつ人もなき槇の戸も明ながらみ明しつる哉
 夏かりの菅のさむしろあたらしきこよひのはしる誰と明さむ
 竹むらのすきまにみゆるちかどなり火かげ涼しき夏の宿哉
 はしるして風まつ里のともし火のまたゝくひまによは明にけり
 風ふけどさゝぬいた戸は夏の夜の月のためとも成にける哉
 山のはゝかはらじものを夏の夜の月の入さの程もなき哉
 高殿に月ほととぎすたれか先とふやと待も樂しかりけり

貫 中 四 頭 定 重 景 久 芳 成 利 有
 之 務 行 昭 家 痴 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹
 保 章 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹

○夏曉 なつのあかつき

涼しき由を専とすべし短夜の夢の名残をも有明の月のかげの清く涼しきがさすがに
 をしきさまなどを
 ○曉の匂ひ ○曉おき ○有明の月 ○横雲のわかるゝ○横雲のひまよりしらむ
 ○こりのこみ ○うたゝれながら○おきいづる ○ふけぬるか ○明わたる空 ○明はなれゆく
 ○すゞしく明る ○あけにけり ○しらむも早き ○まださしらめる○しのよの空 ○しのよめいそぐ
 ○はやしのよめこ○ほがらなくこ ○月のこる ○月はしらみて ○月よりまきに ○衣うすき
 ○袖のすゞしき

後 續 千 代
 かさゝぎの峯とびこえて鳴もけば夏の夜わたる月ぞかくる
 夏草の露分衣このごろのあかつきおきの袖ぞすゞしき
 ひと聲のあかぬなごりにほととぎすながむる夜は明にける哉
 かいり火のもえもあへすてやり水に影しらみゆく夏の夜は哉
 みじか夜のはかなく告てなく空のをりあらはれなる朝鳥哉
 若葉さすほどもしられて朝ぼらけみどりにしらむ窓のひま哉
 わかなへの葉のほる露にかつ消てはかなく落る有明の月

よみ人 雅 寂 利 眞 亮 一
 ず 經 超 和 潤 澄 雄

○扇 あふぎ

月かげにたとへたるは團扇なりかははりとといへるはたゝみ扇なり
 ○扇のつま ○扇のほごなきに○扇の風 ○たのむ扇の風 ○黄なる扇 ○紫の扇

- 白き扇 ○星のあふぎ ○ならす扇 ○かざしの扇 ○さし扇 ○枝あふぎ
- 櫛あふぎ ○手なれの扇 ○法の扇 ○妹にあふぎ ○捨られし秋の扇 ○うちばの風
- 末廣 ○雪のいろ ○月にたさふ ○かはほり ○たむむ ○たむむにかたき
- 三重がされ ○内も外もみえぬ ○はりこむる ○我ほりこむる涼しさ ○あふぐ
- あふげども ○わすられなく ○おかれざりけり ○打もおかれぬ ○手にふるゝ ○手をはなたぬ
- 手ずさびに ○たが手ならせる ○袖のうへ ○秋風かよふ ○嵐をばこぶ ○つきせぬ風
- 思ふが方の風 ○風のやどり ○風をさそふ ○風かよふ ○風のすゞし ○涼しき風をさめて
- すゞしさは ○月まつほご ○夕されば ○夏しらぬ涼しさ ○まだき秋

後拾 はかなくもわすられにける扇哉落たりけりと人もこそ見れ 和泉式部

六 あふげどもつきせぬ風は君がためわが心ざすあふぎなりけり 貫之

同 船出する君に手むくと吹風は馴て年へし扇なりけり よみ人

六百 夕されば宿の扇を手ならして月待ほどもすゞしかりけり しら

代 内も外もみえぬ扇の程なきにすゞしき風をいかでこめけん 頼昭

今はとて打おくねやの扇かなぬるまや秋の心なるらむ 景樹

これよりぞ秋は立ると萩の葉を扇の風の驚かすかな 久風

秋風のをぎのうは葉に吹までの宿りにならす扇なるらん 春庭

なかばいづる月のおもかげあらはれてまねけばかよふ袖の秋風 定信

ひねもすにならせども猶あかぬ哉こやむつたまの扇なるらん 光彪

ふく風のめにみぬ秋も起ふしの手にまかするは扇なりけり 光輔

たきものゝうつりがこくも匂ふ哉たがさし扇とりたがへけん 有功 卿

○泉 いづみ

泉は出水しみづは清水の事なれど通はして詠り結ぶと云ふは手して水をすくふ事なり

- いづみの末 ○泉に秋やすむ ○むすぶいづみ ○清水もる ○まし水 ○谷のまし水
- 谷のしみづ ○岩がさしみづ ○岩もる水 ○岩づたふ水 ○石間の水 ○わきいづる水
- さゞれ水 ○岩根の水 ○庭のやり水 ○山下水 ○水のことろ ○水草ながらに結ぶ
- 水草もる ○水底清き ○水のあや ○板井の水 ○板井 ○松かげの岩井
- 石井づゝ ○板井もる ○岩もる泉 ○にはたづみ ○わきかへる ○せきいろゝ
- 氷るばかり ○つめたき ○雲にも濁らぬ ○清き心 ○音きけば ○あかずもある哉
- 木葉拂ひて ○立よりて ○芝ぬして ○手にむすぶ ○すゞしきあかね ○わきてすゞし ○結ばぬ袖もすゞし
- いくむすび ○結ぶ手に ○手にむすぶ ○あつさわするゝ ○夏なきさし ○夏をもしらぬ ○外より夏を過す
- かたへすゞしき ○秋すゞし ○あつさわするゝ ○夏なきさし ○夏をもしらぬ ○宿れる月のさわぐ
- 秋風かよふ ○秋のくれ ○秋のけしき ○おぼしま ○月ながら ○山松かげ
- 夏の日ぐらし ○日草かりに ○岩がれつたふ ○岩まなせばみ ○岩まぐら
- しげみがもこ

名所 石清水(山城) 臈の清水(同) 走井(近江) 龜井(攝津)
 万 おちたぎつ走井水の清ければわたりは我はゆきがてぬかも
 拾 松かげの岩井の水をむすびあげて夏なき年と思ひける哉
 後拾 さ夜深き岩井の水の音きけば結ばぬ袖もすゞしかりけり
 師 賢 喜 慶 賢 慶 賢 慶

みちのべの清水ながるゝ柳かけしばしとてこそ立留りけれ
 むすぶ手にかげみだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにけり
 夏の日も泉の水にことよせてかたへ涼しき風ぞふきける
 むすぶ手に扇の風もわすられて腕の清水すいしかりけり
 日ぐらしの聲する山の松かけに岩まをくゆる水のすいしさ
 わきかへりみもひすいしきあすか井はけふも夏とも思ほえぬ哉
 六月の夏のうき世をのがれてやいはほの中に水のすむらむ
 うては火のいつる岩ほのいづくよりわけばる水のすいしかるらん
 夏の日をあつさをさくと泉さへすいしき松の下にすむらん
 くもふかき檜原がおくの岩清水こほらぬのみやみな月のそら
 山かげのしみづ結べば底ひよりうかべる如くかよふあきかな
 あかす猶手にもまかまくおぼゆるは結ぶ泉の玉にぞ有ける
 岩がねのこけをつたひて行水に夕は風もおもはざりけり
 山里の板井の水を結びあげて都にしらぬすいしさぞしる

西 行 慈 圓 師 頼 李 廣 徳 大 寺 後 徳 大 寺 廣 徳 大 寺 景 樹 俊 明 直 兄 重 樹 禮 彌 東 喜 千 有 文 朝 臣

○納涼 避暑 すいみ

夏の日あつきをのがれてすいしきかたにゆくとも水邊または樹陰など或は月に對ひ
 或は芝居また家の端居などの涼しきに夏を忘るゝやうに詠りすいみとるといふは誤

なりすいむといひてやがてすいみを取るこゝろなり

- 涼しく澄る月 ○すむ此夜 ○朝すみ ○夕すみ ○下葉すしき ○木の下すみ
- 木々の涼しさ ○しげみにすむ ○立ればすし ○水のすしき ○川邊すしき ○川音すし
- 柳かけ ○ゆくての柳かけ ○松かけ ○松の下かけ ○松のしげみは ○槇の下露
- ならの葉そよぐ ○一木がもこ ○木がくれ ○木ぶあき ○かげふかき ○立つさかけ
- 川かぜ ○吹こす風 ○片帆にかくる風 ○葉分の風 ○竹の下風そよぐ ○木の下風
- ならの下風 ○槇の下風 ○まつの夕風 ○松風も秋の聲する ○扇をよそのものこ ○扇をわする
- しのぶ秋風 ○忍びつゝ吹ける風 ○扇の風 ○扇をよそのものこ ○扇をわする
- 夏の外なる ○夏さもわかぬ ○夏このましき ○夏ならぬ ○かげにわするゝ夏の日
- 六月の空さしいは下 ○秋にまがふ ○秋かにたざる ○秋のけしきは ○秋の聲ある風
- 秋におごろく ○まだきに秋の ○さしも秋の心ち ○かたへ秋なる ○うたゝね ○身にしむ
- はしぬ ○はしぬにふくる ○おばしま ○立ならす ○立よりかれて ○しばしかへらト
- 道ゆく人も ○戀しき人のつこ ○いさゝむら竹 ○くずの葉がへる ○あしのねよる
- 池のはちす葉 ○日かけへだつる松 ○日をさふる ○たそがれの空 ○夕されば
- 夕ぐれの ○夕日がくれ ○夕月のかけ ○夕立のなごり ○夕だちぬ ○夕だつ風
- 村雨のなごり ○せみの聲 ○下ゆく杜のかけ ○夏山のかけ ○夏山のかけをしげみ ○若帖つる川瀬 ○みそぎして
- かた山かけ ○楸生る片山かけ ○川合の槇のすそ山 ○岩まもる水 ○岩たゞく瀧の水
- 音さえて ○瀧のしらいさ ○谷の下水 ○岩まもる水 ○岩たゞく瀧の水
- 岩根の水 ○岩がきしみづ ○岩もる響 ○岩波よする ○清水せく ○水むすぶ
- せきいるゝ水 ○夏より外を行水 ○庭のやり水 ○山の井 ○水むすぶ

行末はまだ遠けれと夏山の木の下かげは立うかりけり

新 恒

夏衣立田川原の柳かげすいみにきつゝならすころかな
ほどもなく夏のすいしくなりぬるは人にしられで秋やきぬらん
風ふけば蓮のうきばに玉こえて涼しくなりぬ日ぐらしの聲
岩だゝく谷の水のみ音づれて夏にしられぬみ山べのさと
岩まより落くる瀧のしらいとは結ばでみるも涼しかりけり
楸生るかた山かけにしびつゝ吹けるものを秋のふかせ
たそがれの軒ばの萩にともすればほに出ぬ秋ぞ下にことよふ
わが宿の外面にたてるならの葉のしげみにすゝむ夏はきにけり
風そよぐならの木蔭の夕すゝみまたるゝ秋もわすられにけり
夏の日もやすの河原の柳はら吹こそ風は下ぞすゝしき
はしたてのくらはし川にかる菅の長き日ぐらしすゝむころ哉
風やどる夕の杜の下すゝみ萩のはそよぐ心こそすれ
いざやこら行てすゝまん大どものみつの濱風松にふくなり
心をばゆく川水にさそはれてあつさを身にはおぼえざりけり
大井川たえずもおろす山松のあらしのかげは夏なかりけり
てりわたるあつき日かげも夕ぐれにうつればさすがすゝしかりけり
島つ鳥鶴のゐる磯の夕浪にあつさも消てゆくこゝろかな

好 忠 川 頼 長 方 成 惠 式子内親王 忠 良 忠 實 仲 實 後鳥羽院 眞 淵 長 淵 景 樹 春 庭 嘉 言

○晩夏 秋近 なつのくれ

両題ともに同じ心得にて遠ふべからず六月の中旬より後の心をよむべしやゝ秋を催
ほすさまなどをよめり

- みそぎする ○なつふかく ○なつはつる ○夏のなほり ○夏はいぬめり ○夏のゆくて
- 夏と秋と行かふ ○秋のさかひに ○秋をかれても ○秋のこなり ○秋遠からぬ ○秋にちかづく
- 秋ちかき ○ちかづく秋 ○あすより秋 ○またき秋 ○ほごもなき ○一夜をこむる
- 衣ひも夕暮 ○くれかゝる ○夕されば ○日ぐらしの聲 ○かたへすゝしき ○衣手すゝし
- 袖におぼゆる ○松の下風 ○西ふく風

夕川の岩はがうへのこけ蒔しくものなしとすゝむころかな
日かげみぬ青葉がくれの山本は夏にしられぬ所なりけり
あもはしる玉島川の柳かげつりする袖もすゝしかりけり
清瀧の波の音のみきゝなれて巖の内にもくらすけふかな

知 紀 鶴 夫 有 功 卿

夏と秋ともきかふ空のかよひちはかたへすゝしき風や吹らむ
みそぎする汀に風のすゝしきは一夜をこめて秋やきぬらん
なつ衣すそのゝ原をわけもげばをりたがへたる萩か花ずり
くれかゝる夏野のすきゝ初尾花秋風またで露ぞこぼるゝ
こよひしもいな葉の風のふきしくは秋の隣になればなりけり
みぞぎ川せゝの玉藻のみがくれてしられぬ秋やこよひ立らん

恒 恒 昭 道 同 人 道 同 人 道

空高く螢をさそふ夕風の身にしりまてになれる夏かな
 おきまさる夕露すいしこむ秋も草の笹のほどやなからん
 なくせみのこゑのきはひもおとろへず暑さながらにくるゝ夏哉
 ねぶの花ちりてなかるゝ川水の早くも夏はくれむとすらん
 つたかづらかゝれる松にはふせみの近づく秋をねにや鳴らむ

眞淵 春庭 永章 千隆 景樹

○夏祓 六月祓 なつはらへ

朝廷にて天下の人の爲に罪穢のまが事を清めたまふとして大祓せさせ給ふを六月祓と云り又私にも物する事にていとく重き神わざなり大祓詞後釋にくはしく記されたり

- みそぎする ○みそぎ川 ○みそぎ川原 ○みそぎすまし ○年月をみそぎにすつる
- はらへぐさ ○夏はらへ ○六月のはらへ ○なごしのはらへ ○中臣のはらへ ○すみやかに祓ふる
- 神もなごむ ○あらぶる神 ○さばへなす神 ○瀬おりつひめ ○速祓の姫 ○伊吹戸主
- 速ますら姫 ○川やしろ ○杜のしめなば ○いぐしたて ○大ぬき ○浅ち眞すげ
- すつる芽の輪 ○ならふすげ ○麻の立枝 ○麻の葉 ○麻の末葉 ○麻のゆふして
- 麻のしらゆふ ○ゆふかけて ○波のしらゆふ ○八針にさきて ○はらへつもの ○あがもの
- 青にぎて ○白にぎて ○おきくら ○千くらおき ○ふさのりさ ○天つりのりさ
- 根圃 ○みにつみみ ○さくなだり ○沙の八百會 ○人がた ○天つ罪
- 罪をばたる ○あがなふ ○れぎごご ○千代いのる ○いはふ心は ○あらぶる心あらト
- 上つ瀬 ○中つ瀬 ○下つせ ○早き瀬 ○瀬々の夕なみ ○夏もゆく瀬

○瀧のせぎりに ○たぎつ早川 ○川波早く ○河波のよるべ ○波もなごしの ○岩こそ波
 ○水上 ○水底 ○水底清し ○かへらぬ水 ○底のも ○風もなごしの
 ○かよふ秋風 ○秋のさなり ○なつみな月の ○夏はつきぬ ○月かぬころ ○一夜をこめて
 ○かへさ夜ぶかき ○かたへすまし ○秋すまし

名所 耳敏川(山城) 賀茂川(同) 糺の杜(同) 吉野川(大和) 飛鳥川(同) 住吉
 (攝津) 田養の島(同) 五十鈴川(伊勢) 豊宮川(同)

拾 六月のなごしの祓する人は千年の命のぶといふなり
 底清みながるゝ川のさやかにも祓ふる事を神はきかなん
 同 さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり
 同 みそぎして思ふことをぞいのりつる八百萬代の神のまにく
 後拾 おもふことみなつきねとて麻のはをきりにきりてもはらへつるかな
 千 いつとてもをしくはあらぬ年月をみそぎに捨る夏のくれ哉
 同 みそぎする河せにさ夜やふけぬらんかへる袂に秋風ぞふく
 勅 風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける
 代 みそぎ川せゝの玉ものあらはれてしられぬ秋やこよひ立らむ
 同 みそぎする袂にふるゝ大祓の引手あまたになびく川風
 大よどの浦にながせるすて衣いせをのあまやみそぎしつらん
 同 あまつゝみはらふ夕は雲吹風もすししくなりける哉

眞淵 長流 土御門院 家隆 俊成 伊衛 長能 同 眞淵

あがものを神やうくらむおきくらはゆるよばかりに夕風ぞ吹
 夕かけて波風すいたがみそぎ速秋津日の神やうけむ
 衣手にすしくかはる川風はふらふみそぎのしるしなるらん
 夕さればかもの川浪たちまちにかたへすしき夏ばらへかな
 みなぎはの茅の輪をめぐる夕汐は年の半やめぐりきにけむ
 みそぎ川なみかすならぬ人がたはふらへすつとも猶やしづまん
 いすい川すいしき浪になりぬより日もゆふしでにかゝるしらなみ
 みそぎする瀧つ早川はやければつもりしつみもとまらざりけり

久 春 大 倉 廣 景 東
 胤 滿 平 監 海 庵 樹 喜
 子

今古和哥宇比麻奈備

鈴木重胤 編輯

秋之部

○秋

- 秋されば ○秋ぞさや ○秋さいへば ○秋のしるし ○秋の日かけ ○秋の色
- 秋寒み ○秋の霜 ○秋の露 ○秋のしぐれ ○秋の風 ○秋の空
- 秋のこえ ○秋のあはれさ ○秋の袖 ○秋の野 ○秋ぐさ ○水の秋
- 露霜の秋 ○人の秋 ○心つくしの秋 ○西こそ秋 ○龍田彦 ○龍田姫
- 長き夜 ○うすき日かけ ○あはれなる ○物さびし ○わびしき秋

○立秋

あきたつ日

- 立秋は七月の節をいふなりされど朔日をもよめる事立春元日のこゝろえにおなじ
- 秋たつ ○秋たつけふの ○秋に入たつ ○秋風たちぬ ○秋のぼつ風 ○秋はきぬ
 - 秋は來にけり ○秋きぬさ人にしらるゝ ○秋くるよひ ○秋されば ○秋の色にも
 - 秋はけふより ○秋は袖より ○秋のけぢめ ○いつしか秋 ○けさより秋 ○くる秋
 - うき秋 ○うべも秋たつ ○來る秋しるし ○いかでか秋の ○衣に秋はきたる ○年も半過る
 - きのふの夏 ○きのふにも似ぬ ○そらのけしきも ○風ぞ身にしむ ○風のおまにぞ ○風かはる
 - 吹かばる風 ○吹夕ぐれの風 ○けさ吹風 ○夜のまの風 ○西吹風 ○まつ吹風
 - 朝けの風 ○けさの朝け ○一夜のうち ○波のこゑも ○露おきそむる ○扇わするゝ
 - 萩の葉風 ○萩の葉そよぐ ○かならず萩の上葉 ○桐のひと葉おつる ○桐の葉おつる

○玉まぐらさず ○八重むぐらさしこもる ○やへむぐらしげる宿 ○浅茅の露
○音ぞ身にしむ ○衣手寒し ○秋かろげ ○袂すましく ○いやましに涼しく
○朝戸出すすし ○いつの間に ○打つけに ○いつしかも ○かはるさなしに ○うらめづらしき
○うらかなしがる ○身にしむもの ○もろきなみだ ○目にはさやかに ○たれにさばまし

秋きぬと目にはさやかにみえねども風の音にぞおどろかれぬる
打つけに物ぞかなしき木葉ちる秋のはじめをけふぞとおもへば
八重むぐらしげれる宿のさびしさに人こそみえね秋は來にけり
とことばに吹夕ぐれの風なれど秋たつ日こそすいしかりけれ
いつもきく麓の里とおもへどもきのふにかはる山おろしの風
秋きぬと松吹風もしらせけりかならず萩の上葉ならねど
ひとよせの夢のなかはやおどろきぬまたねゆるすな萩の上風
けさはしも竹の林ぞそよぐなる世は秋風の立やしぬらん
秋きぬとはつ風立てくづの葉のうらの隈をみするなりけり
みよし野のみくまが菅の下にのみ吹ける秋の風たちぬなり
世にはまだ名のみ立らむ秋風のやがて身にしむ山の奥哉
柴かこふ外面の瓜生露みえて我山かげも秋は來にけり
をしと思ふわが床夏もうつろひて露の身にしむ秋はきになり

○初秋 早秋 新秋 秋のはじめ

敏 行
よみ人
嘉 慶 實
公 實
後徳大寺
權 大 夫
長 流
眞 淵
廣 海
景 樹
知 紀
顯 忠
有 功 痴

三題ともいづれも秋たちて五六日のほどをよむなり初春早春の例におなじま
の心をよむも難なし

○初秋しるき ○はつ秋かぜ ○秋のはつ風 ○秋風寒し ○秋風たちぬ ○秋風たちて
○秋まだあさき ○秋めく ○秋の空 ○秋のけしきに ○秋さいへば ○秋はまだ
○はつめの秋 ○空さゆる ○夜長き秋 ○かなしき秋 ○涙にも秋の ○こころもなげば
○夏衣まだかへなくに ○夏衣まだ一重なる ○空のけしきも ○夕月 ○夕月夜
○三日月 ○初霧 ○朝霧 ○雲のけしき ○風におどろく ○天津風
○空吹まよふ風 ○山下風 ○けさの初風 ○朝けの風 ○はさ吹風 ○萩の葉風
○稻葉吹風 ○まつ吹風も ○松吹風はこまに ○あしの葉風 ○心してふけ ○夜はに吹しく
○音吹かへて ○音こそあらめ ○音づれしより ○濱松音まさる ○ちり初る一葉 ○下葉かつちる
○葛の葉 ○葛はひかゝる ○浅ちが原のうつろふ ○なびく浅芽 ○萩の初花
○草のはつ花 ○草の葉むすぶ ○露をたづぬる ○露かけし ○露おき初る ○露しり初る
○ならず扇 ○扇わするゝ ○扇の風ぞかはれる ○さよでふす圍の ○松虫の初聲さそふ
○外面の小田 ○わさ田 ○いくかもあらぬ ○けふやいく日に ○今よりの夕 ○けさだにかなし
○けさの朝け ○ほのかにけさぞ ○此朝け ○明ぬるか ○ながき夜 ○衣手すまし
○袂すまし ○たもさ寒し ○やまはだ寒し ○身に入そむる ○身にしめこ ○そばましものを
○早しらねぬる ○いさはやも ○いつの間に ○いづくにも ○かれておもひし ○涙もよほす
○こころかなし ○うらがなし ○あはれをしらぬ ○あはれしる ○さびしさも

万 秋たちていく日もあらねばこのねぬる朝けの風は袂寒しとも
同 けさの朝け秋風寒しとはつ人鴈が來なかん時ちかみかも
安 貴 王
家 持

露かけし袂はすまもなき物をなど秋風のまだき吹らむ
 おのづから秋は來にけり山ざとの葛はひかゝる楨のふせやに
 ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかへねさびしかりけり
 水ぐさの岡の葛葉もいろ付てけさうらがなし秋の初風
 くれもかば空のけしきのいかならんけさだにかなし秋の初風
 秋きぬとしらできくとも大かたはあやしかるべき風の音哉
 東路は衣手寒し白雲のあはらがたけの秋のはつかせ
 粟田山ふもとの粟生いろつきて薄ぎりなびき秋風ぞ吹
 秋のきてまだ淺からぬ外山にも軒ばの松は聲かはりけり
 日をさへてかげは夏なき桐の葉のちりのまがひに秋風ぞ吹
 年ごとにいひふるしつる事ながらあはれなるべき秋は來にけり
 あかつきの野澤の鳴のいはがきまづあはれなる秋をしるかな
 秋風はわきてふかじを萩の葉の音にのみこそ聞初てけれ
 秋といへば袖にもかろくちり初て露は草葉にかぎりざりける
 朝づく日いまだ匂はぬ山のはの松の葉わたる秋のはつ風
 ほし月夜雲の風の音ふけて松にさだまる秋の聲哉
 大空の月もすゞしとおもふらん山の麓に秋かせぞふく

千 里 信 經 覺 顯 家 忠 眞 蘆 千 春 周 長 知 依 景 久 有
 里 信 忠 昭 隆 度 淵 摩 隆 夫 乘 穠 紀 平 樹 胤 卿 有

○殘暑 のこるあつき

秋になりてもいまた炎熱のやまざる心をよむべし
 ○秋のあかつき ○秋までも ○秋の日かげ ○秋あさき ○夏の残る
 ○夏のけしき ○夏さほのめく ○夏よりここに ○夏をわすれぬ ○まだ夏がさも ○ぬぎかへぬ夏衣
 ○あつき日かげ ○扇おきあへぬ ○扇はなため ○扇わすれぬ ○扇さる手 ○風をまつ
 ○風なつかしき ○風たえて ○萩の上風 ○清水猶むすぶ ○あかねほしぬ ○眞くず原
 玉 夏深き日かげに夏は残れどもくゝるまがきはをぎの上かせ
 六 秋風の吹もつよらぬ眞葛原夏のけしきに猶かへる哉
 同 秋きてもまだひとへなる衣手にいとぬ程の風ぞ吹ぬる
 同 秋きても猶夕風をまつがねに夏をわすれし陰ぞ立うき
 秋はまだてる日もつよく吹風の身にしむべくもあらぬ空哉
 宮城野や秋なほあつき木の本の露なき草に風を待哉
 萩の葉にきけば秋なる聲ながら暑さは風にまかせざりけり
 けふもまたあつさしられてうすぎりの梢にかわく朝ぼらけ哉
 ともし火のかげはなびけど秋風のすゞしき程もふかぬ夜は哉
 あつき日のひねもす風は吹ながら秋になりたるしるべともなし

慈 有 家 定 眞 正 眞 曜 久 長 東
 家 隆 家 徹 淵 月 風 喜 子

○七夕 乞巧奠 なぬかの夜 たなばたまつり

此夜牽牛織女の會ふといふあとなしごとに神のみふみなる天棚機姫命の事を附會し

天の川みごもり草ぞなびくなり今やわがせこみ舟よすらし
 たなばたのそらだきものよけぶりこそ秋のさぎりのはじめ也けれ

美 樹
 有功 卿
 172

○七夕後朝 のちのあした

棚機のかへるあしたのさまなり後朝戀などのおもむきによむべし

- 天河かへらぬ水 ○立かへる天の川なみ
- つらきわかれ ○あかねわかれ ○さしのわかれ
- かへさの袖 ○袖ぬれぬ ○なみだの色
- おもひのけぶり ○おもひやらる ○天の月明る
- 曉の露 ○きのふまで ○かぎりありて
- 道の露草 ○きりぎりす
- 和かるよあした ○わかれては
- かへりみぢに ○かへさの船
- なみだの露 ○なむしむ露
- 朝月明て ○あけぬこの夜
- 今こんとし ○後のあふ瀬
- 川ざりはる
- わかれの空
- つまおくり舟
- 露のちざり
- 明るほごなく
- 川ざりはる

けふよりは今こん年のきのふをぞいつしかとのみ待わたるべき
 天河わたらん空もおもほえずたえぬわかれとおもふものから
 朝戸明てながめやすらんたなばたのあかね別の空をこひつゝ
 かぎりありてわかるゝ時もたなばたの涙の色はかはらざりけり
 天河かへらぬ水をたなばたはうらやましとやけさは見るらむ
 立かへるあまの河なみ吹風の身にしむばかりつらきけさかな
 天河きのふのあふ瀬なかくにけさはおもひのふちとなるらん
 まれにあふけさのわかれや朝顔の日かげもまたぬ思ひなるらん
 かきくらす心のやみの朝びらきうき世にかへる天の川なみ

忠 岑
 よみ人
 貫 之
 内 大 臣
 成 仲
 師 時
 春 滿
 三 冬
 依 平

一年をまたむわかれにおとろへて花のかざしもしほむけさ哉

法 樹

○萩 をぎ

多く風を結びてよめり音をよみて風なき哥もみえたり葉と葉とすれあふをともしり
 といへりさやぐそよぐも萩のこゑなり海邊水邊などにもよめり

- 萩原 ○萩の一むら ○萩のこゑ ○萩の音 ○萩の初穂 ○萩のさもすり
- 萩の葉 ○萩の葉分 ○萩の葉むけ ○萩の上葉 ○萩の下葉 ○萩のかれ葉
- 萩の葉風 ○萩の上風 ○萩吹風 ○庭の萩原 ○濱なぎ ○からなぎ ○さゝらなぎ
- かきほのなぎ ○外面のなぎ ○あしへの萩 ○軒ばのなぎ ○軒の下なぎ ○露の下萩
- 松の下萩 ○枕の下なぎ ○山下なぎ ○末葉の露 ○さやぐ ○片よりに
- 末 ○そよぐ ○打そよぐ ○そよぐも寒し ○いつもなびげ ○音こそそよげ
- 音づれ初る ○音ぞのこれる ○音せぬよりも ○音のあはれさ ○音ぞかなしき ○風打そよぐ
- 風の吹よる ○風におきふす ○風のつまなる ○風のやどり ○風こそわたれ ○風わたる也
- 風になみよる ○末こそ風 ○葉むけの風 ○なびかす風 ○いつもきく風 ○人だのめなる
- 秋風寒し ○秋風の聲 ○そよや秋風 ○夜牛のあらし ○露吹みだす ○露のしら玉
- 雨にしなる ○雨の音にかよふ ○ひざりぬて ○れざめにきく ○わがひざりぬ ○夢もみはてぬ
- 枕になる ○枕にそよぐ ○夕をわきて ○秋をしらす ○秋さやかなる ○物おもふ宿
- やゝはだ寒く ○こそぞもなく ○我身にしてみて ○なれにこたふる ○おごるかれつ ○こは世にしらぬ
- ありてうき ○植てくやし ○涙もよほす ○涙おちけり ○なれてもかなし ○あはれそふ
- あはれ身にしむ

名所 難波江(攝津) 伊勢の濱(伊勢) 若の浦(紀伊) 武藏野(武藏)

神風の伊勢の濱萩をりふせて旅ねやすらんあらし濱べに
秋風のふくにつけてもとはぬ哉萩の葉ならば音はしてまし
さりともとおもひし人は音もせで萩の上葉に風ぞふくなる
常よりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜はの萩の上風
夕されば萩の葉むけを吹風にことごとくなく涙落けり
いつしかと萩の葉むけのかたよりにそいや秋とぞ風もきこゆる
なほざりの音だにつらき萩の葉に夕をわきて秋風ぞふく
大かたも秋吹風は身にしむにこは世にしらぬ萩のおとかな
秋風のやどりとのみは植ざりき一夜もおちぬ萩のおとかな
夕露をおのがうへにはほしなから萩吹風を袖ぬらしける
も草の多かる中にわきてなとうたて吹らむ萩のうは風
風の音をきかむたよりにうゑし萩思の外に人まねきけり
山ざとはものわびしらになりにけり萩むらさわぐ秋の夕かせ
さびしさはいふに堪たる秋なるをわびよと萩のおどろかすらん
さびしさをきくには君が來ざるらん心もしらぬ萩の上かせ
世の中の音づれよりもうかりけり山の軒ばのをぎの上かせ

○萩

はぎ

よみ人 中 小 頼 後 崇 信 長 依 契 眞 千 魯 邦 景 同
しら 右 眞 徳 徳 方 平 沖 淵 蔭 道 直 樹
務 近 眞 院 實 平 沖 淵 蔭 道 直 樹

いにしへは萩をめぐるも花のみにあらず下葉のもみづるをもまた露などをもては
やすよしによめり

- 萩が枝 ○萩が花ざり ○萩が花妻 ○萩のあそひ ○はぎのにしき ○萩のみだれ
- 萩の下折 ○萩の下葉 ○萩の下枝 ○眞萩 ○いと萩 ○玉はぎ
- から萩 ○むらばぎ ○しらばぎ ○打むむ萩 ○ほころぶ萩 ○ひもさく萩 ○ふるえの萩
- ひもさく萩 ○露おくる萩 ○すその萩 ○小萩 ○小萩がもこ ○小萩原 ○にほふ萩原
- ももあらの小萩 ○秋ばぎ ○秋萩の花 ○萩原 ○さける萩原 ○にほふ萩原
- さく ○匂ふ ○花になりゆく ○色うつるふ ○わかむらさき ○こき紫
- こむらさき ○下葉染つゝ ○下葉もみづる ○ちりなげをしこ ○ちりはつるまで ○ちらまくをしも
- 枝たわにさく ○枝ながらみよ ○枝よわみ ○末たわむまで ○打なびく ○しをれあふ
- 物思ふ草のたもこ ○きりのさばり ○きりのまがき ○秋の雨に ○秋風なびく ○風の吹しく
- おくらん露 ○しら露もいろくに ○しら露おもく ○露にほころぶ ○露のしがらむ
- 露のみだれ ○露ながらみん ○露おける ○露なりながら ○露吹おさす ○露吹むすぶ
- 露さよにも ○花ざり衣 ○袖にうつる ○袖匂はず ○分ゆく袖 ○をらでは過じ
- 折てみば ○折てをゆかむ ○をらでやまめや ○をれねばかりも ○いさみにゆかむ ○よしみん人は
- こへかしな ○立よれば ○しめし野 ○鹿のむれなく ○鹿のしがらみ ○わたるかほにて
- 物おもふ宿

名所 紫野(山城) 春日野(大和) 高圓野(同) 交野(河内) 遠里小野(攝津) 野路の玉

川(近江) 宮城野(陸奥)

万 秋田かるかりほのやとり匂ふまでさける秋萩くれどあかぬかも

よみ人 しら

見まくほりわがまちこひし秋萩は枝もしみみに花咲にけり
 高圓の野べの秋はぎ此ごろのあかつき露にさきにけむかも
 秋萩のふるえにさける花みればもとの心はわすれきりけり
 秋萩の花咲にけり高砂の尾上の鹿は今や鳴らむ
 うつろはんことだにをしき秋萩にをれぬばかりもおける露哉
 朝な〜露おもげなるはきがえに心をさへもかけてみる哉
 あすもこん野路の玉河萩こえて色なる波に月やどりけり
 ふるさとのもとあらの小萩咲しより夜な〜月の影ぞうつろふ
 秋萩のこぼるゝ露のをしければをれふす枝をなほさでぞみる
 をしかふす野べの秋風吹そめてほころびにけり萩が花妻
 萩が花かきぬもたわにさく時は野べもおもはぬ物にぞ有ける
 萩が花露とよにもちり初ておなじかけにしたまりつる哉
 わが宿のかきねあれぬとおもひしに萩は花こそ咲はじめけれ
 みわたせば萩のしなびぞまさるなるけさ白露や置おもるらん
 秋萩の露もさかりになりしより風に心をおかぬ間ぞなき
 一むらの萩のさかりにうづもれて垣根の井戸はくまれざりけり
 露とだにならんひまなくふる雨にぬるゝばかりの秋はぎの花

同 家 恒 持 敏 行 恒 伊 勢 周 防 内 侍 俊 頼 攝 政 眞 淵 廣 海 同 直 好 御 杖 知 紀 景 樹

○薄 尾花 すゝき をばな

はたすゝきとは鱒を波太とよめる如く物外にはり出る義にて花すゝきといふにおなじく穂に出たるさまをいへりしのすゝきとは其葉小竹に似たるもゑなり尾花とは薄のはばかりをいふ

- すゝきおしなみ ○花すゝき ○初花すゝき ○初穂のすゝき ○ます穂のすゝき ○しのすゝき
- しのゝをすゝき ○糸すゝき ○むらすゝき ○ひさむらすゝき ○ひさもすゝき ○はたすゝき
- すぐろのすゝき ○まれくすゝき ○庭のをすゝき ○原野のすゝき ○入野のすゝき ○ふもこのすゝき
- かた山すゝき ○外山のすゝき ○穂すゝき ○穂なみ ○穂にいづる ○穂にいづる秋は
- 穂に出てまれく ○穂にはまだ ○しらゆふ尾花 ○初尾花 ○尾花 ○尾花かたよる
- 尾花の袖 ○たがふる袖ぞ ○まれく袖 ○袖の敷そふ ○眞袖おぼゆる ○まれく袂
- 草のたもと ○人まれく ○末なびく ○かたよりなびく ○露にもなびく ○なびきふす
- あはれかたよる ○むすばせて ○風のまゝなる ○風のやざり ○風だちて ○露にふす
- 露ながら ○露をおもみ ○露にぬれたる ○露したまらぬ ○しら露 ○朝露に
- 夕露しげき ○置露しげき ○おく露はらふ ○なみだの露 ○入野 ○うへ野
- 末野 ○しめ野 ○淺野 ○あだし野 ○野べのゆきゝ ○ふもこのゝべ
- いくたび岡べに ○岡のべ ○なぎさの岡 ○入江 ○川さし ○つみ
- ふる里 ○あれたる宿 ○道のゆくて ○行ずり ○行かふ人の
- 心ざ人を ○こひしき人に ○たゞには過下 ○いづれともなく ○うらなくも ○秋はわびしかりけり
- うゑてだにみ

名所 小倉山(山城) 片岡(大和) 須磨の上野(攝津) 昆陽野(同) 眞野の入江(近江)

萬 古 同 拾 後拾 金 新 六

めづらしき君が家なるはたすゝき穂に出る秋のすぐらくをしも
今よりはうゑてだにみじ花すゝきほに出る秋はわびしかりけり
君がうゑし一むらすゝきむしのねのしげき野べともなりにける哉
こてふにも似たる物かな花すゝき戀しき人にみすべかりけり

さゝてだに心のとまる秋の野にいとまもまねく花すゝき哉
うづらなく眞野の入江の濱風に花波よる秋のゆふ暮

小倉山ふもとの野べの花すゝきほのかになびく秋の夕暮
いかばかり風のつらさに花すゝき吹くる方をまづそむくらむ

秋風の松をしらぶるたび毎に岡べの尾花袖かへすなり
なほざりにうゑしまがきの花薄秋をなぐさむふしも有けり

秋風にむすばゝれたる夕ぐれのを花が末は萩にまされり
ひとかたになびきそろひて花薄風吹時ぞみだれざりける

くれなのうす花すゝき打なびき朝日さやかに野はなりにけり
吹はらふ風に袂をまかせても猶露しげき花すゝきかな

花すゝきなびく交野をわけくて天の川原に秋は來にけり
かりがねのなびき落たる西の野のはつ花すゝき家づとにせん

○女郎花

をみなべし

廣 貞 有 實 師 俊 同 春 枝 尊 景 美 春 有 同
成 文 助 賢 賢 頼 人 浦 直 孫 樹 隆 庭 功 卿

大かた女にとりなしてよめり但男のよまんはいかやうによむとも難なけれど女の此
題をよまむにはみづからも女なれば女にたとへてよむうちにも心えあるべきことよ
いへり

- 花の名たて ○花のすがた ○花の下紐 ○花の秋 ○花も一時 ○花にも葉にも
- あだなる花 ○えならぬ花 ○咲る野づら ○匂ふ ○匂ひこぼるゝ ○いろめく
- あだなる色 ○香こそしるけれ○しなるゝ ○しをれふす ○たばるゝ ○風にたばるゝ
- なびく ○一かたになびく○をれふして ○もろむきに ○くれる ○一時をくれる
- 立るけしき ○名をむつまじみ○名にめでゝ ○打たれがみ ○あだに立名 ○あたなれば
- あなかしまし ○うゑるめだし ○よそほしき ○たをやか ○なつかしく ○雨にしなるゝ
- 雨にうたるゝ ○露になびく ○露におきふす ○露をかざる ○露の手杭 ○せき出し露
- 夜はのなごり ○よるもやれなん○秋露に立かくる○秋露にみれおくれ○秋にのみあふ○秋より外に
- たが秋風に ○たれにかたらん○たれにたはれて○なる袖ねらす ○なる袖はらふ ○ものおもふ袖
- ひさりのみ ○人しれずこそ ○かりにのみ ○心おく ○いさをなづくは○いつしかなるゝ
- 方も定めず ○日ぐらしにみる○しめゆふ宿 ○水かゞみ ○おふる澤べ ○多かる野べ
- 色めく野べ ○なまめく野べ

名所 男山(山城) 嵯峨野(同) 伏見野(同) 朝の原(大和) 阿陀の大野(同) 天の
川(河内) 武藏野(武藏)

萬 同 秋の田のはむきみがてり吾せこがふさ手折ける女郎花かも
高圓の宮のすそみの野づかさに今さけるらん女郎花はも 家 持

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿に獨たてれば
 おみなべし句へる秋のむさし野は常よりも猶むつまじき哉
 もく水のきしに句へる女郎花しのびに波やおもひかくらん
 あだし野の露吹みだる秋風になびきもあへぬ女郎花哉
 女郎花なびくをみれば秋風の吹くる末もなつかしき哉
 をみなべしみるに心はなぐさまでいとむかしの秋ぞこひしき
 夕されば玉しく野べのおみなべし枕さだめぬ秋風ぞふく
 何となく吹過てもく秋風にいつしかなるをみなべしかな
 おみなべし露のさかりをしら露にうつしておのがかけたのむらし
 うすぎりにすきかけ句ふ女郎花心ひかる秋の野べかな
 女郎花なまめくとのみ見るが内にきりの色にはたかくれけり
 秋の野によろほひ行はをみなべしわらふに似たる風の聲哉
 女郎花秋の日かすの老もけばかざしの露や霜とみだれむ
 女郎花あかぬあまりにおく露の深草野べも分なれにけり
 秋風のつらき心はしりながら猶うちなびくをみなべしかな
 秋風にひとりふかれて女郎花やせたる花のあはれなるかな
 われならで人にあひみぬ女郎花おふるはあれし垣根なれども

兼覽王 貫之 重之 公實 雅兼 清慎公 眞平 經盛 蘆庵 千蔭 廣海 清光 勝繼 譽祐 廣足 直兄 景樹

○浅茅 あさぢ

葉色づき花ちり露すがりなどしてをかしきけしきあれば例の多きに随ひ秋にむねとよむよし

- 茅 ○茅ふ ○ちばら ○つ花 ○浅ぢが花 ○浅ぢふ
- 浅ぢ色づく ○浅ぢがうへ ○浅ぢがもこ ○浅ぢふの宿 ○浅ぢふの庭 ○あさぢばら
- 浅ぢが原 ○浅ぢ野 ○浅ぢふの小野 ○うら葉 ○末葉色づく ○色かばる
- うつろふ ○打なびく ○しめゆふ ○露のかぎり ○露むすふ ○おくしら露
- むら雨の露 ○あれにけり ○秋風に ○君に似る

秋はぎは咲ぬべからしわが宿の浅ぢか花のちりもくみれば
 けさの朝け鴈がぬ寒くきしなべ野べの浅ぢぞいろ付にける
 山たかみ夕日かくれぬ浅ぢ原後みんためにしめもはましを
 秋さればおくしら露にわが門の浅ぢがうら葉色付にけり
 浅ぢふの露けくもあるか秋きぬと目にはさやかにみえける物を
 秋といへばちぎり置てやむすぶらん浅ぢが原のけさの白露
 秋のゆく野山の浅ぢうらがれて峯にわかるゝ空ぞしぐるゝ
 露むすぶ秋にははやくなりにけり浅ぢが原のうつろふみれば
 なほざりの小野の浅ぢに置露も草ばにあまる秋の夕ぐれ
 はつかなる浅ぢが末の白露にかけこそこのこれ有明の月

穂積皇子 聖武天皇 よみ人 しらす 同 二品法親王 惠慶 雅經 顯季 定家 竹翁